SECESSION & ADHESION VOL.1

EL ZINE

Scatha AVSKUM PERSEVERE

PRANK BURIAL Souichi from UNDER THE SURFACE

SEE YOU IN CZECH チェコ共和国ハードコアパンク・シーン・レポート

MOONLESS



KASPER/NO HOPE FOR THE KIDS ETC

HASSE/HJERTESTOP ETC

KENNI/VILLAGE IDIOT ETC

TOMMAS/GORILLA ANGREB ETC

STONER ROCKNROLL FROM K-TOWN MOONLESS

contents vol.1

P03 MOONLESS
P07 SCATHA
P11 AVSKUM
P13 KEN from PRANK RECORDS
P19 SOUICHI from UNDER THE SURFACE/FORWARD/SMASH DETOX
P23 WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING - SPAIN
P25 GOUJIROU from CARAVANA ANARQUISTA/JADOO/NAGAUTA-SHAMISEN-SOUSHA
P29 UMEA PUNK CITY ZINE
P31 PERSEVERE
P34 SHOKU-TANTEI - SHOUSETSU - SHUMI
P35 SEE YOU IN CZECH - SCENE REPORT FROM CZECH REPUBLIC
P43 BURIAL
P45 ALARME
P49 LASHING SPEED DEMONS
P51 KISS THE DISC
P53 SYSTEM FUCKER
P55 DARGE
P58 EDITOR'S NOTES





welcome to RITUAL →

前号を発行する前から、"次の表紙/巻頭はMOONLESSにしよう"と勝手に決めていた。
MOONLESSはデンマークのGORILLA ANGREB、NO HOPE FOR THE KIDS、HJERTESTOP、DEATH TOKENなどといったコペンハーゲン・ハードコア/パンク・ロック・バンドの錚々たるメンツが結集しているバンドだ。しかもそのサウンドは前述したバンドとは似ても似つかないストーナー・ロック。
あくまでも個人的な印象だが、スウェーデンのex.DS 13～IMPERIAL LEATHERの138がヘヴィ・ロックに根ざしたバンド、SONIC RITUALでプレイしたりと、"ハードコアからパンク・ロックに移行し、更により自身のルーツに近いロックへ"という流れが、近年生み出されているように感じる。既に一定の理解を得られている場所から心機一転、異なる場所へと飛び込んでいく、その動きも刺激的だ。MOONLESS自体、まだ正式音源すらリリースしていない。順調にいけば、2010年の頭に初音源が発表されるだろう。恐らくこれが彼らの世界初となるインタヴューだ。多くの人たちを魅了したK-TOWNパンクスの現在に、興味を持ってもらえたら嬉しい。



MOONLESSは70年代ヘヴィ・ロックと その素晴らしきリフというルーツに、より深く根ざしている

Photo by Tania Andersen

Photo by Lea Fuglsang



■まずはMOONLESS結成の物語を聞かせて欲しい。

Kasper「このバンドはかなり長い時間をかけて進行していった。俺が思うに、最初のラインナップはHasseがギター、Steffen(Death Token/Love Potion)がドラム、そして俺がベースという感じだったはずだ。それから間もなくして、Theis(Död Ungdom/Leathervein)がヴォーカルとして加入して、しばらくの間、このメンツで時々リハーサルをするようになっていった。そうするとSteffenがバンドを抜けた。Hasseと合わなかったみたいだな。そのすぐ後にNikolaj(Hjertestop/Död Ungdom/Leathervein)がドラムとして加入。このラインナップは2、3ヶ月もったよ。ただ、Nikolajがリハビリに行かなくちゃいけないもんで、また全てが止まった状態になった。 Theisは新しいバンドを始めてたし、彼は間もなくアメリカに行くことになっているのも、俺とHasseは知っていた。だから、俺とHasseだけで最初から再びやり直そうと決めたんだ。俺たちは1、2箇所のスタジオで俺たちにマッチする人材を探し求め、そして曲を再びアレンジし直したりしていた。 その後、 Tommasに遅いストーナー・ロックンロールをやってみないか頼んだんだ。ようやく、俺たちにとって必要なのはヴォーカリストのみになった。だが、ヴォーカリストを見つけるのはほとんど無理なことも分かっていった。だからヴォーカルなしでやっていたりしたんだが、思いがけず、Kenniが電話して来たんだ。俺たちがヴォーカルを探しているという話しを聞いたってね。あいつはこのバンドでヴォーカルを務められるのは自分以外あり得ないと信じていた。それに俺たちも賛同して、ようやくバンドは再び動き始めたんだ」

■このバンドのロゴにはどんな意味が隠されている?太陽みたいだけど。

Kasper「お前は面白いことを言うな、俺は本当にそんなこと全然気づきもしなかった。映画館のチケット売り場で働いている時に俺が描いたんだよ。映画が上映されている暇な時間を使って、このロゴをね。最初のアイデアは、円の中に言葉を無理矢理入れてみようと思った。サイケデリックな感じでさ。で、出来上がったらなかなかイケてる。だけど何かがまだ欠けていると感じたから、炎みたいなのを淵に沿って描き足してみた。太陽みたいなロゴと、Moonless(月がない)って名前が一緒にあるってのも、良いんじゃないかな」

■Kenniのキャリアは知らないけど、他のメンバーは全員パンク・ロック/ハードコア・バンドを経験しているはずだよね。だけどみんな、BLACK SABBATHみたいなバンドのファンでもあるの?

Kasper「俺は自分のことについてしか話せないけど、もしお前がエレキ・ギターを含む音楽を始めようとするなら、リフを生み出す偉大なる二つのバンド、BLACK SABBATHと、AC/DCを無視することは不可能なはずだ!そうだ!俺は10代後半の頃からBLACK SABBATHを聴いてきた。だけど俺は本当に知らなかったんだ、そこにストーナー/ドゥームなんてジャンルがあることはな。しかしそれからPentagram、Coven、Cathedral、Kyuss、Electric Wizard、Sleep、Candlemassといったバンドを発見していったんだ。大部分は最初のドラムだったSteffenが教えてくれた。あいつとはアパートの部屋を共有していたからな。それからだ、突然クサをたくさん吸うようになって、あらゆるスロー・ミュージックを聴くようになったのは。素晴らしい時間だったぜ!」

Tommas「パンクを聴く他にも、俺は多くの60'sと70'sのロックがいつでも好きなんだよ。もちろん、BLACK SABBATHからは凄く影響されている。けど、Screaming Lord SutchにSir Lord Baltimore、Led Zeppelin、初期のAlice Cooperや無数の古いバンドからも、個人的にはインスピレーションを受けているんだ」

■パンク・ロック/ハードコア・バンドを組むのが自然かと思ったけど、そうではなかったね。どうして?

Kasper「俺はDeath Tokenでまだハードコアをやっているし、Agro Jive(myspace.com/agrojive)というソロのパンク・ロック・バンドもやっているぜ。けど、そうだな、主な理由は、俺たちはたくさんの異なった音楽も聴いている。だから俺にしてみたら、パンク・ロックだけをプレイする、というのは凄く制限されている感じなんだ」

Tommas「うん、人々がGorilla AngrebやNo Hope For The Kids、Hjertestopみたいな



Photo by Lea Fuglsang



Photo by Lea Fuglsang



Photo by Tania Andersen

別のシーンの中で、成し遂げることがバンドにとってはより良いことだと思っている

サウンドのバンドを期待するのは分かるよ。ただ、俺たちが過去にやってきたバンドと、このバンドは完全に異なっている。俺は今でもここのパンク・シーンとは深く関わっているよ。けど、パンクスだけにアピールするわけではない、このバンドもとても楽しんでいる。パンクスが、俺たちみたいなのを好んでくれたら最高だね、他のシーンでプレイすることも魅力的だよ」

■では、MOONLESSはメインのバンド?それとも、プロジェクト・バンド?

Tommas「これはプロジェクト・バンドじゃないよ!俺たちが今やっていることはメインさ。俺たちは出来うる限り続けていきたいと思っている。Kenniは違うバンド(The Village Idiot)もやってて、それも凄くアクティヴなバンドだけど、彼は両方のバンドを両立出来ているよ!」

Kenni「そうだ!2つの全く異なるバンドでプレイするのは、俺にとって本当に楽しいことなんだ。そうすることによって、多くのムカムカした感情を取り除くことが出来る。実際、"The Village Idiot"(http://www.myspace.com/thevillageidiotdk)の古い歌詞をMOONLESSで使ったりしている。完璧にフィットしているしね。MOONLESSは急速に発展している。このバンドでプレイするのは最高だ!当然、これが俺のメイン・バンドだ!」

Kasper「始めた頃は単なるプロジェクトだったんだが、間違いなく俺のメイン・バンドの一つになった」

■初ライヴの感想を聞かせて。日本のCHURCH OF MISERYと一緒だったんだよね。それは大きなフェスティバルだったの?

Kasper「最高の夜だった!!俺たちはデビュー・ギグをやる準備は整っていたし、どこか出来る場所を探していたんだ。そしたらここ、コペンハーゲンの素晴らしいライヴ・ハウスで突然CHURCH OF MISERYがやるっていうんだ。俺はすぐに彼らのブッキングをしていた男(Nilsっていう凄く親切な奴)に連絡をとった。そしてCHURCH OF MISERYのサポートをすること、出演することは可能か尋ねたんだ。恐らく、俺がこれまでやってきたどのバンドのデビュー・ギグよりも最高だった。Brutal Knightsと、全能たるCHURCH OF MISERY!バックステージで話したら彼らは本当に魅力的な人たちだった。素晴らしい夜だった!」

Tommas「MOONLESSにとって最高のファースト・ショウだったね。大きいフェスティバルではなかったけど、中くらいの規模のライヴ・ハウスでね。多くの人たちが見に来てくれたし、CHURCH OF MISERYはグレートだった!俺たちの曲に対する反応も、同様に素晴らしかったと思う」

Kenni「あそこのライヴ・ハウスで、とても楽しくプレイ出来たよ。俺たちのMyspaceのページから、当日の模様をチェック出来るよ」

■歌詞の内容についても、いくつか聞かせてもらえる?

Kenni「悪魔の儀式を用いて女をたぶらかすこと、良くないことだってのは分かっているけどな。それに酷い憂鬱と、怒りのように前進しようとする気持ち。それと愛」

■英語で唄っているよね。どうしてデンマーク語で唄わないの?

Kenni「俺は大昔にその質問を聞いたことがある。喜んで答えよう。音楽とはコミュニケーションのことだ。地球人口の大部分が英語を理解し、そして俺には世界中に友人がいる。俺たちは、自分たちの音楽をみんなと共有したい。それが俺が英語詞を使う主立った理由だ。それと、素晴らしいインスピレーションとなったBLACK SABBATHに対する尊敬の念のようなものも、あるかもしれない」

■では、デンマークには大きな"ストーナー・ロック・シーン"のようなものはあるの?

Kasper「本当に分からないな。あるようには思えないけど。もちろん、2、3個は良いバンドはいるけど、それらはまた異なるジャンルになると思う。お前も知っているように、この国はとても小さい。だから良いバンドをやる人間の数もとても限られている。もう少し移動してスウェーデンに行けば、スウェーデンはデンマークよりいつも一歩先を行っているから、ヘヴィでメタリックなバンドがたくさ

んいる。まぁ、スウェーデン人はハードコアとパンク・ロックにウンザリしているんだろうな(笑)」

Tommas「うーん、俺に尋ねるべきではないとも思うが、俺が本当に好きなバンドというのは、このジャンルでは思い出せない。いくつかバンドはいるけど、誰も俺たちのサウンドとは似ていないしね。MOONLESSは70年代ヘヴィ・ロックとその素晴らしきリフというルーツに、より深く根ざしている。他のバンドは複雑なリズムと気味の悪い歌の組み立てをしているから、あまり夢中になれないんだ。インターナショナルなストーナー・ロック・バンドのショウはコペンハーゲンでも開催されているし、凄くたくさんの人たちが見に来る。けど、地元には長く続いているようなバンドはいないね。DRAGONTEARSというヘヴィ・サイケデリック・バンドがいて、彼らはここではベストのバンドだと思う。厳密にはストーナー・ロックではないけど、本当にグレートな活動をしている。CAUSA SUIももう一つの素晴らしいデンマークのバンド。彼らのサウンドについて説明するのは難しいけど、70'sロックにインスパイアされたクラウト・ロックに分類出来るだろう。彼らは最高だし、ミュージシャンとしての才能に溢れている。3枚のアルバムを出しているけど、その全てが良いよ」

■Tommasは以前、"6曲をレコーディングして、7"EPか全曲を収録したLPをバンドでセルフ・リリースしようと思っている"と言っていたけど、どうして自分のHJERNESPIND RECORDSから出さないの?MOONLESSはハードコア・パンク・バンドじゃないから?

Tommas「うん、俺たちはセルフ・リリースでそのレコードを出すつもりだ。多分、2、3曲を収録した7"EPになるだろう。そして今の予定では、十分な作品の準備が整ったら、アルバムに取りかかる。HJERNESPIND RECORDSはデンマーク・パンク・シーンのバンドのリリースを主にしているけど、MOONLESSのレコードは絶対に出さない、とは言いたくない。しかし今のところは別のシーンの中で、成し遂げることがバンドにとってはより良いことだと思っているんだ。つまり、俺たちは違うシーンや観客の前でもプレイしたいし、もしHJERNESPIND RECORDSからリリースしたら、多分、多くの人たちがMOONLESSをありきたりな焼き増しパンク・バンドだと書き立てるだろう(笑)。俺はまだ自分のネットワークを通じて、レコードを出していく。そこにはHJERNESPIND RECORDSのロゴはないかもしれないけど」

■Ungdomshusetが取り壊された後の、デンマークのスクワットの状況を聞かせて欲しい。

Tommas「1年以上前から、新たな"Ungdomshuset"があるんだ。"Dodsmaskinen"という名のね。なかなか良いところなんだけど、ただ、俺にとっては昔の"Ungdomshuset"と同じというわけにはいかないな。新しい世代のキッズにとってはここは素晴らしい場所になると思う。俺たちが今、新しい場所をコペンハーゲンに手に入れられたのは嬉しいね。MOONLESSはそこで今年の10月にプレイするんだ。俺が関係しているような、リアルなスクワットは今のデンマークにはないけどね」

■ところで、人生においての究極のレコードと本を教えてもらえるかい?

Kasper「いつどんな時も好きで堪んないレコードを選ぶなんて絶対無理だよ。ただ、最近よく聴いているレコードは、Amon Duulの『Made In Germany』かな。好きな本もないけど、しっくりくるのはHP Lovecraft(アメリカの怪奇・幻想文学の作家)の作品かな」

Tommas「究極のレコード??うーん、わからないな。あらゆるジャンルに好きなレコードがたくさんあるからね。究極の1枚を選ぶのはきついよ」

Kenni「レコードなら『Master Of Reallity』と『Spin Of God』、本なら『The Lord Of The Rings』だね」

■MOONLESSの今後の予定や目標を教えて。

Kasper「数え切れないほどショウをやり、アルバムをレコーディングして、ツアーに出て、それからミュージック・ビデオを作り、またアルバムをレコーディングし、ツアーに出て、2枚組アルバムをレコーディングして、またツアーに出て、ツアーの模様を収めたDVD付きのライヴ・アルバムを発売し、またまたツアーに出て、アルバムをレコーディングして、それからまた…」

Kenni「それでもって、その間に精神病院でちょっと休憩をとるよ」

Tommas「グレートなレコードを作り、世界をツアーして廻って、楽しんで音楽を演奏するよ!また日本にも行けたら最高だな。日本には昔のバンドで2回行ってるけど、この新しいバンドでもいつか日本を訪れたいよ!」

■どうもありがとう。日本の読者にメッセージをお願いします。

Kasper「ハロー、ジャパン!酔っぱらって良い音楽を聴けよ。これ以上マンガを読むな、寿司を食うな。ヨーロッパでスゲー流行っていてムカつくんだ。狂っていろ、セックスしろよ!」

Tommas「俺たちのことはここでチェックしてくれ(www.myspace.com/moonlessdk)。あと7"EPがリリース(2010年の1月くらいの予定)されて、もし興味があって欲しい時は、ここまでメールをくれ(bornburnedout@gmail.com)」

Kenni「学校なんかサボって酔っぱらえ!」

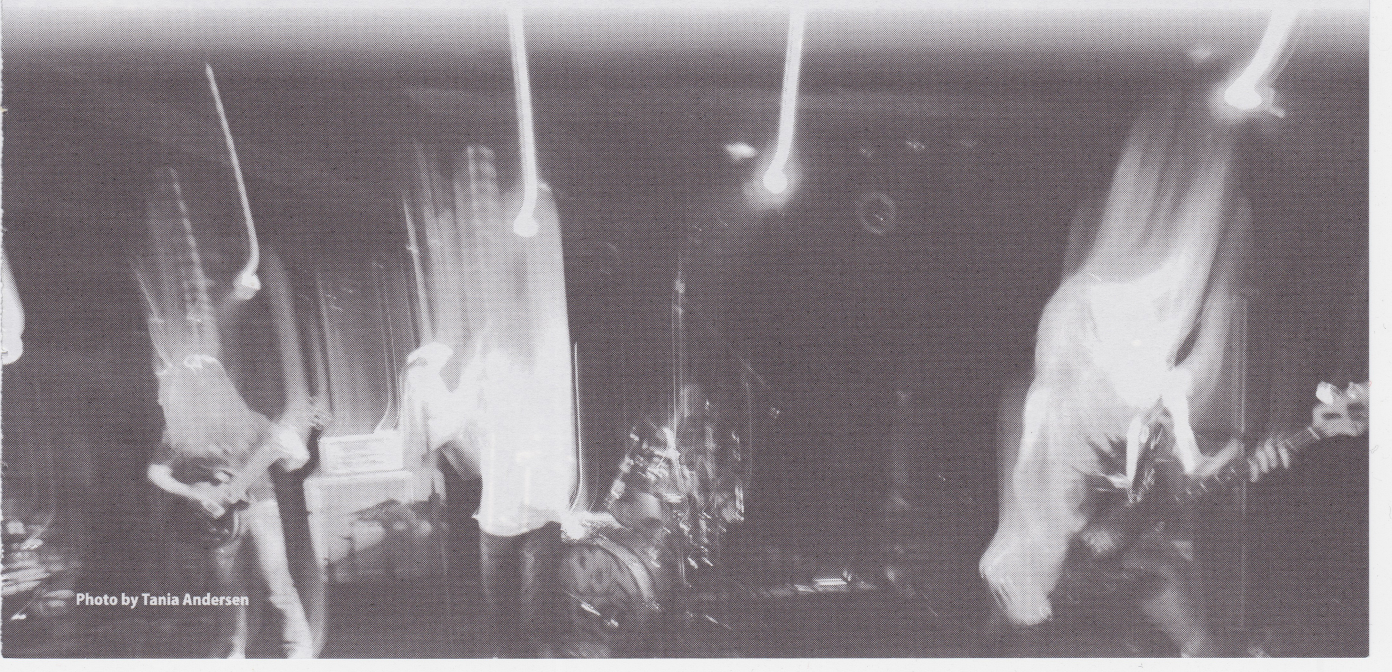


Photo by Tania Andersen

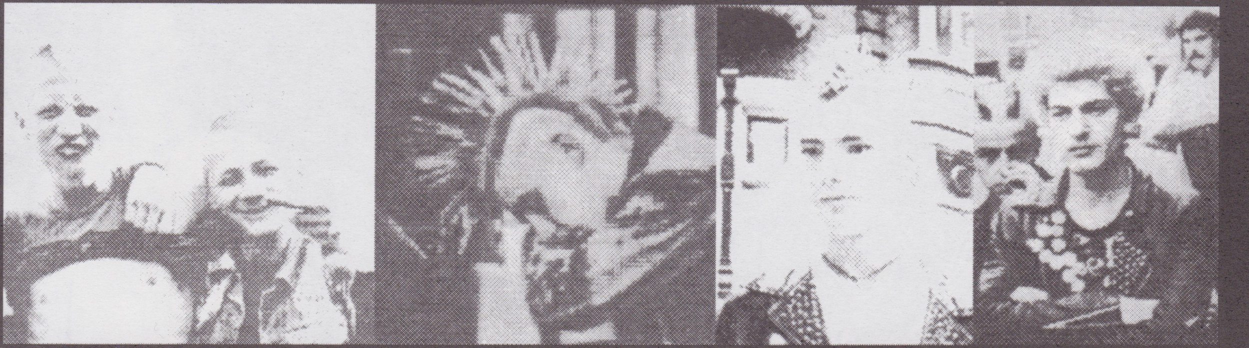
SCATHA

民族的なバックボーンも大胆に取り入れ、世界中のパンクスを虜にしたスコティッシュ・ハードコアの雄、SCATHAのディスコグラフィーCDがMCR COMPANYよりリリースされたのは、2007年5月でした。その前後に、ヴォーカリストだったAngusにメールでの取材を行った、のだが…。
締め切りを過ぎても回答がもらえなかったので、何度か催促のメールを送ったが、返信はなく。去年の夏だったか、もう記憶が定かではないがAngusから、「そろそろ回答を送る!」という連絡があったような…気もする。その後、再び催促しても梨の礫だったので、完全に諦めていた(忘れていた)のだが、今年9月、三たびAngusからの連絡が入り、「インタヴューはまだ使えるか!?送るぜ!」と。そして、遂に届きました…。
Angusと僕との、途絶えかけていた"線"を繋いでくれた、MCR　COMPANYのYumikesさんにまずは感謝の意を表したい。もちろん、遅れたけどキチンと回答を送ってくれたAngusにも。
というわけで、ここに2年越しのSCATHAインタヴューがようやく完成した次第です(掲載媒体まで変わったけどね…笑)。

■Angus、あなたは元々SEDITIONのメンバーでしたよね。SEDITIONはどうして解散したのですか?

「SEDITIONを始めた頃から、Brycey(ベース)と俺とはアパートや家を常にシェアしていたせいもあって、バンドの曲のほとんどを作るのは簡単にいっていたんだ。しかし、時間が経ち別々に暮らすようになり、2人とも国の端と端に住むようになっていた。それでもう以前のように簡単に思う存分、一緒に曲作りができなくなってしまったよ。新しい作品を作るために、定期的な満足いく集まりも難しくなってね。必然的にフラストレーションが積もり積もって、意思の疎通も思うようにいかなくなり、俺たちの関係も壊れてしまったんだ。それが最終的にはバンドの解散につながっていったんだよ」





■SCATHAはどのようにして結成されたのですか?SEDITIONとDISAFFECTのメンバーによって結成されたようですが、どんな経緯だったのでしょうか?

「1993年にSEDITIONは解散し、翌1994年にはDISAFFECTも解散したんだが、その後、DISAFFECTのAndyとIBは遅くて重い曲を新たに書き始めた。俺はスローで重たい音のバンドをやるつもりで、前々から歌詞をいくつか書いていたんだよ。既に心の中には"SCATHA"って名前もあった。彼らからヴォーカルに興味はないか聞かれたよ。Billy(ex.SEDITION/DISAFFECT)にはセカンド・ギターを、Jason(ex.STRETCHHEADS)にはドラムはどうかと持ちかけ、SCATHAが誕生したのさ」

■当時、影響を受けていたバンドには何が挙げられますか?パンク/ハードコア以外のものでも構いません。

「メンバーそれぞれが違うタイプの音楽を聴いていたね。Billyはブラジルのハードコア・バンドが好きだったのを覚えているよ。Andyは遅くて重たいバンドがとにかく好きだったな。それからD-beatバンドもだ(特に日本のバンドがね)。IBはUSハードコア・バンドに目がなかったよ。元STRETCHHEADSのJasonのバックグラウンドにはインディーノイズがあったね。ブラスト・ビートのノイズ・バンドに相当夢中だったと思う。俺はあの当時はスローでヘヴィなバンドをよく聴いていたな。他には伝統的なケルト・ミュージックやフォーク、民族音楽なども。でもやはりあの頃に聴いていたのは遅くて重たいバンドで、当時は一番影響を受けていたんじゃなかったかな。それが元々やりたいと思っていた音楽でもあったしね」

■あなた個人として、影響を受けたヴォーカリストというのはいますか?

「特にこれという人はいないな。SEDITIONをやっていた当時はイタリアン・ハードコアは好きだったよ。あの頃、周りには絶叫するヴォーカルのバンドも何バンドかはいたが、ほとんどのバンドはうなるようなヴォーカルだったんだ。だから俺はSEDITIONでは何か違うことをやりたかった。それとはまた逆にSCATHAではSEDITIONとは全く別のことをやりたかったんだよ。たぶんあの頃は、実に賢いことをやっているとでも考えていたんじゃないかと思うんだよな!」

■SEDITION〜SCATHAと、アートワークにピクティッシュ(ケルティック)な模様を使っていましたが、あれはどんな意図で使用していたのですか?自分たちのルーツを示すため?

「基本的にはイエスだね。スコットランドをベースにするバンドが持つ文化、その文化が抱えているアイデンティティとアフニティを表現するために、自分たちの文化的な背景からああいうアートワークを使いたかったんだ。しかし今の状況の中では、大概のパンク/ハードコア・バンドがアートやグラフィックの中に、ロゴとして現代のシンボルやイメージを用いているように、自分たちもロゴやグラフィックとして過去のものからアイデアをいただき、それを大胆なシンボルとして使っている。1980年代初期のアナーコ・パンク・バンドの中には、自分たちのロゴやグラフィックに、驚くようなモダンなものや、時には古い"シンボル"を使う場合もあったね。大胆で人目を引くようなのを。そういう表現をしていたバンドのアートワークを見てみるといい。あれが俺が作り出そうと努力したアイデアだよ」

■SCATHAといえば、剣のようなものに蛇が絡まっているデザインが象徴的ですが、あれは誰が作ったのですか?どんな意味が込められているのですか?

「スコットランド中の石に刻まれているのが発見されたんだが、とても有名なピクティッシュ・シンボルの、大変に珍しいヴァージョンをベースにしているんだよ。しかしもっと有名なヴァージョンには、ロッド1つの珍しいヴァージョンの他に、"Z"が形どられたロッド("Z"字に曲がった、飾りのついたロッドのようなもの)もある。俺がSCATHAのために初めてそのシンボルを描いた時、よりバンドの名前に合うようにわざと様式化してみたんだよ。"S"字状にして蛇の形を変え、大胆でシンプルなシンボルになるようにロッドを様式化した。大概の太古の文化では"スネーク"あるいは"サーペント"(どちらも蛇)は、土地に宿るパワーのシンボルで"ロッド"(あるいは、剣、または槍)はパワーとのつながりやまたは媒介となる方法だと信じられているんだ」

■『Respect, Protect, Reconnect』や『Fuck the System』、『Birth, Life & Death』といったタイトルは、一見シンプルですが、深い意味が込められていそうですね。それぞれのタイトルに込めた想いを聞かせて下さい。

「『Respect, Protect, Reconnect』はSCATHA以前から、しばらく俺の中に抱えていたタイトルなんだ。この響きが好きでね。これは地球との関係を直接的に述べている。近頃じゃ、人間がいかに地球で生きることを当然のことと考えているか、人間の生存にとってどれほど重要なのかを無視しているかってことをね。これは人生においても様々な場面に当てはまるんじゃないかと思うよ。別の例を挙げてみるなら、例えば"家族"などかな。今日、俺たちは当たり前のように捉え、特にありがたいとは思っていないと思うよ。『Fuck the System』は"ジョーク"でつけたようなタイトルで、歌詞を書く前から曲につけていたタイトルが『Fuck the System』だったのさ。歌詞のない曲の状態から『Fuck the System』と呼んでいたんだ。この曲は他のSCATHAの曲と較べると、速くて怒り狂っていたからね。曲にぴったりだったんで、ああいうタイトルが思いついたってわけだ。『Birth, Life & Death』はアルバムの最初の3曲に関係する事柄を述べている。人生のサークル、死と誕生は、世界各国の古代文化において大変に重要なものだろ。しかし、これもまた、俺たちはそれを当然のことと考えている。特にここ西洋では」

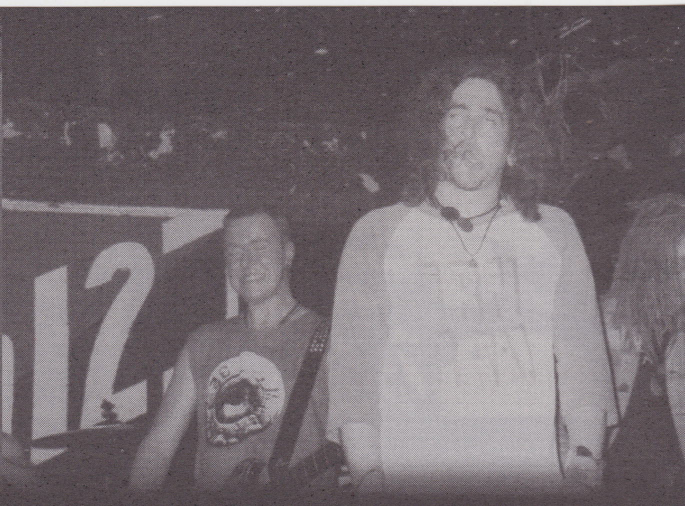
■"Fuck the System"の冒頭のSEは、何からの引用ですか?どんな意図があったのでしょうか?

「『A Professional Gun』、別名『The Mercenary』というイタリアン(スパゲティ)・ウエスタン映画だよ。俺も他のメンバーも、今も昔もスパゲティ・ウエスタンの大ファンでね。あの曲が素晴らしいことを発見してしまってあれを使うことにしたのさ。よくフィットしているだろ。俺たちの使ったあの曲は今でも気に入っているよ」

■SCATHAが活動し始めた90年代後半、周りのシーンはどういう状況でしたか?

「90年代のUKシーンはまだDIYが残っていて、かなり強固だったよ。DIYシーンでは多くのバンドが活動していたし、DIYギグに大勢のやつらが集まった。俺たちがSCATHAを始めた当時、シーンはまだ相当"勢力的"だったね。数え切れないほどの海外のバンドがUKを訪れ、同時にヨーロッパもツアーして廻っていたよ。だからバンドを見る機会も数多くあったし、新旧たくさんのバンドと





共演することもあった。俺たちは結成して最初の２年の間に、スコットランドとイングランドを２回ツアーしただけじゃなく、ヨーロッパ本土へのツアーも２回行ったよ。そうだな、あの頃のシーンはもの凄くエキサイティングだったな」

■またどんなバンドとその頃、一緒にライヴをしていましたか？

「限りないな、全てを思い出すのは気が遠くなっちまうよ。忘れているバンドもあるから謝っておかないと。たくさんの中から印象に残っていて思い出せるバンドを挙げてみるよ。でもここに挙げたのはAndyと俺が思い出しうる限りのものだぜ…。QUARANTINE、DOOM、CRESS、ABC DIABOLO、DEFIANCE、DROP DEAD、DEZERTER、LA FRACTION、Y、LOS CRUDOS、LOST CHERREES、ANOMIE、DISFEAR、GURKHA、MUCK SPREADER、UNHINGED、HIATUS、SAWN OFF、POST REGIMENT、HEADACHE、BLOODSHOT、EXTINCTION OF MANKIND、SVART SNO、COUNTERBLAST、CATASTROPHOBIA、そしてTHE DAGDA」



■SCATHAでのあなたのファッションも、鋲ジャンやクラスティーな感じではなく、民族的な服を着ていましたよね。そういった服装にも拘りがありましたか？

「君の言葉をAndyが聞いたら、かなり気を悪くすると思うよ。Andyはいつだって鋲ジャンが好きだったからね(※『Fuck the System』の裏ジャケを見てみたら、思いっきり鋲ジャン着ていました…。前頁の写真参照)。そうだな、しかし、バンドのイメージなんて考えてもいなかったよ。みんな、その日その日で着たいものを好き勝手に着ていたからね。ギグのない日の恰好も、ステージに上がる時の恰好も、着ているものは全く同じだったな。意図なんて微塵もなかった。SEDITIONではSCATHAよりは考えてはいたかもしれない。ギグではたいていキルトを身につけていたし、演奏しない日もキルトを身につけていた。バンドのイメージや着る物を限定するなんてことを考えていたのかは、今じゃもう全然思い出せないね。当時は単にそういう方向に目を向けていたんだろうよ。しかし、あれは流行遅れかバカだな」

■日本ではあまり馴染みがないのですが、ケルトの文化であなたが惹かれるところというのは何でしょう？

「どんなものであれ、自分自身の文化的なルーツを知るのは重要なことだと思っている。俺たちはみんな人間であって、国籍は関係ない。世界のどんな場所に生まれようとね。しかし、それぞれの文化っていうのは、自分のルーツ、辿ってきた道であって、自分の人生を導いてくれるものでもあるんだ。また、リスペクトの気持ちを教えてくれるものでもね。それに周囲の環境の中にある、自分の場所でもあると思う。他の様々な地域が持っている文化をベースにした、古来、または現代の民族的な独特のものに存在しないものが、セルティック文化にはあるっていうような明確な魅力はないよ。スコットランド人である俺にとって、セルティック文化は自分の意識を探るための簡単な出発点だった。しかし、それはまた、世界中のそれぞれ固有のものや民族的文化を学んだり、それを認めて高く評価するようにも俺を導いてくれたよ。多くのことも教えてくれた」

■日本だとスコットランドは"イギリス"として一括りにされがちですが、イングランドに対する特別な感情はありますか?政治的な面でも、音楽に関してでも構いません。

「ブリテンが作り上げた国家間の主な違いは、単に政治であり、国家主義のプライドの間違った感覚だよ。そういうものは、だいたいは政治家や主流のメディア、あるいは特定のスポーツ・イヴェントによって助長されているのさ。もはやブリテン内のどこにも真の文化的な違いは存在しない。国と国との文化的な違いを意味する、大部分の西洋諸国にある"イギリス系アメリカ人"の影響は、時間が経つにつれて曖昧になり、重要度も低くなってきている。消費賛美擁護論は、今の西洋諸国のほとんどが選択している文化であって、資本主義が保証しているのは、我々が消費し続けるってことなんだ。最も悲しむべき点は、大部分の貧困を抱えた国は、たいてい文化遺産においては豊かであるのに、我々が既に進んで受け入れている、この消費賛美擁護論の文化をむやみに欲しがっているってところなんだよ。繁栄している国々が貧しい国に消費賛美擁護論を持ち込むのが幸せ以上のものになるっていうのか。どんな犠牲を払っているって言うんだい?」

■日本のMCR COMPANYからディスコグラフィーCDがリリースされましたよね。どういう経緯だったのですか?SCATHAのレコードはプレミアがついていたので、あれは素晴らしいリリースだったと思います。

「SCATHAでギターを弾いていたAndy、RUINのメンバーでもあった彼が、前にMCRから作品をリリースしていたんだ。SCATHAのディスコグラフィーを再発してくれる人物を探していたところ、AndyがMCRのYumikesの名前を挙げたんだと思う。Yumikesに相談したら、やると言ってくれたんだよ。MCRはイタリアのAgipunkレーベルのヴィニール作品をCD盤で出したりしているから、MCRがプロジェクトに関わってくれるのは俺たちにとっては良かったね。君が言うように、今じゃ俺たちのヴィニール作品を探し出すのは難しい。このディスコグラフィーにはボーナス・トラックもついてる」

■現在、あなたはT.R.I.B.E.として活動していますが、SCATHAはどうして解散したのですか?

「SCATHAが解散したのは、練習のために定期的に集まることも、十分な時間をとることもできなくなってきて、新しい曲を書くのも無理なことが自分たちでもわかったからなんだよ。みんな仕事や家族で忙しかったし、他のバンドもやっていたりで、同時に全員が一緒に集まるようにやりくりするのが、どんどん難しくなっちまってね。それで、やめる時がきたと全員納得して友好的に結論を出したってわけなんだ」

■T.R.I.B.E.としての予定も、現在決まっている範囲で教えて下さい。

「まずは2009年の秋頃に、Leonard Peltier(※FBI捜査官を殺害した罪で、終身刑を言い渡されているネイティヴ・アメリカンの活動家。冤罪の可能性が長年にわたり指摘され続けている)のためのベネフィットCDに新曲を提供する予定があるよ。フランスのオーガニゼーション"AISIA/Kan ar Bleiz"からリリースされることになっている。これは長いこと活動してきたT.R.I.B.E.の、初の新作品になるだろうね。2009年の終盤までには全ての曲を録り終えたいと思っているよ。できるだけ早く新曲をライヴで演奏できるようになるといいんだがね」

■最後に、日本のパンクスにメッセージを。

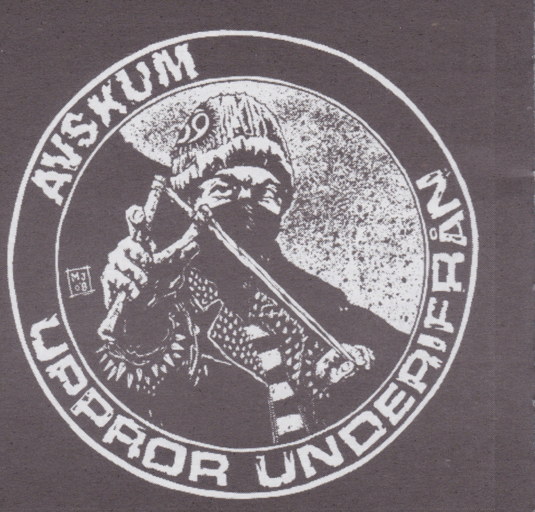
「Kenji、質問をありがとう。返事を辛抱強く待ってくれて感謝する。俺たちがやってきたこと、そしてやっていることを、長い間サポートし続けてくれている全ての人たちに感謝します。R.E.S.P.E.C.T!!!」

人生のサークル、死と誕生は、世界各国の古代文化において大変に重要なものだ

the cycle of life, death and rebirth was very important in a lot of ancient cultures all over the world







AVSKUM

スウェディッシュ・ハードコア・パンク不滅の旗印、AVSKUMが来たる12月に来日を果たす。Prank Recordsよりリリースされた目下の最新アルバム『UPPROR UNDERIFRAN』は、純然たるハードコア・パンク作品としての風格すら漂う、気高くも荒ぶる最高の一枚だった。
否応にも彼らのライヴへの期待が高まる中、ドラムのPyriに過去から現在に至るまで、取材を試みる。

■AVSKUMの前にもバンドをやっていましたよね?スウェーデンのパンクについて書かれた本を読むと、"2つのバンドの解散が1982年にAVSKUMの結成を生む結果となった"とあります。これは事実?

「ああ、そうだ。ADRIAN CUBAをやっていた俺(Pyri)とGunnar、それからTHE AFGHANSにいたHakanとNisseのことさ。その後、HakanとNisseと俺とでDEAD CORRUPTIONを作ったよ。AVSKUMサウンドの始まりだ。ヴォーカルはひど過ぎたけど。バンドにGunnarが加わり、名前をAVSKUMに変えたのさ」

■AVSKUMは英語で"Scum"(クズ)という意味になりますか?AVSKUMというバンド名に込めた意図は?

「俺たちにとっちゃAVSKUMはただの名前さ…。裏に意味なんてないぜ」

■1988年に解散したのはどうして?1994年に再びAVSKUMを始めましたが、これはなぜでしょうか?

「スウェーデンのパンク・シーンは当時、どうしようもなくひどかった。バンドの半分はストックホルムに住んでいて、俺たちは少しばかりうんざりしていたんだよ。1988年にAVSKUMが出してた音はクソだったと俺は思う。解散前に出した最後の作品は最悪だった。Finn RecordsのJalloがコレクション・アルバムを作りたがったんで、アルバム『The Re-Crucified By The System』のために新曲を書くことにした。そして新曲をたくさん作って、新しいラインナップでまた練習を開始し、リリース・フェスで再結成ギグをやったってわけさ」

■アメリカのPrank Recordsから作品を出しているのは?Prank Recordsは世界の中でも素晴らしいレーベルの一つだと思いますが、スウェーデンにも良いレーベルはありますよね。

「今までPrank Recordsからは3枚のアルバムを出しているよ。Prankは良いレーベルだと思ってる。これからもリリースするつもりさ。PrankのKenはとにかくいいやつだし、レーベルとも何の問題もなくうまくやってるよ。Prankから出てるのは最高のバンドばかりだしさ。Kenには最大級の感謝さ」

■80'sのスウェディッシュ・ハードコア・パンク・シーンはどんな感じでしたか?90'sシーンと今の00'sシーンについても聞かせて下さい。

「80'sのパンク・シーンは"純真"だったよ。あの頃のスウェーデンはそれほどポリティカルでもなかったと思う…。全てがビッグ・パーティって感じだった。とてもフレンドリーだったし、現在目にするような破壊的なもんでもなかった。君も今のシーンには過激でガチガチなポリティカル・パンクの取締官みたいな印象を持っているんじゃないかな。でもスウェーデンには良い伝統もあるし、素晴らしいパンク・バンドがいるんだよ…。だがここは演奏するには良い場所とは言えない」

■歌詞で歌っていることについても、いくつか教えてください。

「歌詞を書いてるのはGunnarなんだ。「Svinens sang(Song of the pigs)」の歌詞はスウェーデンのヨーテボリ(ストックホルムに次いで2番目に大きい都市)で行われたEU会議についてだ。抗議行進に対して警官がやったことを書いている。EUが目を向けてるのは裕福な国だけ。民主主義なんて全く無視してるのさ」

■では、あなたが最も懸念しているスウェーデンの社会問題は?

「全ての問題は金に関わってるね。人種差別もますます広がり深刻化してるし、ファシスト政府も存在してる。現在、ホームレスの人たちも増加している」

■歌詞に2つの言語(スウェーデン語と英語)を用いているのはどうして?

「最近ではもっとスウェーデン語で歌詞を書こうと考えているよ。より攻撃的に聴こえるだろうし…、ルーツに戻るってことでもね。しかしもちろん英語で歌詞を書いたら、

AVSKUM is Love Peace and lots of drinks

多くの人たちに内容を理解してもらいやすいんだろうけど。これはGunnarの気持ちによるところがある。あと、曲にたくさんの言葉を詰め込むなら、スウェーデン語のほうがうまくフィットするな」

■「Glom aldrig Hiroshima」では広島について歌っていますね。タイトルの意味は英語にすると"Never forget Hiroshima"?この曲を作った理由は?

「1945年8月6日のヒロシマ、そして1945年8月9日のナガサキで起こったことを誰もが決して忘れちゃいけないんだ。今なお、原子爆弾による癌で多くの人たちが命を落としている…」

■Crash Mangeが手がけた最新アルバムのカヴァー・アートワークも素晴らしいですね。どうして彼にお願いしたんですか?

「Crash Mangeは長い付き合いの友だちでもあって、素晴らしい絵を描くやつなんだよ。Crashには新しい日本ツアーEPや間近に迫った日本ツアー用のポスターのデザインもやってもらってるよ」

■最新アルバムのサウンドも最高でした。現在、ハードコア・パンクには様々なスタイルがありますが、AVSKUMは常にアグレッシヴなハードコア・パンクをプレイし続けていると思います。自分たちの音楽スタイルというのは意識していますか?それとも自然に?

「AVSKUMはたくさんのバンドから影響をもらっていると思う。だけど、ずっと自分たちにしかやれないことをやっているし、俺たちのサウンドと言えるものを持ってる。常にそうやってきた…が、80年代の終盤では自分たちを全く見失っていたな」

■究極のスウェディッシュ・ハードコア・パンクのレコード、ベスト10をあげてもらえますか?

「たくさんあり過ぎて書ききれないな…でもいくつか良いものをあげてみるよ。

ANTI CIMEX『Raped Ass』
ABSURD『Blodig Stad』
SKITSLICKERS『Sprackta Snutskallar』
HUVUDTVATT『first EP』
EBBA GRON『We Are Only In It For The Drugs』
RUDE KIDS『Safe Society』
T.S.T『No Teenage Future』
KSMB『Aktion』
WOLFPACK『Bloodstained Dreams』
UNCURBED『Keeps The Banner High』

他にもMEANWHILEやTOTALITAR、SKIT SYSTEM、WOLFBRIGADE…あげきれないほどのレコードがあるぜ」

■最近の、お気に入りのバンドは何でしょう?REALITY CRISISやFRAMTID、それにDISCLOSEなどの日本のバンドも好きなんですよね。

「日本のバンドはそんなに詳しいわけではないんだけど、D-CLONE、FRAMTID、DISCLOSE、REALITY CRISISは好きなバンドだな。D.S.Bがスカンジナヴィアをツアーした際に見事なショウを見せてもらったね。日本のバンドがこっちにツアーに来て、色々なバンドの音を聴かせてもらえたら最高だね。俺たちが日本ツアーを終えてこっちに戻ってきた時に、君にもっといい答えを返せるんじゃないかな」

■"Punk Illegal"という大きなフェスティバルがありますが、あなたはそれに関わっているんですか?

「Gunnarは深く関わっていたね…でも今は違うが。…Gunnarは"Punk Illegal"のためにいいバンドをブッキングしたり、ギグを企画したりしていたよ。集まった費用は全て、スウェーデンに潜む難民へ送っている」

■現在あなたたちは(スウェーデンの)クリスティーネハムンに住んでいるのですか?どんな街?

「俺はストックホルム、Gunnarはヨーテボリに住んでるんだ。HakanとJorgenはずっとクリスティーネハムン在住だよ…。クリスティーネハムンは16000人が住む、まるで眠ったような静かな街だ。取り立てて話題にするようなものは何もないな」

■あなたたちは仕事はしていますか?バンドのスケジュールと仕事との両立はどうこなしているの?

「ああ、みんな働いているよ…俺たちは子沢山でさ。AVSKUMはそう頻繁にプレイしてなくて、ツアーも小規模でやっているよ。だからそういう問題はないよ」

■活動を続けるモチベーションは何でしょう?

「プレイするのを楽しんでいるからだろうね。良い反応をもらえるいいレコードをリリースし続けてると思うし…。それから、出演を望む嬉しいオファーもたくさんあるしね。初めての国へ行くのも、そこで新しい仲間に出会うのも最高だよ」

■あなたたちにとって、"AVSKUM"とは何ですか?

「AVSKUMは平和を愛し、大いに酒を呑む、これだよ」

■インタヴューどうもありがとう!最後に日本の読者にメッセージをお願い。

「12月の日本ツアーが待ち遠しいよ。日本ツアーは最高のものになるんじゃないかな…。ピットで会おうぜ。じゃあな…」

AVSKUM JAPAN TOUR

12月2日 東京・高円寺20000V
12月3日 岡山・津山K2
12月4日 愛知・名古屋TINY7
12月5日 大阪KING KOBRA
12月6日 東京・中野MOONSTEP





Ken Sanderson Long Interview



PRANK

8月。AVSKUMのインタヴューを進めるうちに、彼らの作品もリリースしているアメリカの老舗ハードコア・パンク・レーベル、Prank Recordsの主宰者Kenにも話しを聞いてみたくなりメールで打診したところ、「WORLD BURNS TO DEATH/BLOWBACK/PAINTBOXのツアーを見に新大久保EARTHDOMと横浜FADに行くよ。今朝、東京へ向けて出発するんだ」との返信が。
もともと僕も行く予定だった横浜FADの前で待機していると、ツアーに同行していたCHAOS IN TEJAS(前号掲載)企画者のTimmyがやって来た。「Kenはもういる?」と聞くと、Timmyの後ろからKenと彼の奥さんが登場。メールでのファースト・コンタクトからあっという間の対面となった(地球はなんて狭いのだろう)。
このインタヴューは、Kenがアメリカに帰国後、メールで行ったものである。PAINTBOXのアナログ盤の作業で忙しい中、実に丁寧な長い回答を寄せてくれた。

Prank Recordsについて

■まずは、どうしてPrank Recordsを始めたの?

「もともとはアメリカの南部に位置するアラバマ州にある小さな街の出身なんだ。白人労働者であふれた田舎だよ。あそこへは行かないで。 1980年代の頭にはDEVOやADAM AND THE ANTSのようなニューウェイヴ、それからパンクやハードコアに興味を持つようになっていた。80年代の中頃には小規模のファンジンを、その後、大学でラジオ・ショウもやったよ。1992年頃までこのラジオ・ショウのDJを務めたんだ。日本のハードコアもたくさん流したね。フライヤーやショウの告知を作ったりするのに、CONFUSEのソノシートに載ってるバンドの写真もよく使わせてもらったよ!この街にパンク・シーンは存在しなかった。人口も3万人ほどだし、友だちや若い子たちときたら…僕のラジオ・ショウを聴いてるやつなんて1人もいなかったよ!!!!でも80年代に充満してた考え方っていうのは"シーンをサポートする"ってことで、音楽やアイデアを息絶えさせず、成長させるために必死で動いていたよね。今は音楽もあふれていて、キッズが足を踏み込むシーンは新しさもなく壊れやすいものだから。今のキッズには80'sのようなクレイジーなアティテュードはないよ。パンク・シーンはその子たちの生まれる前から存在し、いつもそこにあり続ける。これからもそうだろう。でも僕がラジオ・ショウをやっていた時は、ラジオ局の管理者との闘いが絶えなかったな。
ラジオ・ショウを経て、地元の小さな街でNEUROSIS、BORN AGAINST、GREEN DAY、GRIMPLE、SCREECHING WEASELなどのバンドのライヴを企画するようになったんだ。USをフル・ツアーする場合、南東部方面にはプレイできる場所が少なくて、ニューオリンズからワシントンD.C.まで演奏してまわる場所を探すのは難しかった。 それで、バンドは喜んで家の中で演奏してくれたよ…。部屋中の家具を運び出して、部屋の中でバンドがプレイする…。40〜50人に3ドルずつ払ってもらい、バンドには100〜150ドルを渡す。あの当時はバンドにとっても結構な額だった。こういうショウはビールを持参するパーティーに似ていたね。ショウに来てたお客の中には、後にMAN OR ASTRO MAN?やQUADRAJETSのような人気の出るガレージ・ロック・バンドを組むやつらもいたな。
大学を卒業後は、友だちを尋ねてサンフランシスコへ移り住んだんだ。そして924 Gilman Streetを手伝い始めるようになる。CROSSED OUTやMAN IS THE BASTARDからOFFSPRINGやRANCIDまで、あらゆる人に向けてライヴを実行したな。でもGilman Streetのマネージメントとも闘い続けたよ。そういう問題にうんざりしてしまって、自分のプロジェクトを始める決心をしたんだ。それがPrankだ。皮肉にも、自分で音楽を全て作らない限り、レコード・レーベルっていうのはレーベルの者とバンドとが一緒になって作り上げるものなんだよね。だから本当は"自分"のプロジェクトとは違う。 今もこういう感情と繰り返し闘っている。Prankは自分が何者であるかを表現するのとは反対に、自分の好きなものを強く表現しているものであるんだ」

■そう、924 Gilman Streetで働いていたよね。何か印象深い思い出はある?

「うん、1992〜1994年までライヴ・スケジュール(ブッキング)の担当をしていたんだ。ここでは未だに素晴らしいショウをちょくちょく見ているよ。924 Gilmanは今のUSの中でも最も古いDIYパンク会場なんじゃないかな。ウエストコーストだけじゃなく、USパンク・シーンにとっても本当に重要なハコだ。ウエストコースト周辺をツアーするほとんどのDIYパンク・バンドはGilmanに出演するしね。"非営利"だし、ボランティアで運営されている…。警備員にだけは支払っているが…USでもこれは珍しいよ。音楽のライヴをやる大抵のクラブはアルコールを出す。アルコールの法律はUSではとても厳しくて、21歳以上が入場を許され、ライヴを見ることができるんだ。Gilman Streetにはバーもなく、アルコールも認められていない。それでオールエイジが入場できるんだよ。これは若いキッズたちにとってはライヴを見たり、自分の音楽を作ったり演奏することができて、もの凄く重要なんだ。
面白いことは…僕がGilman Streetで働いていたころに、一番賛否両論を呼んだショウがあって…THE INSAINTSの女性メンバーがステージで裸になり逮捕されたショウがあった。それと、悲しいが残念なことに、Jello Biafraが数人のクソったれ野郎に攻撃されてしまったショウもあったな。僕はバンドの演奏を企画したが、全てのトラブルの前に会場を出ていて…Gilmanはアルコールを出さないと言ったように、僕や友だちはオープニングのバンドを見て、それからビールを飲みに出かけたり、家に帰って眠ったりしていたからね…それから、他の物語は忘れちゃった!!!



横浜FADの前にて

たくさんのショウが行われ、それを見てきたけど、1990年代初期で思い出す最高のショウは…D.O.A.、RANCID、ECONOCHRIST、Slap A Hamの"FIESTA GRANDE"、CROSSED OUTの2回のショウ(想像を絶する素晴らしさ!!!)、CHAOS U.K.、GRIMPLE、それにSPAZZ、BORN AGAINST、UNIVERSAL ORDER OF ARMAGEDDON、JOWBREAKER……でも本当に感動的なのは、ショウができるよう、熱心に献身的に働く新しい世代のキッズやバンド、クラブのスタッフたちによってクラブが続いていることだよ」

■では、最初に手本にしたようなレーベルはあった?

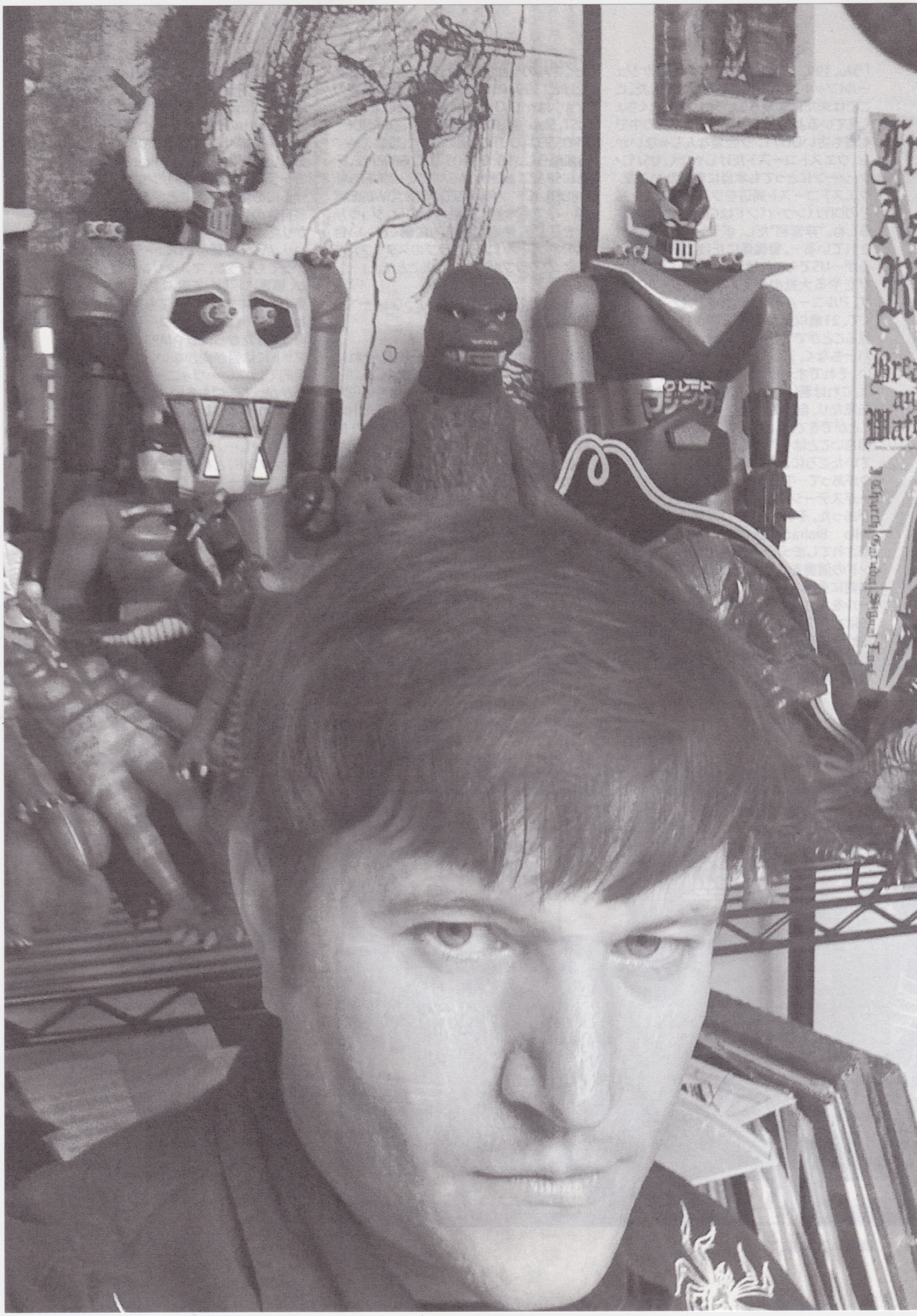
「マンガやホラー・モンスター映画、それにハードコア・パンクにとにかく夢中なんだ。だからSEPTIC DEATHは…それは今も…常に大好きなバンドだよ。SEPTIC DEATHは僕の好きなものを全てつなぎ合わせた感じなんだよ。(SEPTIC DEATHのPusheadが運営する)PUSMORTレーベルからリリースされた作品は全て注文したし、1980年代に自分のファンジンでもSEPTIC DEATHにインタヴューしてる。PUSMORTの作品はどれもアートワークもサウンドも見事だよ。PUSMORTの影響はPrankには大きいね。USでは90年代中期のレコードの質はお粗末なものだった。レコーディングもひどいし、アートワークも手早く仕上げた感じで。それで頭にあったのは、サウンドも素晴らしく、アートワークもしっかりしたLPを作ること…そう、PUSMORTのように!サウンドの面ではF.U.'Sの『My America』やSS DECONTROLの『Get It Away』、それにJERRY'S KIDSの『Is This My World』のようなX-CLAIM! Recordsが出している作品だね。X-CLAIM! Recordsの作品…特にオリジナルのヴィニール盤のサウンド・クオリティ…は、申し分ないほどに最高だね。Prankとしても、レコーディングやマスタリングをして作品を作るにあたり、学ぶことがたくさんある。作品自体の音質もだし、本当に重要なことばかりだよ。レコードを作る最初から僕も加わり、バンドと僕とでレコーディングは誰にやってもらうか、マスタリングは誰がいいか、慎重に相談して選ぶようにしている。最高の音質にするにはとても重要なことだよね。僕はヴィニール・レコードを買いながら育ってきたから、CDやMP3のようなフォーマットには目が向かない。ヴィニールは実用的ではない…ヴィニールは作るにも金がかかって苦労も多い。郵送するにも大変だ。壊れやすいし、収納するにも場所をとる。カセットやCD、MP3のように持ち運びもできないし…。それでも、アートワーク、歌詞、サウンド、どれをとってもヴィニールは最高のフォーマットだって気持ちは変わらないんだ。ヴィニールLP以上に完璧だと思ったものはまだないよ」

■じゃあ、"Prank"と名づけた理由は?

「レーベルの名前の前にイメージがあってイメージに基づいた名前に決めたんだよ」

■レーベル・ロゴのアートワークにはどんな意味が込められているの?男の子が"prank"(いたずら)しているようだけど?

「このイメージは1950年代か1960年代の昔のマンガからいただいたんだよ。一連の様々ないたずら商品の広告にあったもので、たぶん日本の人たちには理解するのは難しいかもしれないね。USでは"ジョイ・ブザー"という名前で売られているよ。挨拶の際に手のひらに隠し持って握手すると、相手にちょっとした衝撃やショックを与えるおもちゃだ。ジョークとしてね。もともとそのイメージが好きだった。今の僕にとってはレコードを作るのはエンターテインメントでもあるってことを意味してるかな。でも僕の願いは他のみんなと共に、アイデアや文化や音楽の精神を持ち続けることなんだ。だから、音楽は挨拶であり、意味はショックかな。
レーベルにとっても不思議なイメージって感じだね。レーベルの最初の作品のように…オークランドのDEAD AND GONEの作品はかなり暗い色調だった。USのバンドには荒涼とし暗い歌詞と雰囲気のものが多い。日本のパンクが重要視しているのはこれとはかなり違っているね…。(USのバンドは)音楽にもっと権限が与えられ、陰鬱さ以上に気持ちが高揚していく。レーベルの理念は常にハードコア・パンク・レーベルであるってこと。レーベルに関わる全てはハードコアであるっていう。でもそれに含まれるのは…長いこと、世界中のパンクやあらゆるハードコアのタイプのファンだけど、パンクやハードコアには数多くの様々なアイデ



僕の人生を変えた音楽は1980年代初期のUSハードコアだ これはアメリカの政治や社会状況が極端な時代から生まれたんだ だから音楽は怒りに満ちて激しかったんだよ

アがあるね…。(Prankが出している)DAMAD、SIGNAL LOST、GUYANA PUNCH LINE、IRON LUNG、BORN/DEADなどそれぞれ全く違ったバンドだけど、僕にとっては同じ理念にフィットするんだよ。
個人的には怒りの音楽が好きだね。僕のレーベルからリリースしているバンドにこれは現れていると思う。僕の人生を変えた音楽は1980年代初期のUSハードコアだ。これはアメリカの政治や社会状況が極端な時代から生まれたんだ。だから音楽は怒りに満ちて激しかったんだよ。初めてDEAD KENNEDYSの『In God We Trust Incorporated』を聴いた時のことを鮮明に覚えてる。"今まで聴いた中で最高だ"ってね。あの当時、それまで聴いてきたハードコア・レコードで一番強烈だった…。人というのは年をとるにつれ、最初に衝撃を受けた音楽のように自分にとって一番意味のある音楽に立ち返ると思うんだ。初期ハードコアの獰猛性や強烈さ、怒り、それから僕はいつも世界中の後期ハードコアの素晴らしい成長を楽しんでいる…。それからDEVOもね!!!!」

■バンドはどうやって選んでいるの?バンドが要望してくるの?

「リリースするレコードは全て僕が選んでいるよ。大量のデモ・テープを受け取るけど、Prankはデモ・テープの中からバンドを選んだことはないんだ。自分が見たり聴いたりしていて、サポートする価値があるなと思ったバンドを選んでいる。あるいは前から一緒にやろうと持ちかけてるバンドとね。Prankはメンバーと友だちだったり、ツアーやギグを一緒にやってるUSバンドが多いね。そういうバンドが友だちのバンドを紹介してくれてつながっていく。Prankの初期に作品を出したバンドのメンバーたちは、大抵が年をとってきて、自分のレーベルを始めたり、音楽を作ることをやめたりしている。今ではPrankのバンドたちは世界中に広がっているよ。BORN/DEADやBURY THE LIVING、WORLD BURNS TO DEATH、SIGNAL LOSTら今のUSのバンドは、みんな友だち同士でショウでも共演していて、DAMADやHIS HERO IS GONE、IN HUMANITYのようなPrankの初期の時代と状況が似ているね。でも今はこういう新しいバンドは少しずつ疎遠になってきていて、違う道を進んでいる。きっとまた戻るはずだよ。ユニークで面白いことをやろうと頑張っている人やバンドのどこに惹かれているのか話すことはできないけど、ずっとハードコア・シーンの枠組みにこだわってきている。僕がパンクやハードコアに夢中になってから、パンクやハードコアはずっと相対的に革新的で、進化したアイデアを携えてた。パンクは常に思考を前へと進めてくれ、進化し成長する助けになってくれていると思うんだよ。過去のルールや考え方の塊に捧げられるものなんかじゃなくてね」

■今、仕事はしているの?Prank Recordsが君の仕事?

「Prankに関して僕は常に心配を抱えている。もしPrankを仕事にするなら、利益を得ることにはっきりと関心を持たなければならないし、金を作ることにアーティスティックな妥協をしなければならないだろうね。自分の好みじゃないレコードも出さないとならないだろうし、金を稼ぐバンドかそうでないかを基準にバンドを選ぶことになるだろう。僕はそういう妥協は絶対にしたくない。バンドを選択するのは、芸術的に重要かまたは興味深いか、だと思っている。最近、こんなの初めてなんだけど、ビジネスを強く意識しなければならなくなった。レコード・レーベルとして存続し続けるのが、もうどうしようもなく難しくなってきているんだ。利益やコストに厳しく目を向ける必要が出てきて。Prankから僕の給与を出すのは全く無理。いつだって、金をこしらえようとし始めると、何かが巻き起こり、うまくいかなくなる。入手可能なバック・カタログを大量に抱えた巨大なレーベルでなければ厳しいね。Prankをフル・タイムでやってる僕には他の仕事を始めるのも厳しいし、これはもう大問題だ…。金のためにあらゆるジャンルのレコードをレコード・フェアやオンラインで売ってもみたよ。レゲエ、クラシカル、ヒップホップ、ロックンロール、あらゆるタイプの音楽…でもこれは重労働で強烈な仕事だね。
将来Prankをどんなふうに運営していくか、いくつかの変化を望んでいるんだ。在庫を抱えることなく、替わりにもっと回転よく、プレスの枚数も少なくして、限定盤のレコードやCDを作るように…。でも実際の仕事をする時間も作らないと。僕がやりたいと思っていることはPrankと同じようにフル・タイムで取り組まなくちゃならないから、それも難しいんだ。僕が学校で専攻したのはアートで、コミック系のストーリーに興味がある。それは愚かに聞こえるかもしれないけど…でもこの考えは僕がハードコア・パンクに持つ理念と同じくらい真摯なものなんだ」

■今後の予定は?新作も楽しみにしているよ。

「毎年、少ないけど良い作品を出したいと思っているんだ。パンク・シーンはいつの時代も、数多くのレコードよりも、素晴らしい作品を必要としているんじゃないかな。リリースしたい面白いバンドはいつもいるし、シーンを見ていると常に重要なレコードも出ている。これは僕の話になるけど、PAINTBOXの『Trip Trance & Travelling』と『Relicts』のヴィニール盤の到着を待ち望んでいるんだ。ここで彼らのヴィニール・レコードを作るのは本当に名誉なことだよ。世界中に彼らの音楽を広める助けにもなるし。後にMORPHEMEの7"EP、ACEPHALIXのLP/CD、AVSKUMのツアー7"、DESOLATIONの7"、IRON LUNGのLP/CDを出す予定だよ。今の人たちは過去以上に、もっと限定されててスペシャルなレコードを期待しているんじゃないのかな。それで、来年には最終的にTシャツなどを作るのと同様に、Prankの過去の作品も新しいパッケージにして再発するつもりなんだ」

日本のハードコアについて

■初めて聴いた日本のバンドは何かな?

「どう感じたかって?思い出せないんだ。最初に手に入れた日本のパンクのレコードは、GASTUNK『Dead Song』(LP)、OUTO『Many Questions,Poison Answers』(7")、LIP CREAM『Night Rider (More Than Fight)』(7")、STALIN『Mushi』(LP)、JUNK SCHIZO『Crimes Of Existence』(7")など。PUSMORTにDisorderやUNKOファンジンのメールオーダーで手に入れたよ。後になって、RECORD BOYのBeckさん、後にPROFANE EXISTENCE FAR EASTをやったIzumi Kuboとレコードをトレードしたね。ラジオ・ショウをやっていた当時、ラジオで流そうと思い、SELFISH Recordsに手紙を書いて、SELFISH作品のカセット・テープをお願いしたことがある…。ヴィニールを送ってもらうのはあまりにも高価過ぎたからね。ラジオで流すようにテープを送ってくれたよ!夏の間中芝刈り機で草刈の仕事をしながら、LIP CREAMの『Close To The Edge』をウォークマンのカセット・プレイヤーで何度も何度も繰り返し聴いたこともあったね。『Close To The Edge』とGAUZEのサードLPは未だに大好きな日本のパンク・レコードだ。どっちも500回以上は聴いてるんじゃないかな!!!来世でも聴けるように、僕の墓に投げ入れてくれ!!!!…彼らは信じられないほど素晴らしいよ。1995年まで日本を訪ねなかったのを後悔してる(この年、六本木BASEでG.I.S.M.、DEATH SIDE、GAUZEらが共演するショウがあったんだ)。日本について考えるのは、レコードはパンク・シーンの小さな部分にすぎないんじゃないかな。ライヴ・ショウのコミュニティやライヴ・パフォーマンスに関してのほうが大きな部分を占めているように思うんだ。LIP CREAMや多くの80'sのバンドのライヴを見ることができなくて悔しいよ」

■大学で日本語を勉強したみたいだね。なぜ日本語を学ぼうと思ったの?日本のハードコア・パンクと関係はある?

「日本語は大学で2年半勉強しただけなんだよ。単語と簡単な文章を知ってるだけだし、ヒラガナ、カタカナとちょっとカンジを読めるくらい…それも混乱してる!!!8月に日本に行く前にまた日本語を勉強したんだけど学ぶことが多すぎて唖然としてしまったよ。1980年にJames Clavellの小説をベースにした『SHOGUN』ていう作品がテレビで放送されていたんだ。英国人の水夫が封建時代の日本に漂着して始まる、サムライの大作だったように思う。アメリカで日本への認識が高まったんだけど、僕がこれを見た時はまだ若くて、とにかく夢中になったのが…ニンジャ!ニンジャ大好き!10代になる前から10代にかけてニンジャの本をたくさん持っていたな。PAINTBOXが僕の家に滞在した時に、彼らはこれを可笑しいと思ったんじゃないかな。たぶんニンジャに関する本を10冊ほど持っているから!!!それを手放すことなんてできないよ!!!滑稽だろ!僕はニンジャ・マスターにはなれない!!!…せめて君にそう話すだけ!君は全然知らないでしょ!!ハハハ(笑)!!!!日本語を勉強するにつれ、日本への関心が始まったんだと思うよ…。それに、子供の頃、ヤキトリを作る店で食べるのが堪らなく好きだったな!それから子どもの頃、『マグマ大使』や『ガメラ』も見ていたよ!!いつもいつも日本に惹かれてる!!」

■8月の来日で君が見た2つのライヴ、横浜FAD(RYDEEN/PAINTBOX/WORLD BURNS TO DEATH/BLOWBACK/IMPARA/FIGHT BACKが出演)と、新大久保EARTHDOM(PAINTBOX/WORLD BURNS TO DEATH/BLOWBACK/EXTINCT GOVERNMENT/GAUZE/NO PROBLEMが出演)のショウの感想を聞かせて。

「素晴らしかった!!全てのバンドが見事だったよ!ライヴで再び聴いたPAINTBOXの曲はこの上なく素晴らしかったし、BLOWBACKは最高のライヴ・バンドだった。WORLD BURNS TO DEATHはいい友だちさ。いつ見てもいいね。横浜のお客さんは年齢層が高かったように思う…サンフランシスコのショウに似てるね。逆にEARTHDOMには若い子たちが大勢来ていたね…こっちはサンフランシスコに近いオークランドやバークリーに似てる。日本を10年間訪れなかった間に、大きく変わっていてショックだったよ。悲しい変化は、電車の中で"マンガ"を読んでいる人をあまり見かけず、みんな携帯電話の画面ばかりをじっと見つめていたこと。EARTHDOMでバンドの間でマンガを読んでいるキッズを見つけた時は嬉しかったよ!!!オタク・ライフ・フォーエヴァー!!!!」

■過去と現在とで、日本のハードコア・パンク・シーンの変化は何か感じた?

「そうだね、ワールドワイドなパンク・シーンだと思う…。US、スウェーデン、ブラジル、日本…。どこもわずかなアイデアを発展させている、最高に面白い地だよね。それぞれ自分の表現を求めてより自由にやっているから。極初期の日本のパンクの歴史を振り返ってみると…初期UK 77シーンや1970年代後期のロサンジェルス/DANGERHOUSE周辺のパンク・シーンのような、多様性のあるサウンドとスタイルだったね。昔から活動している多くの日本のパンク・ミュージシャンに共通しているのは、素晴らしい革新的なスピリットだ。彼らは前進し続け、新しい音楽を作り続けているよ。大きな尊敬に値する。だって、USやヨーロッパのベテラン・バンドは、昔の曲やアイデアをそのままやり続けているだけなんだから。USに来る日本のバンドはUSと日本のシーンの両方に素晴らしい貢献をしている。1980年代後期にはUSのパンク・シーンは完全に崩壊していたんだ。DIYって方法を通して再び立て直したが、USシーンにおけるアティテュードや秩序は日本の影響を受けていると思う。日本のパンク・シーンにある強固でフレンドリーな共同体意識から世界は学ぶことがたくさんあるよ」

■君は日本のハードコア・パンクのヘヴィ・リスナーだよね。日本のハードコア・パンクの最大の魅力は何かな?

「強烈で揺るがない高いエネルギー、スピリット。あと細部や技術にまで気を配った最高の日本のアート。日本のパンク・ミュージシャンのミュージシャンシップに匹敵するものはないよ。世界中にも、新しいものを生み出す力や創造力のあるミュージャンはいるけど、技術も能力も高く、粘り強さもある日本のミュージシャンに並ぶものはない。

日本の奇妙な状況は、諦めてしまうか、またはわずかな者だけが根気強く続けるかという、1980年代のUSハードコア・シーンのようなところだと思うんだ…。Henry RollinsやDanzigはメインストリームの成功を獲得し続け、またはBAD BRAINSのようなベテランのバンドは時間を経るに連れ、最終的にメインストリームに認められるようになった。…STALINやあるいはLAUGHIN' NOSEやSTAR CLUBのようなバンドはそうだけど…。そこには"目に見えない障害"があるように思う(自分たちのアイデアを持っているし、野心も感じ取れるが、"目に見えない障害"の限界も持っている)。…こういうバンドは日本のパンク・シーンにおいて信じられないほど素晴らしい才能だよ…。でもいずれにしても世界中の人たちは日本のハードコア・パンクの偉大さをわかるようになった。ジャパニーズ・ハードコアは80年代または90年代のUSパンク・シーンでは人気がなかった。少数の愛好者にだけ支持されていたに過ぎなかったんだ。今じゃ、たくさんの人たちが新しいバンドも昔のバンドも知っている」

その他

■Warped Tourに出演しているバンドに関してはどう?Warped Tourはまだハードコアを知らないキッズにとっては、絶好の機会になると思う?

「Warped Tourを見たことがないんだ!Prankとはかけ離れたシーンだけど、あれに出てるBAD RELIGIONやDESCENDENTSなどは好きなバンドだよ。見方によれば、パンクの入門段階になるかもしれないね。Warped TourやFat Wreck ChordsやEpitaphなどは、子どもだった僕にとってのADAM AND THE ANTSと同じような機能を持ってるんじゃないのかな。でもこれまでずっと、USのDIYパンク・シーンと結びついているような、参加意識や係わり合いってものがないね。金を払い、楽しんで帰っていく。映画やテレビ番組と同様に関わり合うってことがないんだ」

■MyspaceやYoutubeは?レコードやCDを買わずに音楽を聴けるようになったし、パソコンでハードコア・ショウも見ることもできる。

「そうだね、パンク全体の考え方は音楽やアイデアを外に広げることで、インターネットはこれを簡単にしてくれる。昔は作品がすぐに入手可能か、それが素晴らしいのかなんて情報を得るのはとても難しかった。これに関わる問題は、一切金は払わない、受け取る努力もしないってことだよ。時には長いことかけて探すのも、代金を払うのも、一生懸命に手間ひまかけて動くことも、ほとんど評価されないことだってあると思うよ。レコードを買う人がいたら、それって変わってて珍しいことになるのかもしれないね。好きになり始めるまで、何回か聴くかもしれない。今じゃコンピューターのハード・ドライヴからすぐに消去できるし、アルバムを10枚以上ダウンロードできる。CDはUSじゃフォーマットとして、完全に死滅してるよ。販売も相当厳しい。みんな無料の音楽をダウンロードするかMP3オンラインで購入するか、ヴィニールを買ってる。日本でまだCDが売ってるのには驚いたよ。でもCDを作るのは簡単だから日本にとってはいいフォーマットなんだと思う。小さいし持

日本のパンク・シーンにある強固でフレンドリーな共同体意識から世界は学ぶことがたくさんある

ち運びも便利だしね。イギリス、ドイツ、ロシアなんかじゃ無料でダウンロードできるサイトが氾濫している…。たぶん日本のファンはとても礼儀正しいんじゃないかな!!無料の音楽はレコード・レーベルの運営を窮地に追い込んでいる。CDに関しては、ヴィニールを作るのにコストが2、3倍かかるところをCDは比較的安く制作できる。生き残るには新しい方策が必要だよ。Prankの作品をインターネットに無料で流しているやつがいて動揺しているんだ。今ではレコードをどう作るか、レーベルの宣伝になるようにインターネットをどう使うか、賢くならなくちゃいけないと悟ったよ」

■USの政治や外交については?Barack Obamaのことはどう考えている?

「George W. Bushは最悪のシステムだよ。最悪の戦争を引き起こしたうえに、捕虜を拷問にかけ、アメリカ経済を完全に崩壊させたひどい大統領さ。君が大統領なら、まずは大企業の、2番目に国民のために働くだろう。Obamaは真に急進的な改革はできない…しかし露骨に自分の友人に利益がいくようにするGeorge W. Bushに比べればましだよ。Obamaは革新的なことをやるだろうが、USの保守的な要素はかなり強力で時代遅れの考えなんだ。だから仕事は相当きついだろう。アメリカは歴史の始まりから様々な問題を抱えている…アメリカ南北戦争は150年も前のことなのに、南部と北部ははっきりと区別できるし、全く違う土地だ。最終的にはアフリカ系アメリカ人の大統領は良かったよ。USはアフリカの奴隷とネイティヴ・アメリカンの消滅により築かれた。だから少なくともアメリカ社会の亀裂の一つをふさぐ助けにはなると思うんだよ。これは人々にとってはまだまだ苦しい現実の問題だから。アフリカ系アメリカ人のコミュニティには経済的機会は十分じゃない。でもアフリカ系アメリカ人の大統領の登場によって、多くの希望と感動が与えられたと思う」

■ハードコア・パンク以外で好きなバンドは?趣味は何かな?

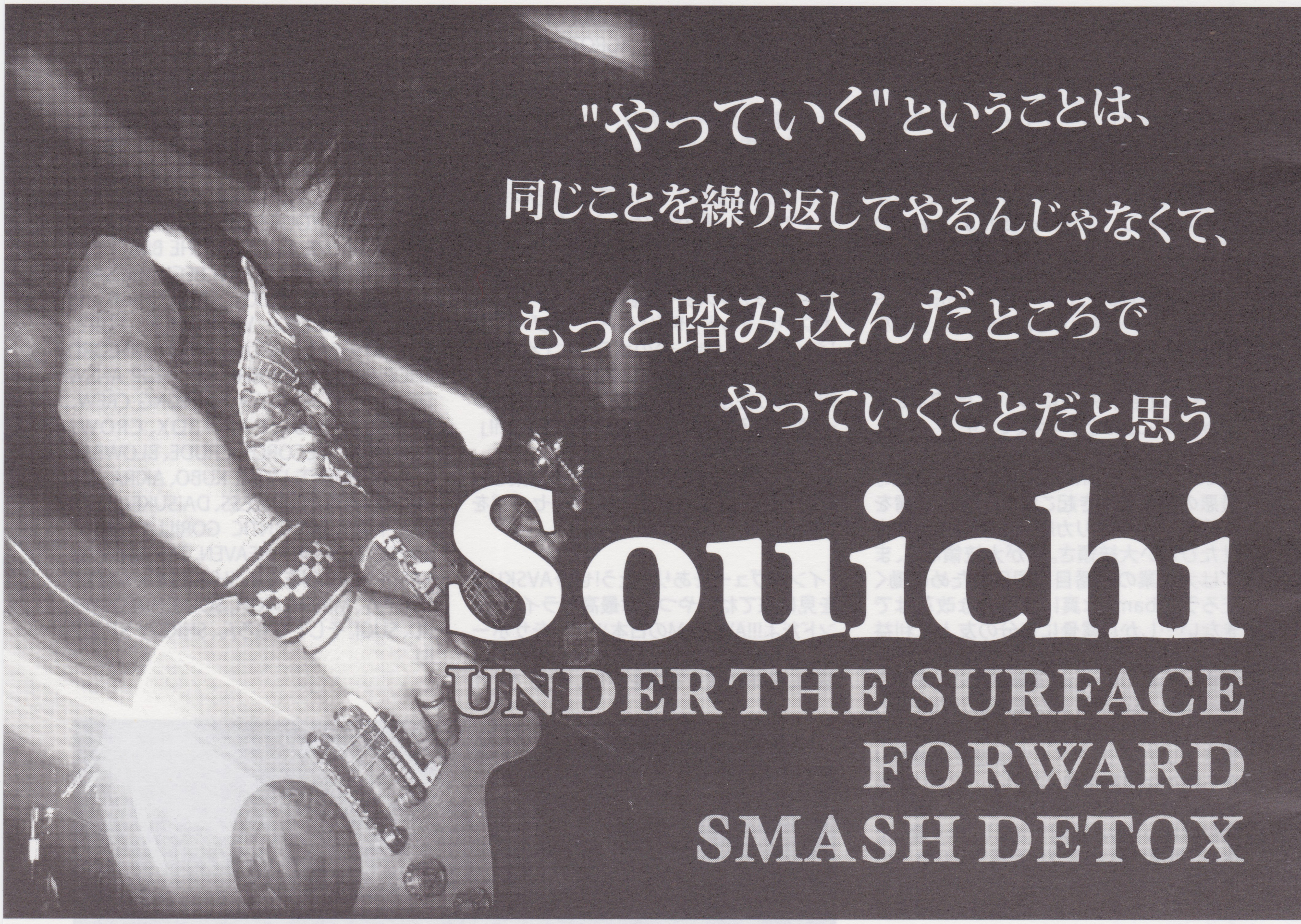
「レコードを売っていたと話したけど、ジャズにドラムンベース、クラシカル、60'sロックにソウルやもう何でも、とにかく色んな音楽を聴いているよ。80'sのニューウェイヴの他にはこういう感じの音楽を個人的なコレクションとして持ち続けることはないけどね。夏の間中、TEARS FOR FEARSの『The Hurting』(LP)を聴いて過ごしたよ。なぜかって???"Depression"(憂鬱)だったと思う。わからないな…。それと60'sサーフとガレージも聴いていたね。奥さんはタヒチアンドラムとダンス・ミュージックを集めている。僕らはそういうレコードを聴いたり集めたりしてるよ。USの人っていうのは、聴いている音楽の範囲が広い日本やヨーロッパの人たちよりも、ハードコアやパンクをもっと頻繁にそればかりを聴きがちだと思うんだ。僕のレコード・コレクションの90%はハードコアとパンクと言えるけど、THE BUZZCOCKS(大好きなバンド)、EBBA GRON、MC5からDESTINO FINAL、AGROTOXICOやINSECT WARFAREまで様々だよ。

趣味は…今年は時間がなかったけど、コミックを読んだり描いたり、モンスター映画を見たりすることだね。レコードを探すのが主要な趣味になるけど、それは仕事に似ているね。お気に入りの映画は『フランケンシュタイン』、『フランケンシュタインの花嫁』、『ナイト・オブ・ザ・リビングデッド』、『大アマゾンの半魚人』、『エイリアン』などの古典のモンスター映画だね。『ショーン・オブ・ザ・デッド』や『リターン・オブ・ザ・リビングデッド』なんかのホラー・コメディーも好きだな…。でも『リング』や『呪怨』、『仄暗い水の底から』なんて最近の日本のホラー映画も好きなんだよね。ゾクゾクする!!!」

■AVSKUMと一緒にまた会えるのを楽しみにしているよ。日本の読者にメッセージをお願い。

「インタヴューをありがとう!ぜひAVSKUMを見に来てね…やつらは最高のライヴ・バンドだよ!!!AVSKUMの日本ツアーをサポートしてくれるD-CLONEとREALITY CRISISに感謝。長年に渡って僕を手伝い助けてくれたバンドや色んな人たちがいなければ、Prankでやってきたことは実現できなかった。喜んで共に時間を過ごしてくれたたくさんの日本の人たち、みんなのお陰です。みんなの友情や援助に本当にたくさんの尊敬と称賛と感謝を…YOSHIO KIMURA and ASSFORT、TADASHI SATOH/HG FACT、KIKU/CHARM、THE GAIA、SLIGHT SLAPPERS、SMASH YOUR FACE、THE HECK、WAG PLATY、GAUZE、FUCK ON THE BEACH、SHIKABANE、JABARA、ERICA BECK and SATORU from RECORD BOY、KATSUSHIGE and TIME BOMB、NICE VIEW、TOTAL FURY、TOSHIO IIJIMA and TAKAHIRO at RECORD SHOP BASE、KENJI RECORD SHOP ANSWER and THE NAGOYA DRINKING CREW、TAKESHI/CFDL、PAINTBOX、CROW、TAKU/NAT RECORDS、CRUDE、BLOWBACK、JUDGEMENT、IZUMI KUBO、AKIRA TAKEUCHI、LITTLE PRINCESS、DAISUKE/ELEPHANT MAN、ROMANTIC GORILLA、NAOMI and KEI from DISK HEAVEN、TETSU/ENVY、YASUHIRO KOKETSU、SHIN/PUNK AND DESTROY、MR.SHUTOH、SOUICHI/FORWARD、SUGI、そしてもちろん、SHIGGY STYLE!!!!」





"やっていく"ということは、同じことを繰り返してやるんじゃなくて、もっと踏み込んだところでやっていくことだと思う

Souichi

UNDER THE SURFACE
FORWARD
SMASH DETOX

FORWARDのギターリストであり、近年はハードコア・パンク・レーベルUNDER THE SURFACEを主宰しているSouichiさん。ドパンクな作品のリリースに海外バンドの招聘と、常にアグレッシヴな活動を見せつけてくれている。先頃ついにリリースされたハードコア・オムニバス『DEMENTED ANTHEM HARDCORE ASSEMBLAGE』の話題を主軸に、色々と話しを聞いてきた。ハードコア・パンクの"未来"へと向けられた強い意志を、ここから感じ取ってもらえれば幸いだ。

■レーベルUNDER THE SURFACEを始めた動機というのは?

「一時期FORWARDのメンバーが体調を崩してしまって、殆ど活動が出来ない時期があって。ライヴも出来ない状況が続いてしまっていた。そんで、自分的にも止まっているのが嫌で、バンドが動けないんだったら別の形でも動いていたいなと思って始めたのがきっかけだった。あと川上(DISCLOSE)の死が転機になった。余談になるけど奴と俺はお互いいわゆる"別"のハードコア・シーンで活動していて、殆どライヴでは絡むことはなかったんだけど、昔は同じバンドでプレイしていたこともあるし当時からお互いシーンを盛り上げようと頑張っていた。当時から奴は海外とよくコンタクトを取ってた。本当に精力的だった。その時思ったのは、ああ、こいつは世界に出たいんだなって。2007年は奴がこの世を去ったとても悲しく寂しい年だったけど、志半ばで斃れた川上の分まで俺が世界に出てやるよ、土佐っ子としても、お前の代わりにやってやるよってね。それがきっかけ。あとレーベル運営に関してはDISK UNION、PLAY FAST!の松本氏にはいつもお世話になってて感謝してます」

■方向性としてはどんなのを?

「ハードコア+パンク。自分が聴いてもゴリゴリのハードコアしか出さない。パンク・バンドでも、アグレッシヴな(笑)」

■ああ(笑)。

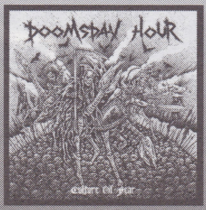
「色んな意味でね(笑)。ドパンクな生き様を持っているバンドなら基本的にOK」

■幅広くじゃなく、ピンポイントで。

「人間的にパンクな、ビシッとしたものを持っている人間たちの音を出すレーベルです。クラストだのジャパコアだのと呼ばれるくだらないカテゴライズされた壁を壊したいというのが第一にあるね」

■始める時に、周りの状況と言うか、音源が売れないという周囲の声もやはりありましたよね。









「一時期の半分以下とか、どんどんフォーマットがCDから配信に変わって行ったり、アナログ聴く人の人口にしてもね。レーベルとしてはなかなか厳しいと。でも、売れる売れないより、こういう音を世に出したいというのが第一で。やっているからには、ちゃんとプロモーションもしたいし、作った商品の責任も持って売ると。…まあ、基本的に出せりゃいいみたいな(笑)。一人でも聴いてくれればいい。時代に逆行しているというのはあるかもしれない。そういうのは、ハードコア・パンクの初期衝動というのは、同じだからね」

■海外バンドのリリースにしても、あまり日本で知られていないバンドを紹介しよう、という姿勢も感じますが。

「ああ、確かに。FORWARDの2004、2006年のUSツアーの時、向こうのバンドと一緒にライヴやったりして、音で衝撃を受けた部分があったり、ライフスタイルにしても。決して日本ではビッグネームじゃないけどそういうドパンク・バンドを、他の日本の人たちにも聴いてもらいたい。平行して、日本へのツアーで沢山友達を作ってもらって、日本の皆にも交流してもらいたいなと。作品リリースして向こうのバンドを日本に呼んで、日本のバンドも向こうにツアーに行ってもらうという形を徐々に作って行きたい。双方のシーンの活性化が出来ればいいなと、そのきっかけを作りたいなと思ってる」

■だから、海外のバンドの招聘も凄くされていて。

「個人で呼ぶのは結構きつい時もあるんだけどね(笑)。逆に、日本のバンドのライヴを向こうでブッキングしてもらったり。この状況が15年くらい早く来ていれば、今の状況も変わっていたかなと」

■15年前ですとどうしてもある意味、大御所的なバンドの来日が多かったような。

「そう。で、バンドが呼ぶんじゃなくて、デカイところ(会社)が呼ぶというか。ここ最近になって、バンドが呼ぶようになって、いいことですよね」

■この夏だけでも沢山来ましたしね。

「EXTREME NOISE TERRORにWORLD BURNS TO DEATH、UNIT 21、IMPERIAL LEATHER、FY FAN、DESTINO FINAL、UK御三家。10月～11月にはPISSCHRIST。いい流れになってきたなと」

■オムニバスの『DEMENTED ANTHEM HARDCORE ASSEMBLAGE』ですが、完成までに一年半くらいかかったようで。本作のアイデアはどこから?

「さすがに27バンドも集めるのは一筋縄ではいかなかった(笑)。あと、実際に海外へ行ったバンドなら分かると思うんだけど、日本のバンドって日本人が思ってる程知られていなくて。ツアーへ行っても、"誰々がどのバンドを昔やっていて今はこういうバンドをやっている"というところまで知っている人もいれば、本当、"お前らナニ人だ?"という奴も。"この前、東京行ってきたぜ"って言う奴と話してたら、よくよく聞くと行ったのは香港だったりして(笑)。その程度の認知度。日本のハードコアっていうのが、マニアが聴く音楽というか、対等な立場で聴かれる音楽ではないのかなと、感じてしまって。結局、色物じゃないけど、そういう感じで見てくるのも多数いるから、これは誤解が誤解を生むなと。逆に日本でも、外国人のバンドとは一線を引く人たちも、日本のバンドもまだまだいる。外国のパンクスも文化、習慣の違いはあるだろうけどもやっていること、考えていることは日本のパンクスのそれと当然同じなんだけど、言葉、習慣の違いでうまくコミュニケート出来ない。結果、お互い妄想から突然変異的に生まれる憎しみの感情から争い事になることもある。このコンピが双方の国のバンド、リスナーに、何も変わらない皆同じパンクスなんだということを少しでも分かってもらえればいいなと思った。ちなみに今このコンピのLPのリリースをPRANK RECORDSのKen Sandersonにお願いしてる所なんだけど、ホントに国境関係なくハードコア・パンクスは皆同じなんだということを分かってもらいたいね。国境なんて国家が作っているモノなんだから」

■同じ目線で。

「日本という島国から来たジャパニーズの小ちゃいのが、凄くデカイ音を出している、というので食いついてくる奴もいるし。そこで思ったのが、もっとお互いのことを知った方がいいと。こういう形での音源もコンスタンスに出していければいいかと。今回、日本とアメリカとカナダのバンドに限定したのも、"実際に自分が一緒に演ったバンド"っていうのがあって。バンドを選んだ基準は、自分が一緒に演って、そのバンド、人間を分かっている、というところ。FORWARDがアメリカにしか行ってないし、この目で見たバンドしか入れてないから限定されたんだけど。カナダのINEPSYとかは自分が元々好きで(笑)、あとのバンドはテキサスのイヴェント(CHAOS IN TEJAS)で知り合ったり。あと、テキサスのUNIT 21なんかは飛び抜けてたね」

■Souichiさんから、バンドへの指示は何かあったんですか?

「それは全然なくて。もらえる1曲はお任せで」

■ブックレットもいいですね、バンドが1ページずつ担当していて。

「昔の、というか90年代初期くらいの感じで(笑)」

■紙一枚だけのインナーよりもリスナーには嬉しいです。

「分かりやすいというか、ガキの頃にこういうイメージのものがあったしね(笑)」

■(収録されているアメリカの)BLUDWULFはちょっとレイジーなところがあるって、人から聞いたことがあるんですけど、実際どうでしたか?

「全然。Jimmi Sinn(Vo)に頼んでから3ヶ月くらいですぐ送ってくれて。America Nightmareちゃん(Ba)、抜けちゃったんだよね。メンバーには2回くらい会ったことあるんだけど。Americaちゃん可愛かったな(笑)」

■(笑)。声をかけたけど、ダメだったバンドっています?

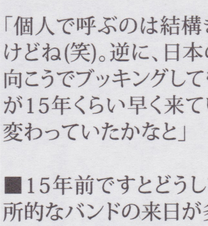
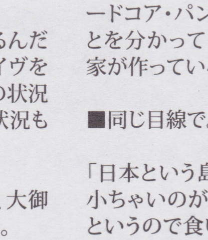
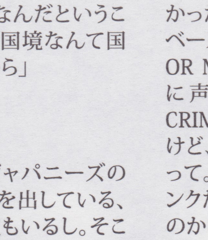
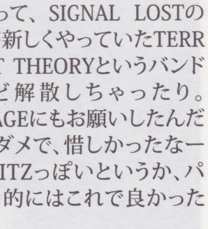
「まずSIGNAL LOSTに打診したけど今は活動休止状態で駄目で。基本的に年寄りバンドじゃなくて、若いバンドをメインで出したかったというのもあって、SIGNAL LOSTのベースのJasmineが新しくやっていたTERROR MANAGEMENT THEORYというバンドに声をかけたけど解散しちゃったり。CRIMINAL DAMAGEにもお願いしたんだけど、忙しいとかでダメで、惜しかったなーって。でも彼らはBLITZっぽいというか、パンクだから、まとまり的にはこれで良かったのかな」

■今作、見事にハードコアのみです(笑)。

「全てハードコア、全身ハードコア(笑)」

■このタイトル、『DEMENTED ANTHEM HARDCORE ASSEMBLAGE』っていうのは?

「意味は"狂気硬核音源集合体"みたいな感じなんだけど、自分はそういうものを考え出すセンスは元々ないのは知っているのでTRAGEDY、WARCRYのTodd Burdetteにタイトルを考えてくれって頼んだ。あとジャケが現ORIGIN OF [M]のGuy君です。1980年代後半にリリースされた『MY MEAT'S YOU

R POISON』てシステマとかOUTO、チキンバウエルズ、LIP CREAM、GUDON、SOBとかが入っている加害妄想からのオムニバスLPのジャケもGuy君が描いたんだけど、それ以来だから、20年振りぐらいに描いてもらってホント感謝っす」

■80年代の雰囲気ですよね。

「最近こういう絵ってないから、個人的にもいいなーって」

■インパクトありますね。

「最初にデザインを見た時に、エー!!って一瞬思って。自分が想像していたのとは違うイメージだったからびっくりしたけど。人間びっくりするということは、それだけ良いもんだなと。それくらい衝撃を受けた(笑)」

■それっぽいと、お店でも他の作品に埋もれちゃいますし。

「飛び抜けているよね。感謝しています」

■次のリリース予定はスプリットが2枚。

「THE SLOWMOTIONSとBURNING LEATHER。パンク・ロック・バンドとMOTORHEADみたいなの(笑)。あれ(BURNING LEATHER)はMOTORHEADというよりも、MOTORHEAD→INEPSY→BURNING LEATHERっていう」

■ああ、直接じゃない(笑)。

「BURNING LEATHERにはKelly(DEFIANCE,etc)が入ったみたい」

■そうなんですか～。

「このスプリットを出そうと思ったのは、どうしてもスプリットって似たような音のバンド同士で出すことが多いけど、今回はあくまでも個人的な主観だけれども、似たような"人間性"で組み合わせてみたかった(笑)。国が違うとやる音楽も違ってくるけど、双方の人間のノリがものすごく近い。パーティーアニマルでクレイジーで、酒を浴びる程呑んで騒いで(笑)。多分同じ国に生まれたら一緒に同じバンドでプレイしてるだろうみたいな、彼等は同じ匂いがする。作品として音だけ聴くと全く違うから、異色な感じで良いのかなと。国が変われば音も変わるのかな。誰かがスプリットを出すという話しを、LEBENDEN TOTENのChanelに話したら、"なんでSLOWMOTIONSがBURNING LEATHERなんかと出すんだ??"ってブツブツ言っていたみたいで(笑)。そうか、そんなにあいつらはひどいのかーって(笑)。まぁ、SLOWMOTIONSもかなりひどいから(笑)。面白いメンツだなーって」

■もう一枚は?

「DOOMSDAY HOURとNO PROBLEM。これも男気と男気がぶつかる、かなりイケイケなスプリットになるのは間違いない!」

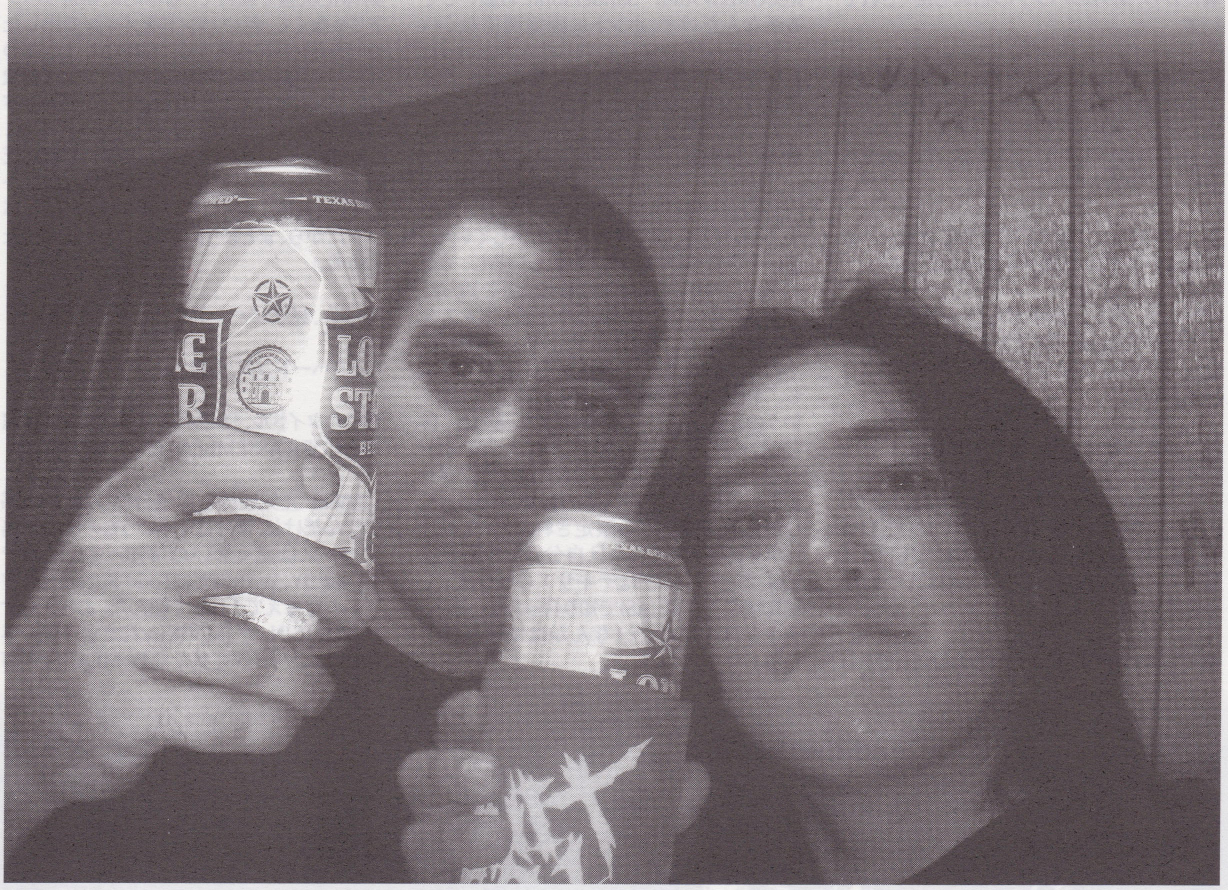
■その先はまだ?

「その先はまだ未定だけど、今度は国内外の女性ヴォーカルのバンドのオムニバスとかどうかなって。格好良いバンドが沢山いるみたいだし」

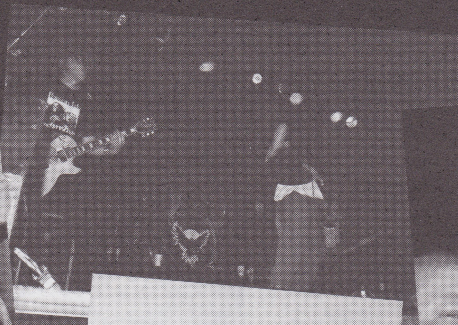
■LIFEのAbeさん喜びますね(笑)。今、FORWARDはどうなっているんですか?

「ドラムが脱退してしまって、それが一月前くらいの話しで(※この取材は10月上旬に行った)。今、ドラムを募集しているところ。一人連絡が来て、FORWARDでドラムをやりたいという人が。まだ会ったことはないんだ

日本のハードコアは一番だと思っている











けど、今度練習入る。のんびりしてられないからね、来年のスケジュールとかみんなやっているもんね。今の時点でライヴの予定がないっていうのは、今年中に出来るか出来ないか…。AVSKUMのライヴにもAbeちゃんから誘われているんだけど、それにも出たいなーと。ちょっと未定だけど」

■新バンドを組まれたようですね。

「東京+テキサス共同プロジェクト、SMASH DETOX。きっかけは、個人的に数年前からWORLD BURNS TO DEATHのZac(Gu)と仲が良くて、"バンドやる?"みたいな感じである日、奴が振ってきて、セッションみたいなプロジェクトをやりたいと。で、あいつが指定してきたのが、ドラムがMukachin、ベースにIizawa、ヴォーカルにIshiyaで、あとギターを俺がやるという。そのあとにAshley(SIGNAL LOST)も入った。しかしツイン・ギター、ツイン・ヴォーカルって面白いなーって思ったね(笑)。この前のWORLD BURNS TO DEATHのツアーの後にアワハウスでレコーディングしたから、出来たら今年中にシングルを出したいな」

■Ashleyのヴォーカル録りはアメリカで?

「アメリカで録って。Ishiyaがヴォーカルをいれて、それをJack(WORLD BURNS TO DEATH)が持っているENORMOUS DOOR STUDIOていうスタジオに送って、そこでAshleyが録って、プレスするんじゃないかな」

■曲はどんなふうに?

「曲はZacが持ってきたのを、自分たちなりにアレンジして。基本的にKEGCHARGEとWORLD BURNS TO DEATHだなっていうのが垣間見れて面白かったな。これがこいつのスタイルなんだなって。今まで外国人が日本のバンドに入るっていうのはあったから珍しくもないんだけど、このバンドに関しては、お互いの国で昔から頑張って自分の国でハードコアをやってきて、実績を出した人間が国籍、国境を越えて一つのバンドをやる、というのに意味があるんじゃないかなと。更に一歩踏み込んで突き詰めて行こうかなと、メンタル的な部分でも。これがきっかけになって、日本のバンドの人たちが向こうのバンドの人たちとバンドを組んだら、国境、境界もなくなっていくだろうし。これは先に道を作って行かないとダメかなと思った。どうせ日本のブームなんて一時期より忘れられてきているから、元に戻っちゃうかもしれない。でもそういうのだけは避けたい、交流を活発にしたい、せめてハードコアの世界だけでも。国同士だと対等じゃないんだから、せめてハードコア・パンクの世界では対等じゃないとね(笑)」

■根底には危機感が強い?

「俺が来年で40歳なんだけど、自分が10代の時は30、40代のパンクスって考えられなかったし。今は現役でやっているバンドの中にも40代、50代でもいるけど、実際に思ったのは、俺たちももう十分オッサンなんだけど、自分らが思っている程、俺たちは全く若くないと。時代はどんどん進んでいるわけで、自分らがやっている新しいこと、革新的だと思っている部分が、時代の動きの方が早くて、結局遅れていることだったり。結局、アングラな部分で留まっているのかなって。昔はパンク、ハードコアって凄く特別なものだったけど、今の10代の子供たちは全く違うことを考えているだろうし、いずれ淘汰されるんじゃないかという危機感はある。実は、自分たちが思っていることだけだった、とか。"やっていく"ということは、同じことを繰り返してやるんじゃなくて、もっと踏み込んだところでやっていくことだと思うんだけど、なんて言うのかな。気づかずに、動いているつもりが、動いていなかったり。自分ではやっているつもりでも、やっていなかったり。そういうのが個人的にあって、反省する面も多々あった。人間、年をとると頭が固くなってくるというけど、昔はこのやり方で良かった、という自負もあるもんで、それで良いと思ってやったことが、その時代にそぐわなかったりとかすることもあるだろうし、それを押し通すと色々な弊害が出て来ていたように思う。時代なんて関係ない、と自分の信じる世界を突き詰めてそれを若い世代に伝えるのも良いことだと思うけど、若い世代には実際自分たちの考えでやってもらいたい。あくまで自分はそれを手助けすることしか出来ないけどね。あと上下関係というのは、会社でもパンクの世界でもあるだろうけど、人間は人格者以外は権力を持っちゃダメだなって。そうでないと悪いほうに作用する時が多いしね(笑)。何もない自分には何が出来るのかって思ったのは、もっと海外の若いシーンと日本のシーンが相互に交流できる環境を整えて行きたいなと思ったことだね」

■世代間の壁がなくなってきているのは感じますね。Souichiさんの力もあるでしょうし。

「壁はなくした方がいい、膜は破った方がいい(笑)。日本だと先輩後輩という言葉もあるし、対等にものを言うのが難しい世界で。良い意味での先輩後輩はいいけど、上がいるから下が伸びないとか、よく聞く。そんなマイナスの部分はなくした方がいいなと思っている。ハードコア・パンクは一番血気盛んな、若い世代にやってもらいたい。これまでのシーンの中で、皆が頑張ってやってきたからジャパニーズ・ハードコアが誇れるものとして、外国にも知られるようになったけど、今まで閉じていた部分を開いていけば、もっと良くなるだろうからね。日本のハードコアは一番だと思っている。その中のジャンルに限定されたものじゃなくて、日本人がやっているハードコアって、一番だと思うからね」

WORLD MELODIC POP PUNK TRAVELLING Vol.1 Spain

TEXT:
Yuki SP(Y)/さとし★HIP CAT'S(S)/オニギリギリオ(O)

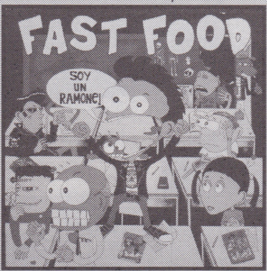
AIRBAG/MONDO CRETINO



現行SPAIN POP PUNK四天王。2000年リリースの大名盤1stアルバムがリマスターされて嬉しい再発！倍速SCREECHING WEASELばりの巻き舌ヴォーカル＆スピード感＆キャッチーなメロディー＆マシンガン・サウンドは非の打ち所がありません。最近の彼らではあまり見られなくなったスッテンコロリンと突き進むドタバタチューンが最高です。(Y)

(WILD PUNK WPR044-25)CD 2009年

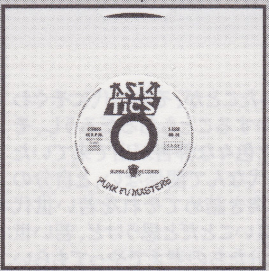
FAST FOOD/SOY UN RAMONE



現行SPAIN POP PUNK四天王。1998年にリリースし一部で話題騒然となった傑作1stアルバム。気を抜くと転びそうな高速チープRamone Punkチューンに鼻にかかった早口ヴォーカル。しょぼくて胸を突くメロディーも素晴らしいです。2010年にSP RECORDSからこの1stと2ndアルバムの曲を再録して再発する予定です。やったね！(Y)

(PUNCH PUNCH005)CD/LP 1998年

ASIATICS/PUNK FU MATERS



チャイナドレスに身を包み、明らかにおかしなアートワークは「間違ったアジア好きのヨーロッパ人」を演じている男2女2の4人組。1曲目"Dennis"から「I don't like your Pennis!」を歌ってしまうところも冷や汗もの。キーボードも上手く使った女性ドラム・ヴォーカル変則POWER POP PUNK。残念ながら既に活動を停止しています。(Y)

(Rumble RR-28)CD 2007年

THE FEEDBACKS/SPEEDWAY



No Tomorrowからの1stアルバムで全世界のRamones Pop Punkファンを虜にした彼らがサウンドを移行していく過程でリリースした2ndアルバム。完全にPower Pop方面に向かってしまった3rdアルバムとは違い、全てが神懸り的なバランスに仕上がっています。再生ボタンを押して2秒でテンションをMAXにしてくれるパワーのある大名盤です。(Y)

(ROCK INDIANA CINDI 085)CD 1999年

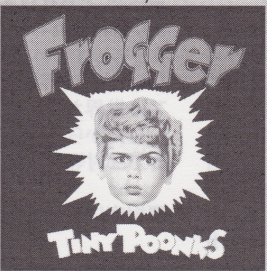
CORN FLAKES/NO PROBLEM



ポップコア～ビーチパンクの1stアルバム。オリジナル盤は古参レーベルB-COREから1990年にLPのみでリリース。ようやくメンバーの許可が出てついに再発。このバンドは2ndアルバムが有名だけど、あれは名盤なので比べてしまうのは酷ってもんでしょ。この音源には若さ溢れる初期衝動が詰まっていて聴きなおしてみるとかなりかっこいい！へっぽこだけどね。ALLミーツ7 SECONDSな感じなのでリリース当時はハードコア・ファンにも支持されていた。(O)

(SUPERMARKET FANTASY SMF003)CD 2009年

FROGGER/TINY POONKS



お馴染みSUBTERFUGEから正統派POP PUNKなフロッガーの19曲入りフルアルバム。SCREECHING WEASEL、THE QUEERS、MTX等90年代中期LOOKOUT RECORDSのBANDのいいとこ取り。ティーン向けの青春リリックはおっさんになってから聴いてもトキメキメモリアル。(S)

(SUBTERFUGE REF21-071)LP 1996年

DDT/VIAJE ALUCINANTE



SUGUS、FAST FOOD、VIERNES 13という現行スペイン・ポップ・パンク・シーンのトップを走るバンドのプロデューサーとしても活躍中の重鎮を含むバンド。目下のところ最新アルバムの4thアルバム。13曲収録で「ローローローロロ」な"?"マークが2万個以上頭に点滅する迷曲もあり、なかだるみする曲もあるんだけどSHOCK TREATMENT直系な疾走感全開で完璧な単弦ギターワーク、ウーワーコーラスな曲は否が応にもテンション上がる！(O)

(MUSICA OARA TOP TOP009)CD 2004年

JUNIPER MOON/EL RESTO DE MI VIDA



女の子ヴォーカルに女の子コーラスという可愛さとポップさを全面に出したバンド。この1stアルバムでは、ファストチューンときらきらポップチューンが半々くらい。そのファストチューンときたらSHOCK TREATMENT、DEPRESSING CLAIMな曲をキーボード全開で女の子にやらせたらこんな感じだろってな禁じ手ですよ！！ドキドキしっぱなしのキラキラ具合も、たまったもんじゃありません。PUNK色が濃かった頃の初期音源集をついにリリースさせていただきます。(O)

(ELEFANT ER-1097)CD 2002年

F.A.N.T.A-split w/BLITZKRIEG BOYS



現行SPAIN POP PUNK四天王。2ndアルバムに松田優作をどーんと持ってきていたりする彼らの最新作がこちら。SONIC SURF CITY～QUEERSもびっくりの極上SURF POP PUNKサウンドを披露してくれております。Joe Queerに捧げた曲やRIVERDALESのスペイン語カヴァーも収録。4曲じゃ全く足りません。早くニュー・アルバム出して頂戴！(Y)

(RUMBLE RR39)CD 2008年

LA LA LOVE YOU/UMM…QUE RICO!



EUROVISIONというヨーロッパで行われるミュージック・フェスで決勝リーグまで進出してしまい、あれよあれよと人気者になったLA LA LOVE YOUの1stフルレングス。目を疑うほどの酷いルックスからは想像も出来ない胸キュン激甘POP PUNKチューンの連発。おそらく今後リリースされる2ndは歴史的大名盤になるでしょう。超期待！(Y)

(WATERSLIDE WS038)CD 2009年

EL ZINE初登場でうれしいかぎりです！東京などと2016年開催のオリンピック招致都市を一緒に争った街・マドリードを首都におくスペイン。そんなどうでもいいネタで日本と接点を持つスペインのバンドを今回紹介させていただきます。紹介させていただくバンドは個人的な趣向からメロディック/ポップ・パンク・バンド中心で現在のシーンに影響を与えていると思われるバンドや、これまでに日本ではあまり紹介されていない現役のバンド中心（一部入手困難作あり）とさせていただきました。他国の音楽を独自のエッセンスを加え昇華させるところは日本のバンドに似ている気がするので食べず嫌いせずに聴いてみていただければと思います！

LOS MUERTOS DE CRISTO/A LAS BARRICADAS



「おいおい！スペインPOP　PUNKたって、結局LOOKOUT系しか居ねーじゃねーか！」ってお困りのそこの貴方！今回紹介する商品はこちら！スッカスカの演奏にシャウト系のVoだけどメロディーはちゃんとあって、ポリティカルな歌詞だけどスペイン語だからなぜかカワゆく聴こえちゃう!あー困った。民謡的なメロディーと巻き舌さえなければ間違いなくスペインの7　SECONDS。(S)

(FOBIA　NONE)CD　1994年

NASTI DE PLASTI/!!!NO SOMOS DE AQUI!!!



北部出身のローカル・ポップ・パンク・バンド。若手バンドだけどメンバーの見た目が完全なおっさんです(笑)。自主でリリースした13曲入り1stアルバム。スコスコ度は抑えめでエイト・ビートの曲が中心でキーボードを効果的に入れていたりサーフな色もありなのでQUEERSとかRAMONEパンク好きな人は気に入ってくれるのでは。まだまだ若手なので駄作も含んでいますが、最近はFAST　FOODやF.A.N.T.A.等ともライヴをしているようなので今後が期待のおじさんです(笑)。(O)

(自主)CD　2007年

LOS REACTIVOS/EX TEENAGERS



現行SPAIN POP PUNK四天王。ex.DEPRESSING CLAIM、SHOCK TREATMENT、SUZY & LOS QUATTROという強烈なメンツで悪いわけがありません。DEPRESSING CLAIMではコーラス担当だったけれど、ここではメインに抜擢されているLuisの上手すぎるスペイン語のヴォーカル。それに負けない素晴らしいコーラス。そして完璧な演奏。パーフェクト！(Y)

(LUCINDA　LUCA007)CD　2007年

SHOCK TREATMENT/MASACRE EN EL BURGER KING



古株レーベルSUBTERFUGEからの1st 7"です。音はペラペラで初期衝動的な所は隠せないが後に大化けする片鱗は伺えます。名曲"MASACRE EN EL BURGER KING"が唯一聴けるありがたぁ〜い一枚。SCREECHING WEASEL・THE QUEERS系サウンド+スペイン語独特な巻き舌＝キャッチーさUP！の法則の第一人者(笑)。(S)

(SUBTERFUGE　REF21-013)7"　1992年

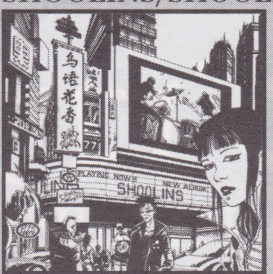
LOS SUMMERS/LA CHICA DE CADA VERANO



SCREECHING WEASEL・THE QUEERS系のハードな部分(笑)は全面カット！その代わりにBEACH BOYSのサーフテイスト、BEATNIK TERMITESのバブルガム・テイストを注入で西語！な感じ。とにかく隙がない！個人的にはスペインの現行ポップ・パンク・バンドではAIRBAGに続く完成度！日本盤もリリースでSUPER LUCKY!(S)

(FLOR Y NATA　FYN-29)CD　2008年

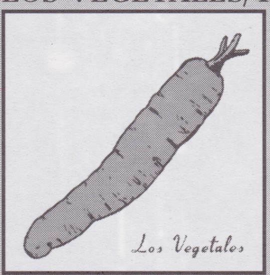
SHOOLINS/SHOOLINS



USのエルビスコアBAD TOWN BOYSの名曲の母国語カヴァーをmyspaceにアップしていて一部の熱狂的なスペイン・フリークの注目になったバンド。1曲目は残念な曲なんでスキップおすすめです。2曲目からは、まさにSHOCK　TREATMENTチルドレン！超アホっぽい声で早口スペイン語を捲し立て、キャッチーでスットコ突っ走ります。ASHの"KUNG FU"をスペイン語カヴァー収録！今作が1stアルバムでこれ以前にはデモCDRもありますが、本人たちが恥ずかしがって聴かせてくれません(爆)。(O)

(GEEK　none)CD　2007年

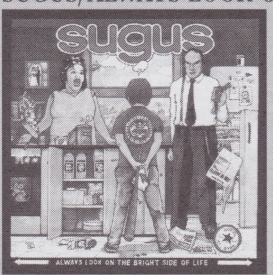
LOS VEGETALES/1985-1990



SHOCK TREATMENTがカヴァーしていたことで知った、スペイン・ポップ・パンクの先駆けといえるザ・野菜のディスコグラフィー盤。打ち込みドラムによるラモーン・ポップ・パンク・チューンですが、すでにこの時代で現在のスペイン・ポップ・パンク・サウンドを確立してるのがすごい。RAMONESもカヴァーしていることで有名な"CALIFORNIA　SUN"の母国語ヴァージョンもありです。今回紹介させていただいているバンドが気に入ってくれたら、ルーツでもある彼らも聴いてみて欲しい。(O)

(SUBTERFUGE　REF.21576)CD　2006年

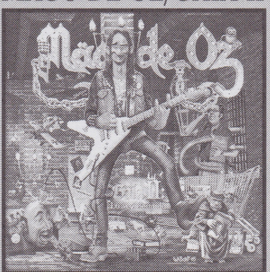
SUGUS/ALWAYS LOOK ON THE BRIGHT SIDE OF LIFE



スパニッシュPOP　PUNKフリークならここ押さえとけっ！で、お馴染みのPUNCH Recordsから速い！短い！ポップでキャッチー！巻き舌Voで疾走感さらにUP！アッと言う間の16曲入りフル・アルバムです！「RAMONES好きなBAND＝8 BEAT」の枠を遥か予想の斜め上っ！柔軟で多彩な音楽センスが光る素晴らしすぎる一枚。録音状態も◎！(S)

(PUNCH RECORDS　PUNCH 010)LP　1997年

MÄGO DE OZ/GAIA II



オチで珍盤も一枚位は…。ってことで大合唱曲な名曲"La voz dormida"が聴ける一枚。強引に例えるなら民謡フォーク・メタル・ハードコア(笑)！ドラマティックな展開の曲調にスペイン語。笛&バイオリンにツイン・ギターがハモる！まるで映画のオープニングの様な曲〜バラード〜ハードな曲〜パーティー調まで。幅広すぎて…俺のポケットには大きすぎらぁ〜(笑)。(S)

(WARNER MUSIC LATIN　NONE)2CD　2005年

VIERNES 13/ROCKAWAY HITS



今や世界規模で大注目のバンドの1stフル・アルバム。OPの谷間を前面に出した悩殺的な見た目だけでなく内容がドえらいことに！スイートでキュート&ロリータ声のMAITE嬢がSONIC SURF CITY、HAWAII MUD BOMBERSよろしくなバブルガム・ポップ・パンクに、SHOCK　TREATMENT、DEPRESSING CLAIMよろしくな疾走ポップ・パンクを歌ってるんだから。ガール・ヴォーカル・ファンはHARD-ON間違いないけど、このサウンドは全ポップ・パンク・ファン聴き逃しちゃいけません！SP　RECORDSからアナログ盤がリリースされるんだって！(O)

(RUMBLE)CD　2009年

ルーツ

「法政(法政大学学生会館)で"異形の王国"って(企画が)あって。異形の王国っていう名の通り、コンクリート・オクトパスやバスト・モンスターズ、TEXACO LEATHER MANとか出ていて。俺が見た時はCROWも出てたり」

■それが結構、大きな体験になりましたか?

「色々と混沌としていましたからね。法政の時は連れが喧嘩始めちゃったり(笑)。あそこは異様な感じではありましたけど、異様というより、落ち着くんですよね、闇が多いから。自分勝手にですけど、体験したことのない、DISCHARGEが分かった…と思ったのはあそこ(法政)で見たCROWのライヴでした。きのこ雲が見える感じ。それから一番オオッ!てきたのが、不失者。絨毯が敷いてあって、サイケ調のライトアップが廻っていて、お香が焚かれて、小さな音でクラシックが流れて。"もう始まったんですか?終わっちゃいました?"って知らないおっさんに聞いたら、"…まだ、これからだ"と言われて(笑)。(ステージに)スッと出てきて、セッティングがもうしてあるから、すぐにバーンッ!!と。日常を、現実を超えようとしている、本気で超えようとしていると感じられた。超えるというか、"本当の現実はこうなんだよ"というものをリアルに提示する。そういう経験はそれだけかなぁ。音源だと、また別ですからね」

■音楽との最初の出会いは?

「SxOxB。小学校5年生の時に。音楽の授業で、自分の好きな音楽をかけるっていうのがあって、SxOxBをかけたら無視されましたね(笑)」

■僕も小学生の時、クラスの出し物のBGMにスターリンを持って行ったら、ダメでした(笑)。

「ちょっと笑ってくれる奴とかいるんだけど、先生が冷たいね(笑)」

■楽器に関しては、ギターと三味線どちらが先でしたか?

「ギターより前に、家の奥底に壊れている三味線を発見しまして。親に弾いてみたいと言ったら、その時はダメで。自分で持ったのはギターが先ですね。ギターというより、エレキ・ギター」

■それは、単純にエレキ・ギターが格好良いから?

「これは俺にとっての武器だ、って感じたからです。横浜のモアーズで買いましたね、祖母が買ってくれたんですよ。実は、この祖母と暮らしていたのがデカイかもしれない。祖母と暮らしていて、この人(祖母)が死んじゃ嫌だな、とずっと思っていたんですよ。幼稚園の時に、友達に"人間みんな死ぬんだよ"って力説していた記憶があるし、そういうこと(死)ばかり意識するような傾向があった。そんな中で小2の時に交通事故にあって、ぐちょぐちょになっちゃって。傷が今も残っているんですけど。十何カ所と骨折して、背中がズル剥けになると、痛くはないんですよ、その場では。変なアドレナリンが出まくっているんでしょうね。車の下になって20メートルくらい引き摺られたんですけど。けっ

分かり切った話しの繰り返しや、ノスタルジックな過去の思い出、武勇伝にはあまり興味がない。個人的には、"自分が知らないことを知りたい"という想いが強くある。
その点、CARAVANA　ANARQUISTA、JADOOで活動し、長唄三味線奏者でもあるゴウジロウさんとの対話は実に刺激的な"未知"に溢れていた。CARAVANA ANARQUISTAや先日、自主でリリースされたJADOOのCD-R作品同様、"極限を突破"しようとしている、そんな人物に、僕には感じられる。

ゴウジロウ

CARAVANA ANARQUISTA/JADOO/長唄三味線奏者



こう意識があって、駆けつけた親の顔を見た後、気絶したらしい。ある意味、この体験が自分の感覚の原点になっている部分がある。"鉄と交わってしまった"みたいな。肉体って本当にぶよぶよでもろいものなんですよ、鉄と本気で交わってしまうと。この鉄の感覚が、速度とか強度とかの基準になっているかもしれない。まあ俺の場合、鉄とか集団とか…強いもの、大きいものに、何度も敗北してるからなぁ(笑)。そういうものに対しては、裏技でもなんでも使って復讐してやるってのはある。それをやる為の俺の選んだ武器が楽器、最初はエレキ・ギターだったのかな」

■ギターの前に三味線をやりたいと言ったのは、親御さんが三味線を？

「母親はそもそも唄方(三味線音楽で歌唱を担当する人)なんですが、唄方も三味線はある程度分かっていてできないとダメですから。当時俺は学歴にうるさい学校に通っていたけど、まあドロップアウトで、ほうけた状態だった。俺がそんな感じのところ、なぜかエレキだけはずーっと弾いているのを親が見て、"他のこと、何にもできないけど、弦楽器だけならずっと弾いているな"と思ったらしく、"三味線弾いてみないか"と勧められて、三味線を持ちました。でも既にエレキをやっていたし、最初は三味線がつまらなくて。いろんなことがありますが、三味線て超キツイんですよ、音(ね)がまず出ないんです」

■イメージだと、弦を押さえれば出そうですけど。

「弾いてみればわかりますよ。ギターなら電気を通せば出ますけど。日本の楽器にわりと共通してるんですけど、音(ね)を出すのが滅茶苦茶難しい。まあ伝統楽器をやっている人間にとって、死ぬまで音(ね)を追求しないといけないというのは普通のことです。話は変わりますけど、ハードコアとかパンクって、俺はこだわっていないんですよ、はっきり言って何でもいい。ただ、生まれた時からあって、最初に触れたSxOxBがハードコアだったから。…本当のハードコアをやっている人って、もう楽しいも糞もねぇっていう感じがありますよね」

■あぁ、確かに。

「何もない、只々fxxkみたいな(笑)。そういう意味で、激烈な、厳しいものですよね。でも俺の中で三味線ってのも相当にハードコアなんですよ。これは上方(関西)だけど、舞台で絶命しているのに手だけが動いているとか」

■えー?!

「いるんですよ」

■いるんですか。

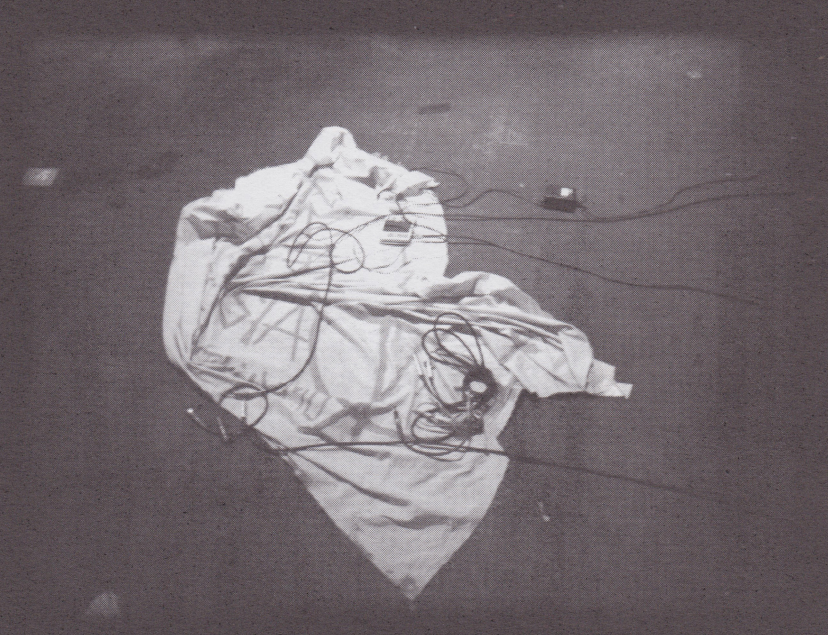
「師匠からも、"上達するにはどうするか?まずは血が出るまで弾け"って言われたり(笑)。"プライベートでは何をやってもいい、どんな変なこと悪いことをやっても、舞台ですげえのが弾ければいい"って教えを受けてて。ストイックとかとは違うんですよね、(前号の)REALIZEDのインタヴューに"ストイック"って出てて、あーって思ったんだけど。とにかく弾ければいい。芸人の世界だとそれが当たり前で、伝統芸なんつったって昔はアウトサイダーがやっていたことだから。勝新太郎さんも、もともと長唄の三味線弾きで、その親父さんがこれまたすげーパンク野郎(笑)、いやいや素晴しいお師匠で。まあちょっと昔まで、世の中自体が、芸人には浮世離れなパンク野郎であって欲しいと思っていたんじゃないかな。自分たち(聴衆/観衆)はしがらみに満ちた日常に生きているから、芸人や舞台にはそうじゃない非日常を見に行きたい、ソフィスティケートされていない本質的な剥き出しの現実を。歌舞伎だって、本当はモロそんな感じなんですよ。でも現在はねぇ…、ハードコアな芸人は極少数しかいないし、なんか本当の芸人が生きていけない世の中になってるなと思います。まぁその極少数の中にヤバイのがいるんですけど。こないだ、人間国宝になっちゃった90歳過ぎた師匠と一緒の仕事になって光栄だったんですけど、90過ぎて未だに三味線を一音、テーーン!凄い音で弾いては頭を傾げてたりしてるんですよ。それもずーっと、延々と」

■それは、リハーサルで？

「楽屋で。とにかく延々と繰り返していて。んで舞台行ったら、ズドーーン!!その時はヤバイの来ましたね。普通なら狂った爺さんですけど、こりゃ本物だって」

■それは、音に納得が出来ないから、延々と?

「多分、ご自分ではなにか考えてるんでしょうね。その人には、その人にしか出せない追求の果ての音があるんです、俺はそう思う。テンポがゆっくりでも、凄く顔前に迫ってくる感じがあったり、うちの師匠にしても70代後半で滅茶苦茶、手が廻りますからね。つい先日も爆裂しまくっちゃって。上手いとかどうとかそういう問題以前に、そもそもの速度と強度がね。バンドでも太刀打ちできるかどうか。でもね、本当に最近までは、長唄とか本気で好きになれなくて、だからギターの方で食って行こうと思っていたんです。けど、ずっと三味線やっていたら三味線とギターが一(イチ)になってきた。そう思った時から、仕事場は地獄化して、バンドの廻し方とかも、今までのままではいけないんじゃないか?と思い始めて。もう他のなんでもない、同じ音楽だから」



バンド

「もともとは普通にバンドをやってたんだけど、"もっとやろうぜ"って言っても、"ついていけない"って言われちゃったりした。それで暗黒舞踏と一緒にやり始めて。目黒にアスベスト館っていうのがあるんですが、土方巽って知ってます?」

■知らないですね。

「60〜70年代に暗黒舞踏を最初にやった人で、その人が建てた暗黒舞踏の巣窟がアスベスト館なんですけど、そこで演奏したりしていました。リアル・アンダーグラウンドというか、昭和にも脈々と受け継がれてきた日本の闇の系譜ですね。土方巽の奥さんや石井満隆さんっていう土方と同世代の舞踏家と一緒にやったり、同じく舞踏集団であるアルトー館っていうところの人たちと。俺はひたすらエレキです。そんな中で出会った橋本善史という踊り手と一緒に始めたのが"シキ"というユニット。橋本の踊りと俺のギター一本で。韓国行ったり、色んな公園で夜中に練習したり(笑)。今思えば、俺にとって



あれは本当にかけがえのない時間でした」

■"シキ"ってどういう字ですか?

「結婚式とかの"式"。式神とかをこじつけて。それから、芸大で芸術史を学んでいたタテモトカズヨシという男と俺が知り合って。こいつともいい経験した。ジャンベに電気を繋いで、バリバリの固い音にして血尿出しながら叩く奴なんですが、そこからはQというバンドが始まった。一方、橋本の方では、新宿駅の雑踏の中でTバック一丁で踊ってたりしたんですが、そこにたまたま通りかかったのが、(後の)CARAVANA ANARQUISTAのベースなんですよ。スゲー奴がいるなと、ベースが橋本に話しかけて。それで橋本が俺に会わせようと連れて来て、橋本とベースで"汚名ランド"という路上テロ行為を始めたり。それから、俺とベースでは地元も近いし、ハードコアやりてぇな!!となって。で、ベースがドラムを見つけてきて始めたのが今のCARAVANA ANARQUISTA」

■やっぱり、普通のハードコアにはならなかった?

「もろハードコアですよ。CARAVANA ANARQUISTAは。以前バンドをやってた頃にもそのつもりでやっていたんですけどね。"ト殺場の豚"って、今聴くとBLACK FLAG meets CHAOS UK meets ガレージみたいのだけど」

■それも想像つかないですけど(笑)。

「その時はHOT&COOLとかSTUPID BABIES GO MADとかと一緒にやったりもしたな〜。音はどんどん変わって行って、ノイズ・グラインドになったり、最後は疲れた状況で、先ほどお聞かせした音(注:リフレインを多用した鋭利なポスト・パンク的サウンドに感じた by 山路)になって終わったり。そこからバンドをやめて一人になって。一人になって得たことって大きいですよ。孤独な地点から出発しなければ、表現はできないことだとか」

■一人だからこそ出来ることと出来ないことが?

「出来るとか出来ないとかいう話よりも、ジャパニーズ・アンダーグラウンドの奴らをXXしたい感じがなんかあって。凄く尊敬しているんです、敬う気持ちは今でもあるし、でも、だんだん満足出来なくなってきて。三味線の師匠との間柄もそうなんですけど、やっぱ本気でXXしようとしてやらないと礼儀になってないんですよ。それを神様みたいに崇めちゃうと、そこで、もうね。音楽だから勝ち負けじゃないんですけど。勝ち負けといえば今のIMPARA(当時はまだ名前はなかった)、そのライヴでソロをやれって言われて。一人でハードコアをやるとなったらもう、"全員XXしてやる"って、一ヶ月禁欲してからやったら、IMPARAのドラムのキクチが"負けた"って言ってきて。負けたって言われるとゾクッとくるんですよね、次来る時がヤバいなぁって。勝ち負けじゃないんだけど(笑)。CARAVANA ANARQUISTAは最終的なバンド。CARAVANA ANARQUISTAで地方に行ったりしたら、俺ら目当てで来るのがポツポツいたのは、嬉しかったな。大抵一人で来てて、いい感じにぶっ壊れ率高くて」

JADOO

「始めたのは最近ですね、CARAVANA ANARQUISTAがSTAGNATIONの企画に出た辺りから動けなくなって。まちゃん(ELEKTRO HUMANGEL/CARAVANA ANARQUISTA)から"ドローンをやろう"という話しがあって、ドローンにこだわりはないけど、ギター弾かなくちゃって思ってたところに、まちゃんがスゲーの(マイキー/THEN)を連れてきて。そこでJADOOを始めた。JADOOは一言で言えば呪いです。それも、土着の一番タチの悪い類の。そう、ある時期から邦楽的な奴としかバンドをやっていないことに気がついて。CARAVANA ANARQUISTAにしても、インテンポの、刻んでいる奴が一人もいないんです。やっていることは邦楽でも何でもないのに、ずっと日本的なものをわかっている気がするんですよね、不思議なことに。逆に、今の普通の日本人の方がやばいです、全然日本本来のものをわかってない。三味線で"春興鏡獅子"という曲を演奏した後にアバンギャルドだって人に言われたんですよね、凄く古風なことをやったのに。なんというか、邦楽をやっているような日本人がそもそも邦楽のことを分かっていない。日本本来のものが、徹底的に黙殺、抹殺されている。最近、伝統芸能が大事だとかいう感じが出てきていますが、横浜のアート・シーンの人と話してたら、長唄も知らないんですよ、アートだなんだ言っているのに。まあ、頑張って知ろうとしているのはいいんですけど。日本の国の現状が、日本人のリアルな身体そのものが、相当に非日本的なものにレイプされている。もうドレミファソラシドの音しか受けつけなかったり、反復することだけが全てみたいな肉体が出来上がっている。しかも邦楽をやっている邦楽人たちもレイプされているから、本当の邦楽がなかなか聴けないし。まず、どこから聴けばいいか分からないじゃないですか。やっぱり日本、社会、世の中のそういう流れ、白と黒ではっきり分けちゃって、グレイ・ゾーンのなくなっていく流れには、いつも心底クソと思うし、敏感になる。俺の住んでいたり、生活したりしている、横浜、東京は特にクソ化が早いのもあんだろうな。日本はどんどん酷くなっていって、首を吊る人が沢山いるし、うちの周りも廃屋が出てきて。俺らが生きているうちに良くなることはないんだろうけど。と、色々考えていたら呪いが出て来たんですよ(笑)。ヴァイオレンスとか言っても何も変えられないですよ、檻の中だけでの話だ。本当の暴力は檻そのものにあるんだから。だったら大量呪殺だと」

■呪殺ですか(笑)。

「白と黒というか"聖"と"邪"をはっきり分けちゃって、聖の側にしろ邪の側にしろ結局その分け方に執着している、そういう姿勢っていうのは、キリスト教がモロにそうだから、ブラックメタルの奴らが言うことも分かるんだけど、どうしても政治に手を染めちゃうじゃないですか。音楽をやっている奴がそうなるとマズいと思うんですよね。だって手を染めた時点で既に敵の土俵に乗っちゃっているんだから。本当の暴力から見れば、体のいいガス抜きピエロでしかない。だから黙って音出せよと。自分の一番強い武器を使えと。搦め手から毒に犯せと。だから政治的に何とかしようとは、俺は思わないですけど、音楽に呪いは込める」

■JADOOの呪いは、禍々しいものに対する対抗手段というのは？

「対抗手段というより、どっちかというとこっちが禍々しい側か(笑)。でもそういう禍々しいものに触れることで、かえってほっとする奴も必ずいると思うんだよね」

■JADOOというのは造語ですか？

「それはね、本があるんです。ジョン・キールって人の、『ジャドウ　東洋の黒い魔術』というのが。読むと結構パンクな本なんですけど、それを読んでいる時につけて。向こうの読み方だと、"ジャドウ"は"ジャドゥー"になるんじゃないかなとか」

■この間のスタジオでも、シャーマンの本(『時の輪―古代メキシコのシャーマンたちの生と死と宇宙への思索』カルロス・カスタネダ著)を持って来ていましたよね。

「うん、あれは本物のハードコアの本」

■これまでスタジオは？

「回数じゃない感じがあって。練習は独りでしてくるものだし、即興にこだわりはないんだけど即興だし、いい密度で過ごしているなと思いますよ」

■すぐに音源を出そうというのは？

「挨拶代わりです。本当はちゃんとした、納得した形で録ってアナログで出したいですね」

■ジャケットも凄いですが…。

「コピー機インプロっていう(笑)」

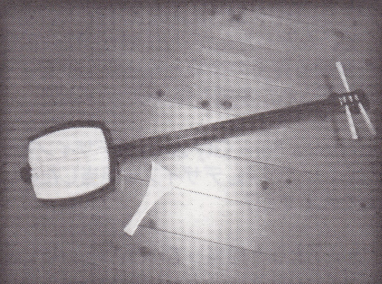
■パソコンで加工は？

「してないですよ、全くせずに」

■よくこうなりますね。

「最初まちゃんがね、"面白いんだよぉ"って、本をコピー機にグリグリしたりして。そのうちにメンバーの間で"お前行け"みたいな雰囲気になって。なんでこんなことになったのかはよく分からない。ただみんなでゲヘゲヘ笑って行為してただけ」

■おかしいですよね。禍々しい(笑)。





「いや、これは穏やかな音楽です。穏やかな音楽をやりたいんです。速くなると無音になるのと一緒で。信頼出来る人がいて、"お前のギターは静かだよ"って言われたのは嬉しかった。あと安心するって言われるのも嬉しいかな。いいんですけどね、色々な捉え方で」

■安心するって、癒されるということ？

「癒すには癒すんだけど普通の癒しとは方向が逆かな。みんなね、いろんなモノで自分を縛ってるんですよ。そんで勝手にストレスを感じている。だから身の毛もよだつような心底ヤバイものに無理矢理触れさせる。解放するんじゃなくて地獄に叩き込んでやる。そうすると目覚めるんですよ、埋もれていた闘争本能が。もうああだこうだ言っている場合じゃないと。そうなればあとは自分で立ち向かうんです。音楽ってそういうもんで。音楽の概念すら超えたいって言う人もいるけど、俺は音楽でいいんじゃないかと思う。"音で楽しむ"とは違うけど、"音で楽にする"。楽にしてあげたいって思っているけど、地獄を見せることで楽にするんだから、こっちは楽なはずがない。ひたすらしんどい。こっちが楽しんでいたら、地獄どころか単なるクソになっちゃうから。あんまり、人前でギターとか三味線とか弾きたくないんですよ、全然楽しくない。師匠を見てもね、楽しんではいない」

■うろ覚えですけど、津軽三味線の先生がインタヴューで"三味線が好きなんですね"と言われて。それに対して、"三味線なんか全然好きじゃねぇ。やらないと飯が食えないからやっているだけだ"というような感じで答えてて。

「あ、それ(高橋)竹山さんだ。三味線て言うと、最近は津軽三味線だと思われるんですよね。津軽三味線って津軽民謡の中で使われてきた楽器で。放浪しながら唄うブルースですね。友達にも津軽三味線と長唄三味線をやっているのがいるんだけど、"結局あんなのはワン・コードでずっとやっているだけなんだよ。ジャズとコラボとかいったって何もできねぇ"って言ってて。聴くと音がギター化しているんですよ、ジャパニーズでもなんでもない。でも、それが海外でジャパニーズだと思われているから。それ以前に当の日本人自身があれをジャパニーズだと勘違いしている時点で終わってるけどね」

■今後、どうしたいっていうのはあります？

「あんまりライヴが出来ないんですよ、だから一発一発を酷いことにしないといけない」

■はい(笑)。今後の予定は？

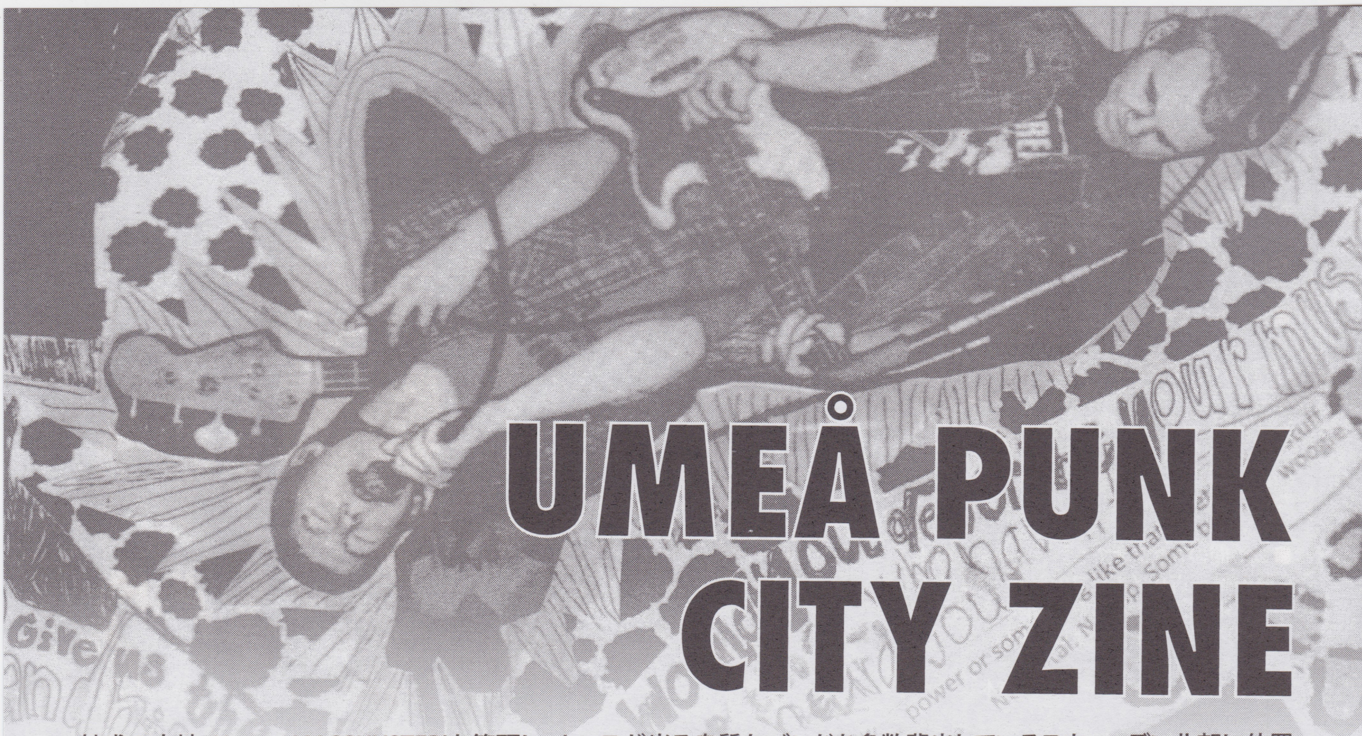
「CARAVANA ANARQUISTAがデンマークのDETONATE RECORDSから7インチを来年出します。あとJADOO初ライヴ(11月16日、小岩bushbash)が決定しました。山路さんにとって、パンクとかハードコアって何ですか？」

■音楽ですね。

「音楽？」

■そう、音楽。ゴウジロウさんが考えるのって何ですか？

「戦士。暴力振るう人じゃないですよ、凄く弱くてもいい、ヤケクソであればいいんです」



UMEÅ PUNK CITY ZINE

魅惑の大地、Umea。MASSHYSTERIを筆頭に、センスが光る良質なバンドを多数輩出しているスウェーデン北部に位置する街だ。そのUmeaで活動するバンドをまとめたファンジン『Umea Punk City Zine』が発行されている。
掲載されているのは、AC4、AMOBA、ATTITYD PROBLEM、AUKTION、BINGO、BOMBETTES、BROTTSVAG、EPIDEMICS、INDUSTRI ROYAL、INSTANGD、INSURGENT KID、INSURGENT RAT、INVASIONEN、KNUGEN FALLER、KOMMUNEN、MASSHYSTERI、MAUL、MISANTROPIC、MOLOKEN、N.A.R.S、NEDSLAGSPLATS、PAINKILLER、RATS、REGULATIONS、SLUGGERS、SOCIAL BOMBS、SUPPRESSION、TRISTESS、UX VILEHEADS、VECTORS、WEREWOLF SYNDROMEの計31バンドに、他にもファンジン等の記事もあり。
内容はもとより、アナログ感溢れる秀逸なデザインと27cm x 35cmというデカさ。Umeaは音楽だけじゃなくファンジンを作らせてもセンスが良いのか…と感動(そして羨望)した次第。
手にしてすぐに、記載されていた連絡先にコンタクトをとったところ、制作者の一人であるRickard(ジンにも掲載されているEPIDEMICSとMISANTROPICのメンバーでもある)が答えてくれた。

■あなたはUmeaの生まれでしょうか？今もUmeaに住んでいるのですか？日本に住む読者に、Umeaの街を紹介してください。

「僕の生まれはフィンランドなんだよ。5歳の時に、スウェーデンのラタンに移ったんだ。Umeaに越してきたのは15歳だったね。



それからあちこち移動したよ。USA、UK、それにスウェーデンのあちらこちらにも住んだ。数年前にUmeaに戻ってきたよ。今は森の中にあるUmeaから20キロほど離れた家に住んでいるんだ。Umeaは小さな街だね。人口は約10万人てとこ。2万5千人ほどが通う大学があって、そのために若者が多いね。人々の多くがバンドをやっている。パンク、メタル、フォーク、ポップ、ブルース、ジャズ、いろいろね。僕はここが好きだな。間違いなく残りの人生をここで過ごすだろうね」

■なぜ、『Umea Punk City Zine』を制作したのですか？

「友だちがUmeaの今のバンドを全て集めてファンジンにしたらどうかってアイデアを思いついたんだ。僕たちはここにはクールなバンドが多いと思っていたし、記録したかったし。僕たち自身のためにも、将来のためにも、他の街や国に住む人たちのためにもね。2年間は全く何の行動も起こさなかった。それからどうにかして4、5人の仲間を集め、ジンの制作に取りかかり始めた。最初にあったアイデアの一つに、コンピューターを使わずに全てを仕上げるってことがあって、全ページ、ハサミで切って糊で貼りつけ、手書きして、という作業を続けたんだ」

■何人がジンの制作に関わったんですか？期間はどれくらいかかりましたか？

「作業の大部分は3、4人のグループで進めたね。でもたくさんの人間がちょっとずつ、部分的に手を貸してくれたよ。たぶん15～20人があれやこれやで関わってくれたんじゃないのかな。確か、ジンの作業に取りかかり始めた最初の時から約1年半で、8000部を刷ったんだと思う」

■『Umea Punk City Zine』が無料だと知って驚きました。費用に関しては助成金を受けたんですか？日本ではまず不可能です！

「そうなんだよ！申込書を手に入れ、それに記入し、彼らに送ったんだよ。ほとんど期待していなかったんだけど、数ヵ月後に印刷にかかる費用の全額と輸送費を援助する旨が記された手紙を受け取ったんだ！」

■『Umea Punk City Zine』のデザインも素晴らしいですね。デザインを担当したのは誰なんですか？

「ありがとう！担当っていうのはいないんだ。イカしたオールド・スクール・パンクの

雰囲気を崩さないように判断を下していっただけだよ。デザインするのにコンピューターは使わないってルールは決めていたね。だいたい、4、5人、多くても5〜10人で進めたよ」

■この表紙にはどんな意味があるんでしょうか？これは海賊？それとも船乗り？

「Mark Frygell（TWICE THE SPEED、THE RATS、INSURGENT RAT、タトゥー・アーティスト、画家、彫刻家、など）が表紙を手がけてくれたんだ。あれをデザインした時に彼の心の中にあったものはわからないな。でもかっこいいよね」

■このジンに対して、世界中から様々な反応があったんじゃないですか？僕は本当に素晴らしいと思ってます。

「そうなんだ、とても良い反応をたくさんもらっているよ。メールは全部読んでいるし、全てに返事も返している。やることは増えるけど、気持ちに報いたいし楽しいしね！」

■Umeaのハードコア/パンク・ロック・シーンの魅力は何なんでしょうか？

「自分自身の道を進んでいるバンドが多いことだね。たくさんのバンドがいるけど、それぞれのバンドが自分の音を出している。毎年、数多くの新しいバンドが登場しているしね。みんなとても素晴らしいDIYスピリットを持っている。自分たちでライヴのできる会場を始めたり、様々なことを自分の手でやろうとしているよ。自分たちの望むように街を変えてもいるんだ。退屈だとか、こんな街から出て行きたいなんてブツブツ文句を言う代わりにね」

■逆に、Umeaのシーンの悪い部分をあげるとすると？

「そんなに悪いところはないんじゃないかと思うな。ポリティカルがパンクの最も重要な部分だと考えてる人もいれば、楽しい時間を過ごすのが一番だと思っている人もいる。ほとんどの人たちはこの間にいると思う。だいたいの場合はうまくいってるよ！」

■70'sのUmeaで活動していたPINHEADSやTBCなどのパンク・ロック・バンドは知っているんですが、Umeaの80'sハードコアに関してはよく知らなくて。お勧めのバンドはいますか？

「80'sにここで活動していたハードコア・バンドはSTEP FORWARDとGPKだけだったんじゃなかったかな。もしかしたらGPKは90年か91年に活動を始めたんだっけ？思い出せない。たぶんRIKA BARNはハードコアとしても述べられているはずだよ。このバンドは80'sの中期から後期まで活動していた。長いこと彼らの音を聴いていないからどんなサウンドだったか全く思い出せないな」

■インタヴューが掲載されていたKUNGEN FALLERは、解散してしまったと思うんですが。彼らはまだやっているのですか？

「KUNGEN FALLERは僕らがインタヴューを行なった直後に解散しちゃったよ」

■では、次号の予定は？

「うん、頭の中にはね。実際に動き始められるのはいつになるかわからないんだけど。たぶん1年以内には。もしかしたら10年以内かな」

■インタヴューに答えてくれてどうもありがとうございます。日本の読者にメッセージをもらえますか？

「スウェーデンをツアーし、Umeaでも演奏したいと思うバンドがいるなら、僕にメール（rickard.lundberg@gmail.com）を送ってくれよ。鯨を食べるのをやめてくれ！ヴェイガンになってくれよ！僕のバンドもチェックしてほしい！」

myspace.com/epidemicspunk
myspace.com/misantropichardcore





WE LOOK HERE AND HEAR AND FEEL AND BREATHE

PERSEVERE

広島のPERSEVEREが自身のレーベルINSANE WORLD RECORDSとBLOOD SUCKER RECORDとの共同で、7"シングル『TRAGIC END』をリリースしている。80's UK～スカンジ・ハードコアの影響も感じさせるが、決して懐メロに終始しない、凛とした"PERSEVEREの音"、そして"今を生きる衝動と意志"が詰まった素晴らしき一枚だ。ギター・ヴォーカルのKOMATSUさんにメールで取材を試みた。

■確か結成から丁度10年目になりますよね。『TRAGIC END』のリリースと10年目、というのはどこか意識していましたか?

「意識はしていました。でも通過点の一つでしかないし、10周年記念だとかそういう気持ちはないですけどね。バンドのスタート時からギターが入ったり、抜けたりはありましたけど、この3人は変わっていないので音源を出そうとは決めていました。唯、バンドのモチベーションが音源を出すまでに至らなかったら何も出さなかっただろうけど、今回は自然にリリースまでいけました」

■この10年、振り返るには早いかもしれませんが、どうでしたか?結成当初に思い浮かべていた10年後と、現実の今との差異というか。意識として変化したことなどありましたら、聞かせて下さい。

「結成当初は10年後なんて考えたことなかったですね～。その時、その瞬間をやれるだけやるって感じだったし、自分達の音を探すのに必死だったような気がします。まあそれは今も変わらないですけど。差異はみんな歳くったな、とかかな(笑)。色々ありましたけど、まだまだこれからかなとメンバーとは話しています。それにもっと動きたいので自分の中での課題だったり、リハーサルのやり方を変えたりとか試行錯誤しながら動いてますよ。兎に角まだまだやりたいことは沢山あるし尽きない。これから先10年後とかどうなってんのかとは考えたりするかな、髪立ててたいし、鋲ジャンも着ていたいとか、勿論バンドありきですけどね。というかここ数年みんな何で髪立てたり、鋲打ったりしないのかな～なんて思ったりします。まあそれぞれ自由にやればいいとは思いますけど、俺はそういうのも含めて好きだから気になったりしたり」

■初期衝動は保ちつつも、どこか職人的な「渋さ」というのもPERSEVEREにはずっと感じています。ハードコア・パンクはもちろん、音楽に真剣に向き合っている姿勢というか。

「そう言ってもらえるのは光栄です。ハードコア・パンクが大好きですし、やるならこれしかないってのがあります。曲を作っていく過程には今まで聴いてきたバンドの影響も出るとは思いますが、やるからにはどこにも無い音を出したいというのは強くあります。これは最初のデモを作った時から変わっていないですね。だから最初のリリースまでに時間は掛かりました。オリジナリティーがないとやっていてもつまらないし。音に対する「渋さ」っていうのは意識的にないですけど、ハードコア・パンクの持つ衝動だったり、破壊的な音だったりというのをPERSEVEREというフィルターにかけたら、こうなりましたって感じですかね」

■だからこそ、過去の焼き増しじゃない、「今の広島で活動しているPERSEVEREの音」というのが確立されているようにも思います。

「そうですね、過去ではない今を生きてますからね!所謂1980年代のUK、FINLAND、SWEDENその他の国のパンク・バンドは素晴らしいし大好きですけど、現存するパンク・バンドも沢山カッコ良いバンド居るし、刺激を受けたり、影響を受けたりもしています。だから進行形でありたい」



■『TRAGIC END』ですが、まずこのタイトルにしたのは?"CHAIN DANGER"の中にもこの言葉が使われていますが。

「"悲惨な結末、又は悲惨な最後"っていう意味です。今回のEPを作るにあたりこの言葉をイメージしていました。いずれ訪れる最後ではなく、自身を取り巻く社会であったり、意思に沿わないことによって招いてしまう悲惨な状況。それをむかえない為にどうあるべきか、どう動くべきか、黙って闇に支配されてしまうのか、それとも光を求める為にあがいていくのか。俺達は今日や明日の小さくてもいい光を探してやるんだと。裏ジャケに書いた"WE LOOK HERE AND HEAR AND FEEL AND BREATHE"(俺達はここで見て、聞いて、感じて、息をしている)ってことです!」

■レコーディング(今年の6月〜7月)の様子なんかも聞かせて下さい。これまでとは変えたこと、特に意識したことなどありましたら、教えて下さい。

「レコーディングの流れはいつもと変わらずバックを録って、ギターを被せて、歌入れですね。前回あんまり覚えてないですけど、今回は全体的にスムーズにいったし、個人的には声の調子も良かったから早かった。唯、今までと違うのはバッキングギターを被せませんでした。バックを録った段階でギター一本でも音圧もあったし、全体の音もイメージに近かったので要らないと判断して止めました。それによってライヴにより近い音が出せたと思います。意識したのは自分達の今の音、荒々しさ、生に近い感覚です」

■"CHAIN DANGER"の歌詞を読むと、どこかネット社会だったりマスメディアといったものを僕は連想しました。"傍観者共は無表情で見ている"というのが、無責任な大衆をイメージしたり。実際のところはどうでしょうか?

「そういったイメージです。人が沢山集まると良いこともあるでしょうけど、悪いこともある。言いたいことだけ好き勝手言って、後は知らぬ存ぜぬの匿名さん達が多い世の中ですから。個性がなく、隣の人の言う通りみたいなのが凄く嫌です。ある事件が起きたら、似た様な事件が起こったりするのはそういう人達だったりすると思ったりもしますが、メディアの異常なまでの煽り方にも原因はある。ネットが普及し、便利な面もありますが情報が簡単に手に入り過ぎる現状を当たり前に信じたりするのもどうなのかと疑問に感じます。俺はネットで見て、聴くことが出来ても満足出来ないですから。やっぱりこの"EL ZINE"だったり、レコードという媒体で、手にとって見る、聴くという行為が好きです」

■"LIVING DEAD DANCE"の歌詞にある"オマエラ"というのは、具体的な対象はありますか?それとも、抽象的な意味合いですか?

「目に見えているのは権力だったり、金だったりするようなとてもつまらないヤツラに向けての歌です。ゾンビ映画が好きなんでそれとリンクさせながら書きました」

■"UNKNOWN POSSIBILITY"は、どこか前向きな印象があります。B面(最後)にこの曲を持って来たのは、何か意図はありますか?

「思いっきり前向きな歌詞です。タイトルが"TRAGIC END"なんでその真反対の曲ですね。善悪、和と負、終わりが始まりだったりと、色々あると思いますが、未来、可能性は誰にでもあるものだと最後に言いたかったんです。生活していればいつかどこかで壁が立ちはだかってくる。止まってもいいから、逃げ出さず、ゆっくりでもいいから進んでいきたいんですよね。時にはぶっ壊してでも」

■アートワークはINTRUDERSのKENTAさんに依頼したのですか?そうだとしたら、どうして?今回、色を使わずに全体がモノクロというのも、ビシッ!と締まっている印象を受けます。

「当初アートワークのイメージはあったんですが、それが形に出来ず煮詰まってしまったんですよ。それで前からKENTAがPERSEVEREに関連した絵を書いてくれるって言ってたんで、連絡とってイメージを説明したら快く引き受けてくれたんで助かりました。そして出来上がったらイメージ通りだし、もろハードコア・パンクな絵で素晴らしくて感動しました!元々KENTAが書く絵が好きだったし、頼んで良かったです。今回は白黒でいこうと決めていて、その中でも白を基調としてジャケからインナーまで作りたかったんです。でもこれがまた煮詰まって、難航しましたが(苦笑)。先にも言いましたが、善悪、和と負のイメージですね」

■インナーなどにもある、"PRIMITIVE DESTRUCKTION...PUNK"という言葉が体現しているのかもしれませんが、KOMATSUさんのパンク観というのも改めて聞かせて下さい。

「言葉には原始的、未発達だからこそ出来る破壊的行為、創造していく行為といった意味合いを込めてます。完璧じゃ面白くないんですよ、どこか抜けてるぐらいがカッコ良かったりするから。一から始まって十までしかないんじゃなく、その先には無限に続くナニカがあるんじゃないかと思ってやっています。生活ありきのパンクであり、パンクありきの生活ですね。表現方法は沢山ありますが、俺はバンドで表現していきたい。それにスパイキーにしたり、鋲ジャン着たり、ブーツ履くのも表現方法の一つだと捉えてます」

■そもそものKOMATSUさんの音楽との出会いも詳しく教えて下さい。どんなバンドと最初に出会って、好みがどう変わっていったかなど。



「小学校の時、友達の姉ちゃんの影響でJ(S)Wを教えてもらったのがきっかけです。その時初めてバンドというのを意識しましたし、それからギターを始めました。その後は15歳くらいの時に周りで所謂メロコアが流行ってて何となく聴いたり、バンドみたいなこともしたりしてました。そんな中でたまたまDOLLを見つけて読んだら、LAUGHIN'NOSEやCASUALTIESやDISCOCKSの写真が載ってて「何だこれは？」となって、聴きたいけどレコードしか出てないから、レコードプレイヤーを買って聴いたり、写真の鋲ジャンのペイント見て書いてあるバンド探して聴いてみたりしてましたね。それに丁度その頃RIOT CITYやNO FUTURE関連が再発してましたから、今思えばついていたなと思います。当時は周りにパンク聴いているヤツが居なかったので、DOLLの広告とMISERYで気になったのは手当たりって感じでしたね」

■広島の「TO FUTURE」ジンにも関わっていますし、広島で暮らしていると「政治的」どうこうよりも、もっと生活に密着した部分で、原爆や戦争について意識することは多いですか？

「小中と平和学習がありましたし、"はだしのゲン"もその当時読んでました。そこまでは広島に住んでいる同世代の人達とは共通していると思います。個人的に意識し出したのは、20歳くらいの時にDISCHARGEやCRASSが戦争のこと、広島や長崎について歌っていたので、祖母の友人に当時の話を聞きに行ったのが最初でした。今はニュースでやる現状だったり、気になった事を調べてみたり、GUY君と話す中で学んだりしています。最近個人的に大きかったのは"TO FUTURE"の取材で長崎に初めて足を運んだことですね。自分は無知であるからこそ知ろうと改めて思いました」

■自主企画の"NO U TURNS"や、CONCRE、早朝ピストンズとの共同企画、"PLASTIC RUBBER"についても聞かせて下さい。KOMATSUさんから見た、過去〜今の広島シーンに対する感想なども。

「"NO U TURNS"は自分達が好きなバンドとやりたいから始めました。今年はまだ一回しか出来てませんがCRACKSが来たり、良い流れにはなっているんじゃないかと。今まで広島に来たことのないバンドを呼んでいきたいですね。次は12月13日にやる予定ですが、今回は地元バンドだけでやろうかなと。新しいバンドが出ますんでお楽しみに。"PLASTIC RUBBER"はスタイルの違う3バンドが集まったら楽しくなるし、ビールが旨いんじゃないかという勘違いから始まりました（笑）。勘違いは嘘ですけど面白いアクションはどんどん起こして行きたいと常々考えています。これからどうするとかはまだ決まってはいないけど、やるからには間違いないモノにしたい。そして新しいお客さんや10代の子達が来て欲しい。広島のシーンはORIGIN OF [M]、CONCRE、SO-CHO PISTONS、ACE IN THE HOLEが特に活動的です。今年も沢山の国内外のバンドが来ましたし、シーンには良い刺激になっていると思いますね！新しいバンドも水面下で生まれつつあるけど、若い子がいないからどんどん出て来て欲しい」

■最後に、PERSEVEREというバンド名に込めた想いも、改めて聞かせて下さい。

「THE PARTISANSを聴いてパンク・バンドをやろうと思い立ち、Pから始まるバンド名にしたくて辞書をめくって見つけた単語がPERSEVEREです。続けるという意味です。それに後付けですが"意志"という意味も込めてやってます。意志があるからこそ続けていく。自身を信じてハードコア・パンクの未来と可能性！」

自身を信じてハードコア・パンクの未来と可能性！



続・探偵小説趣味

誰もが一度はCLASHを通るように、探偵小説云々を語るならば絶対に横溝正史は欠かせない作家の一人だ。特に一大旋風を巻き起こした角川文庫のシリーズは、"一冊百円で簡単に見つかる"ものから、"専門店を廻ってようやく見つけたら一万円だった…"というものまで、その価格帯も幅広い。集め始めるのは至極簡単だが全て揃えるのは大変困難、という無限地獄が待っている。





同じ内容とは思えない程に、あまりにデザインが違いすぎる『夜歩く』。



『悪霊島』は映画公開に時期を合わせて、イラストから映画のスチール写真に差し替えられた。

表紙違いを含めれば、シリーズは百冊以上発行されているので自分が何を持っているのか覚えられない。ダブリ買いは日常茶飯事。



集めたからには床に並べてみたいのが世の常。一瞬の興奮の後、虚無感に襲われる…。



元々1冊だったのが、2冊に分けられたりもする。

タイトルに"仮面"がつくものだけで6冊!! (だからどうした…)。





SEE YOU IN CZECH

SCENE REPORT FROM CZECH REPUBLIC

イントロダクション

チェコ共和国はヨーロッパの中央に位置する小さな国だ。1000万人の国民からなり、首都のプラハには100万人が住んでいる。この国は1918年から1992年までチェコスロバキアと呼ばれていた。チェコ共和国とスロバキアが分裂したのは1993年のことである。分裂は平和的に行われた。
1948年から1989年までチェコスロバキアは"共産主義政権"であり、僕たちの国は、ポーランド、ハンガリー、東ドイツ、ブルガリア、ルーマニア、ユーゴスラビア、そしてもちろんソ連と共に"東側陣営"に属していた。1989年11月、それが崩壊した年、僕は14歳だった。
あの当時の生活を"標準的な資本主義・民主主義"の世界で生活している国外の人たちに説明するのは少し難しい。僕たちが政治や一般的な生活について話すとするなら、全ては政権を握っていた共産党に統治されていたってことを理解しておいてもらわなくちゃならない。基本的に、共産党は国で認められていた唯一の政治団体でもあった。共産党の統治下では"自由選挙"もなければ、西側諸国へ旅行をするのもほとんど不可能に近い。非常に厳しい検閲、全ては完全にコントロールされていた。もちろん、それがパンク・ロック・ミュージックやロック・ミュージックの誕生、そして発達に影響をもたらしている。

TEXT：Filip/SEE YOU IN HELL　September 2009


SHEEVA YOGA

70年代/初期80年代

Tian An Men 89という、フランスのレコード・レーベルを運営するLuk Haasは、彼の編集した『Discography of Eastern European Punk Music 1977-1999』の中で、90年代初期の東側諸国の状況について述べている。

"東ヨーロッパ諸国のほとんどの国が持つパンクの歴史は、"西洋の民主主義"と同じくらいに古い。それにもかかわらず、彼らが認められ発展していくには我々以上に非常に困難な道を辿ってきた。ひとつの要因は孤立だ。いくつかの国は世界の国々から完全に孤立していた。これは極めて特色のあるオリジナルなシーンの発達を産み出すことにつながった。もう一つの要因は、表現の自由を奪い取られていたことにもある。パンクであることは、普通、警察権力（民兵隊、秘密警察、諜報部員）、検閲、あらゆる権威との終わりのない戦いを意味している。それはまた多くのパンクスが、"社会のダニ"、"麻薬中毒者"、あるいは"資本主義の文化的なスパイ"とレッテルをはられ、投獄されたことを意味する。あるいは単に（通常の政治犯と同じように）精神病院に送られることも。国の医療機関は"精神分裂症"、あるいは政権側に都合がよい病名ならどんな病名でもつけ、診断を下した"

チェコスロバキアの極初期のパンク・バンドの誕生は、UKパンクのヴィニール盤が国境を越えて西側からこちらへ秘かに持ち込まれるようになった70年代後半に遡る。EXTEMPORE、ZIKKURAT、GARAZ、ENERGIE Gなどのバンド…後に現れた、A64、KECUP、VISACI ZAMEK、あるいはF.P.B.。こういうバンドたちはSEX PISTOLS、DAMNED、STRANGLERS、WIRE、DEAD BOYS、GENERATION Xのような有名なパンク・バンドの影響を強く受けていた。そんなバンドの中には、厳密には音楽的にパンク・ロックとは言えないものもあった。ニューウェイヴやジャズ・ロックの音を出すバンドもいたが、曲の中には何曲かパンク・ロックと呼べるものがあった（オリジナル曲と合わせてカヴァー曲もよくやっていたが、歌詞はチェコ語）。これは、EXTEMPORE、GARAZ、ZIKKURATのようなバンドのケースである。今でもここに挙げたバンドのライヴ・テープ（どれもが素晴らしい!）を発見できる。あの当時は、普通のスタジオでレコーディングする機会もなければ、レコードをリリースすることも出来なかった。唯一の音源がライヴ・テープであったのだ（あの当時に


EVIDENCE SMRTI



GRIDE

は、オフィシャルなレコード・レーベルは3つしか存在していなかった)。

F.P.B.　その当時のバンドの中から、僕は特にF.P.B.をお薦めしたい。このバンドは詩的な歌詞をのせた最高のハード・ドライヴィング・パンクを演奏していた。DAMNEDやDEVO、それにKILLING JOKEに影響を受けていたが、パンク・ロックに自分たち特有のアプローチで迫るということを見事にやってのけていた。ライヴ・テープも何本か存在しているし、90年代初期には昔の曲を再レコーディングして、LPとCDでリリースしている。元F.P.B.のメンバー２人はUZ JSME DOMAとSANOVというとても魅力的なバンドを始めた。これらのバンドはまだ活動しているし、片方のバンドは海外でもかなり人気が高い(USへも数回ツアーしていて、リリースする作品数も多い)。最近、F.P.B.のディスコグラフィーが、３枚組CD&本という素晴らしいセットでMalarie Recordsからリリースされている。

A64　A64は僕がお薦めしたいもう一つの初期80年代のバンドだ。あの頃のバンドの中では、だんとつに速くてロウ。彼らは時にハードコアと呼ばれることもある。ライヴはファストなパンクの暴発。PETER AND THE TEST TUBE BABIESの「Banned From The Pubs」にオリジナルのチェコ語の歌詞をつけたカヴァー曲をやることも有名だった。これは後にイタリアでリリースされたコンピレーションLP『Czech: Till Now You Were Alone!』にも収録されている。また他にもニューヨーク・シティのレーベルRoirのMykel Board(彼はサンフランシスコの、『Maximum RocknRoll』誌のコラムニストでもある)が編集したコンピレーション・テープ『World Class Punk』にも取り上げられている。どちらも1984年にリリースされた。『World Class Punk』コンピレーションは、共産主義国であるチェコスロバキアに"パンク"が存在することを、世界中に知らしめる大きなステップとなったのは間違いないだろう。この作品には、DEZERTER、B.G.K.、BASTARDS、C.C.M.、ZYKLOME Aのような、世界のあらゆる地域のバンドが収録されていた。

VISACI ZAMEK　最後にVISACI ZAMEKを記しておきたい。1982年に活動を始めたこのバンドは、今なお活動しており、紹介する価値のあるバンドの一つだ。２人のギタリストを擁し、爆撃のような短い曲、ラウドでひずんだ、まさにパンクと呼べる曲をプレイする。しかし、彼らはレゲエにも影響を受け、長いレゲエの曲を演奏することもあったが…。歌詞も相当面白味があり、ガチガチなシリアス・バンドとは違っていた。1988年になると7"用に2曲をレコーディングし当時3つしかなかったオフィシャルなレコード・レーベルの1つ、Pantonからリリースしている。VISACI ZAMEKはバンド名をV.Z.と変えたが、チェコスロバキア時代に初めて、そして唯一のオフィシャルなパンク・ロックのヴィニール作品をリリースしたバンドだ。最終的には10000枚をリリースした(かなりのスピードでソールド・アウトしたらしい)。7"に収録された2曲とも、最高のデキだった。彼らがプレイするのは、ニューウェイヴや他の影響なんて微塵も感じさせない尖ったパンク・ロック。その後、1989年、フルLPをリリースした最初のパンク・バンドとなる(アルバムのタイトルは単純明快に『Visaci Zamek』)。その後もレコードを発表し、後にEMIの子会社からもリリースしている。

1985-1989　パンク・シーン

共産主義時代が続く88〜89年の状況は、80年代の初期よりは明らかに良くなっていた。オフィシャルなフェスティバルが開催され、そこでパンク・ロックが演奏された。しかし、プラハ(あるいは、ブルノやブラティスラーバ…チェコスロバキアの３大都市)以外では、まだ演奏するのは難しかった。ここはあの時代に活動していたバンドの中でも、最も興味深いバンドがプレイをしていた場所でもあったのだ。

HRDINOVE NOVE FRONTY　このバンドはある面ではDEAD KENNEDYSに、別の面ではDISCHARGEに影響を受けていた。影響の結果は、ひずんだギター・ソロと希望の欠片もない絶叫とが充満した要素を持つ、破壊的でロウなパンクを生み出した。ある曲は爆発的なスピードで演奏され、また別の曲は遅くてダーク。まるで催眠状態に陥りそう楽曲もあった。歌詞のほとんどは戦争の恐怖をテーマにしていた。彼らがレコーディングした4本のスタジオ・テープは非公式にリリースされている。一番知られている作品の『Valka(War)』は各方面から素晴らしい反応を得ている。87〜88年頃、このHRDINOVE NOVE FRONTYはしばしば最高のチェコ・パンク・バンドと評価されていた。88年には、最後のテープ『Dum na demolici(House for Demolition)』をレコーディング。その後、音楽性はゴシック・ロックへと変化し、バンド名もXIII.STOLETI(13th CENTURY)に変わる。91年になると、MonitorレーベルからLP『Valecny uzemi(The War Zone)』をリリース。これは古いテープの作品で構成されていた。最近、ディスコ

KORUBO



TOMORROW'S HELL



グラフィーCDボックスが昔のデモ・テープと共にリリースされている。

SANOV F.P.B.の終焉後にスタートしたバンド。めちゃくちゃ性急でロウなスタイルに絶叫ヴォーカルの素晴らしいパンク・ロックをやる。かなり急進的なパンク・バンドの一つでもあり、歌詞はチェコスロバキアに駐在するロシアの軍隊や秘密警察に対抗する内容を直接的に書いている。彼らは数本のライヴ・テープを出しており、後の89年には、LP『Konec sveta (The End Of The World)』もリリースしている。この作品はほとんど昔の曲が再レコーディングされている。

TELEX タフなヴォーカルを擁する強烈にタイトでアグレッシヴな'82パンクを鳴らすバンド。G.B.H.やEXPLOITEDの影響を受けている。カヴァー曲も多数やっていて、ブラジルのOLHO SECOの「Isto E Olho Seco」に自分たちで歌詞をつけ、カヴァーしてもいた。89年には見事なデモをレコーディングしている。

SMART MLADEHO SEBEVRAHA 87年〜89年に活動していたSMART MLADEHO SEBEVRAHA (The Death Of A Young Suicide)は、PEGGIO PUNXや5° BRACCIOなどの昔のイタリアのバンドに似たシャープでタイトなパンクをプレイ。

もちろん、他にもたくさんのバンドが活動していた。特にスロバキア(首都のブラティスラーバ)では、典型的な'77パンク・ロックのバンドが多く、代表的なバンドには、ZONA A、EX-TIP、LORD ALEXなどがいた。

ところで、チェコスロバキアの極初期のハードコア・バンドは、初期80年代のハヴィージョフ・シティで既に活動を始めていた。彼らの名前はRADEGAST。MINOR THREATやYOUTH BRIGADE、BATTALION OF SAINTSやPOISON IDEAのような昔のUSハードコア・バンドに、紛れもない影響を受けていた。1986年、彼ら自身初のデモ・テープをレコーディングする。マシンガンのようなドラムとざらついた女性ヴォーカルの最高にスラッシングなハードコア!1989年の夏には別のテープもレコーディングしている。この時は女性ヴォーカルが抜け、メンバーも変わっていたが、初期USハードコアの血液は流れたままであった。1992年、RADEGASTはLP『Otravena Generace (Poisoned Generation)』を自主リリースする。この作品には昔の曲も再録されている。この少し後、彼らは解散することになる。2本のデモ・テープは当然のことながら再発はされていない。僕は彼らのことを、80年代チェコのハードコア/パンクを象徴するような、最高のサウンドを鳴らしていたバンドじゃないかと思っている。

既に気がついているかと思うが、チェコスロバキアのパンク・バンドは1989年以前はほとんどヴィニール・レコードをリリースしていない。前に記したように、唯一VISACI ZAMEKが7"を、他には海外から2枚のコンピレーションLP (A 64とZIKKURATを収録の『Czech: Till Now You Were Alone!』とF.P.B.を収録の『1984－The Third』) がリリースされているのみだ。1989年以前のオールド・パンク/ハードコアの現実と真実を伝え

る物的証拠はデモ/ライヴ・テープなのである。

アフター　1989

1989年11月、古い政権の崩壊後、瞬く間に、パンク・レコードやギグ、新バンドなどが怒濤のように溢れ出た。古いバンドの多くは新しく生まれたレコード・レーベルから自分たちの作品をヴィニール盤で公式にリリースし始める。お薦めしたい1990/1991年時代のコンピレーションLPをここに挙げておこう。VA『Epidemie』(LP/Multisonic)にVA『Rebelie I』(LP/Monitor)、VA『Akce Punk』(LP/AG Kult)、そしてVA『Punks Not Dead』(LP/Panton)。

また、外国のパンク・バンドもチェコでプレイし始めるようになる。最初に訪れたのは、UK SUBS、EXPLOITED、G.B.H.のようなビッグなバンドで、その後に無名のバンドや面白いバンドがやって来た。90年代初期、国外からやって来るハードコア/パンク・バンドを見るのに最も適していた会場は、プラハの007 Club(1969年に開店し、今なお営業中!)とRoxy Clubだろう。DISORDERにM.D.C.、CHAOS UK、SO MUCH HATE、FUGAZI、RORSCHACHなどのバンドが出演している。また2006年には、007 Clubに大阪のNIGHTMAREも登場している。

新しく生まれたファンジンや、ディストリビューション、政治活動(動物の権利、反ファシスト、アナーキスト、環境保護、etc)は1989年以降にパンク・シーンと結びつくようになった。これはデモや直接行動、スクワットなどへとつながっていく。

後に(1993、1994年頃)、猛烈なスピードとロウなサウンドの、ポリティカル・ハードコア/パンク・バンドが活動を始めていく。代表的なバンドは、PACEM IN TERIS、BEZ MILOSTI、HEARTLINE、CUL DE SAC、NONCONFORMIST、LOS SOMMROS、NIHILOBSTAT、MRTVA BUDOUCNOST、PANGS OF REMORSE、LIES AND DISTRUST、MINDLOCK。これらのバンドは90年代に活動していたが、今はもう存在していない。こういうバンドのほとんどは、ヴィニール盤をリリースしており今でも探し出すことができるはず。だいたいはMalarieかInsane Societyレーベルから、ヴィニールでリリースされている。

1999年までにリリースされた、チェコスロバキアとチェコ・パンクのレコードを探しているなら、前に挙げさせてもらっている、Luk Haasが手掛けた『Discography of Eastern European Punk Music 1977－1999』を手に入れることを強力に薦める。まだ入手可能なはずだ。

現在

数え切れないほどにたくさんのバンドが活動している今、チェコのハードコア/パンク・シーンの現在を記すのは至難の業だ。その中でかなり興味深いバンドをいくつか挙げておこう。www.myspace.comでバンドを検索してもらえたら見つかると思う。彼らの音を聴き、もっと情報を得てくれ。

チェコ共和国には、ファストコア/エクストリーム・ハードコアの本来の魅力を受け継ぐバンドがいくつかいる。その中でも最高なのは、GRIDE、RABIES、PRUMYSLOVA SMR





1989年11月、古い政権の崩壊後、瞬く間に
パンク・レコードやギグ、新バンドなどが怒濤のように溢れ出た

T、KOBRA 11、LYCANTHROPHY、SAY WHY?、SHEEVA YOGA、AGE OF DEATH、DEPRESY MOUSE、FASTERATU、PRUGELKNABE、SCARTOなど。最近ではスラッシュ・バンドも増えてきていて、活動歴の長いバンドの中にも、LAHARやSTOLEN LIVES、RADIO LOKATOR、RAPSODのようなスラッシュ/スラッシュコアにスタイルを変えているものも出てきている。グラインドコアで薦めたいのは、MALIGNANT TUMOURの昔の作品（今ではロックンロール/メタル寄りの音になっている）とNEEDFUL THINGS、INGROWING、TWISTED TRUTH、あるいはONANIZERの最近の作品。クラスト/ロウ・パンクは現在かなり人気があり、GUIDED CRADLE、LIFE POSESSION、RISPOSTA、TOMORROW'S HELL、JONESTOWN、KORUBO、EVIDENCE SMRTI、HOW LONG?、V.O.H.、SICHERHATE、SYSTEM、EX-LEX、VETO、HIBAKUSHA、P.N.S.、RESURGO、DISNEY、KULMA、BLOOD IN OUR WELLSが活動している。クラスト/ロウ・パンク・バンドの中には数年前から活動しているバンドもいたが、例えば、DREAD 101、MASSSGENOCIDE PROCESS、V.I.R.、FESTA DESPERATO、HOMO CONSUMENSなどのバンドは解散してしまった。パンク・バンドでお薦めなのは、INNOXIA CORPORA、COMPLICITE CANDIDE、ZEMEZLUC、MAD PIGS、TELEFON、DEMARCHE、MAC GYVER、SVINE。

チェコのレコード・レーベルの中から、良いレーベルをいくつか挙げてみる。Insane Society Records（WARCOLLAPSE、VIVISICK、LAHAR、THEMA 11、CROW、GUIDED CRADLE、SEE YOU IN HELL、GRIDE、他）、Phobia Records（JONESTOWN、WARVICTIMS、MARDROM、LAHAR、SEE YOU IN HELL、TOMORROW'S HELL、他）、Ultima Ratio（ZEMEZLUC、KORUBO、REAKCE NA ZMENU、SEE YOU IN HELL、他）、Gasmask Records（EVIDENCE SMRTI、AGHAST、DOG SOLDIER、LEBENDEN TOTEN、GUIDED CRADLE、他）、Malarie Records（現在は勢力的な活動はみせていないが、過去には、COMPLICITE CANDIDE、INNOXIA CORPORA、他にも強烈な作品をリリースしている）、Papagajuv Hlasatel Records（MAD PIGS、DESTRUX、VARUKERS、999、SVINE、他）。

チェコのハードコア/パンク・シーンの現状を的確に伝えるのに、素晴らしい写真も掲載された魅力的なコンピレーションLPも紹介しておこう。VA『Dying Alive/Living Dead』（LP）、VA『Play Fast Or Dont』（LP）、VA『Poslouchate Jizni Cechy』（LP）、VA『Spalte Brno na prach』（LP）。これらの作品は多数のチェコのレーベルが協力しあったおかげで完成し、簡単に様々なバンドを聴くことができる。先に紹介したバンドも数多く取り上げられている。

ブルノ・シティ・シーン・レポート

僕の住むブルノは、チェコで２番目に大きい街になる。国の南東に位置し、スロバキアの都市・ブラティスラーバやオーストリアの首都・ウィーンに隣接している。人口は約35万人、現在、ここのハードコア/パンク・シーンはかなり活性化している。その状況を記してみたい。

90年代の初期～中期にかけて、ブルノのハードコア・シーンは爆発していた！国外のバンドを呼んでショウを企画したり、初のジンを出したりするなど、勢力的に動いていた2人の人物がこの街に住んでいたことは、僕たちにとって幸運だった。特にMalarie Recordsやジンをやっていたmartin（いまだに積極的に動いている人物で、数年前にはRoznov pod Radhostemに転居し、地元でVrahというD.I.Y.クラブを運営している）。彼はローカル・シーンの発展に力を尽くしてくれた。90年代初期にブルノで演奏した初の国外のバンドには、NAUSEA（この日のショウを録音した猛烈に素晴らしいライヴ盤が存在する）、YUPPICIDE、FLEAS AND LICE、HIATUS（このショウも録音され、SUBCAOSとのスプリットEPにその音源を収録している。またこのギグは90年代にZatsu



On RecとD.I.Y. Recから日本でテープがリリースされている)、DIRT、HELLKRUSHER、PISSED(このギグも録音され、LP『Greatest Hits』としてリリースされている)。その後、1994〜1997年の間は、国外から多数のバンドが訪れ、まさに"黄金時代"と呼べる盛況振りであった。例えば、OI POLLOI、ACTIVE MINDS、M.D.C.、DOOM、EXTINCTION OF MANKIND、DROPDEAD、CORPUS VILLE、SARCASM、AMBUSH、FINAL WARNING、MISERY、WARCOLLAPSE、DISKONTO、TUOMIOPAIVAN LAPSET、TOTUUS、LOS CRUDOS、BATTLE OF DISARM…素晴らしい時代だった!

90年代後期と2000年代初期は、ブルノのハードコア/パンク・シーンにとっては最悪の時代になった。勢力的に活動するバンドもほとんど現れず、まともにギグができる場所もないような状態。この状況は2001/2002年頃になると良い方へと変わっていく。Yacht Clubという素晴らしいライヴ・ハウスが開店し、新しいバンドも登場してきたおかげで、ギグの数も格段増えていったのだ。今ではもうYacht Clubは存在しないが、ブルノには普通にライヴができる2、3の会場が出来ている。ブルノや周囲の地域には15ほどのバンドも活動しているし、ジンも何種類か出ている。たくさんのバンドがここで企画をし、ギグを行っている。

FESTA DESPERATO チェコのバンドの中で僕が気に入っているバンドの一つがこれ。しかし、残念なことに、2007年の6月にチェコでFRAMTIDと共演した後、ドラマーがバンドを離れてしまい、ライヴをストップせざるを得なくなっている。FESTA DESPERATOは日本やスウェーデンのバンドの影響が強い、ロウ・パンク/クラスト。サウンドは破壊的なほど凶暴で、FRAMTIDやATROCIOUS MADNESS、あるいはDISCLOSEのようなバンドのファンにとっては堪らないはずだ!ぜひ、数年前にリリースされているEP『Novy Babylon (New Babylon)』をチェックしてみてほしい!たぶんフルLPもレコーディングすると思うが、まだドラマーは見つかっていない。



LYCANTHROPHY



RISPOSTA

ZEMEZLUC 活動から20周年を迎える彼らは、ヴィニール作品のリリースを重ね、チェコの中でも勢力的に活動を続ける経歴の長いパンク・ロック・バンドだ。2枚のフルLPと多くのEPをリリース。最新のEPの中にはUltima Ratioレーベルからリリースされたものもある。典型的な東欧スタイルを貫く、強烈にハードなドライヴィング・パンクを聴かせてくれる。チェックしてほしいバンドだ!

RISPOSTA ダークでロウなステンチコア/クラストのバンド。フルLPとスプリットEPを出しており、2nd LPはInsane Societyから間もなくリリースされるはずだ。FESTA DESPERATOのベーシストも在籍。

EVIDENCE SMRTI FESTA DESPERATOのメンバーも含む、ロウなパンク・バンドだ。心を鷲づかみにするヴォーカルも魅力で、とにかくアグレッシヴなロウ・パンクが特徴。これまでにデモCDが出ているのみで、ヴィニール作品のリリースが待たれる。

MAC GYVER　メロディックなパンク・バンドでMalarie RecordsからフルEPが出ている。

SCARTO　凶暴な要素満載の、獰猛でファストなスラッシュ/グラインドをプレイ。まだ単独作品はないが、VA『Play Fast Or Dont』に2曲収録されている。

REAKCE NA ZMENU　ウルトラ・ファストでロウなハードコア・アタック。デモ・テープ、それから、RISPOSTAとのスプリットEPがある。解散後は3人のメンバーがDE TIEMPO PESTEを始めており、サウンドはREAKCE NA ZMENUと変わらず、猛烈なスピードを維持!

AGE OF DEATH　こちらもウルトラ・ファストなハードコア・バンドで、２人の女性ヴォーカルが絶叫する。

KORUBO　以前はCORE BASTARDSと名乗っていたが、バンド名を変更し、昨年、見事なデモをリリースした。狂気じみたロウ・パンクに叫びわめくヴォーカル。すぐにでも新しい作品がリリースされることを望むよ。

MAD PIGS　UK 82パンク・スタイルに強い影響を受けている、ブルノのストリート・パンクの戦士たち。彼らにはこのスタイルがしっくりくる!リリース作品は、2枚のスプリットCD（日本のTOM AND BOOT BOYSとUSAのDESTRUX）がある。2009年には名古屋のJ.U.U.M.と日本ツアーを敢行し、スプリットEPも作っている。

THE INTRUDERSS　若手のカオティックなパンク・バンド。リリースものは今のところなし。

RESURGO　こちらも若いバンドで、なかなかいいロウ・パンクをやってくれるが、まだ作品はない。

TUMMO　DISFEARやAKIMBOのようなバンドの影響が濃い、ダークでヘヴィなハードコア/ロックンロールをプレイする。彼らも新しいバンドになる。

SKODA 120/6MAS　どちらも活動歴の長いグラインド・コア・バンド。

SEE YOU IN HELL　僕のバンドだ。1999年に活動を始め、これまでにたくさんのレコードを出してきた。東京のToo Circle Recordsから２枚のCDをリリースし、日本で発売されている。2006年には日本ツアーも行っている。目下の最新作は、Insane SocietyとPhobia RecordsからリリースされたCROWとのスプリットEP/CDがある。2007年にはブラジル・ツアーを敢行。2009年の10月には再びブラジルを訪れる予定になっている。2010年には再びヨーロッパ・ツアーもやりたいし、日本やUSにも行けたらと考えている。SEE YOU IN HELLがやっているのは、日本のハードコアに影響を受けた、狂っていてロッキンなハードコア/パンク/スラッシュだ。

VA『Spalte Brno na prach』(LP)には、ここで紹介したバンドの多くが収録されている。

地元のライヴ・ハウスや企画ギグも紹介しておく。前述したYacht Clubは演奏するには最高の場所だった。またVegalite（ヴェジタリアン・レストラン）、Tuner ClubやMuzak Clubなども。MAD PIGSのメンバーは"Friday Night Kids"を企画している。FESTA DESPERATOのメンバーが企画しているのは"U.P.H."。TUMMOのメンバーによる"Loser Crew"。6MASのメンバーによる"Noisemafia"。SEE YOU IN HELLのメンバーによる"United Crusties"。この"United Crusties"は2003年からスタートし、70回以上のギグを重ね、世界中のバンドにも出演してもらっている…TRAGEDY、NINE SHOCKS TERROR、BORN DEAD ICONS、SEVERED HEAD OF STATE、MUNICIPAL WASTE、SICK TERROR、FUCKED UP、AFTERBIRTH、CATHETER、PISSCHRIST、GASMASK TERROR、ARMAGEDOM、ACTIVE MINDS、BURIAL、HELLBASTARD、MOB 47、CAPITALIST CASUALTIES…日本のバンドでは、FRAMTID、NK 6、DUDMAN、D.S.B.、VIVISICK。12月には毎年恒例の"Killed By Brno Fest"の企画もしている。

OK、今のところこれで全部だ。日本に住む仲間たち、いつかまた会おう!
ぜひメールや手紙を送ってほしい。

Filip Fuchs
Grohova 39
602 00 Brno
Czech Rep.

orba@seznam.cz
www.myspace.com/seeyouinhellthrash
www.seeyouinhell.cz

SEE YOU IN HELL　ディスク紹介

本レポートを寄せてくれたSEE YOU IN HELLのFilipに感謝しつつ、彼のバンドの作品をピックアップして紹介したい。
もしかしたら、CROWとのスプリットに続き、日本の某ハードコア・バンドとのスプリットも来年あたりに実現するかもしれない。　（山路健二）

SEE YOU IN HELL/2003-2007



2003年から2007年の間にリリースされた作品(アルバム2枚と、MASS GENOCIDE PROCESSとのスプリット・シングル、コンピ参加曲)をまとめたディスコグラフィーCD。後述する2ndアルバムの曲を除けば、この頃はまだそれほど強くジャパニーズ・ハードコア・パンクの影響は感じられない。もっと直感的に畳み掛けてくるクラスト・コア〜スラッシュ・ハードコアの応酬が目一杯に詰まっている。
(NOT VERY NICE)CD

SEE YOU IN HELL+CROW/SPILT



SEE YOU IN HELLにとっては念願であっただろう、日本のCROWとのスプリット。両バンドとも2曲ずつ収録。CROWは五臓六腑ごと抉るかの、深淵且つ孤高のダークネス・サウンドで圧倒。手書きの歌詞にも"念"を感じる。SYIHはここにきて"日本度数"が臨界点まで上り詰めたかのハードコア・パンクで攻める。スラッシュ的な要素はかなり鳴りを潜めたが、楽曲の完成度も録音状態もこれまででベスト!
(INSANE SOCIETY RECORDS/PHOBIA RECORDS)CD

SEE YOU IN HELL/ATTACK!



そしてこちらが2ndアルバム、その日本盤。叙情的な泣きのパートも少し顔を出し、情念のこもったヴォーカルとで、グッと懐が広がった印象を受ける全8曲。独特な、跳ねるようなベースラインも良いアクセントになっており、フィードバックすることなく確かな進化を見せつけた一枚だ。歌詞の日本語対訳と2006年に行われたジャパン・ツアーのレポートも掲載した丁寧な仕上がり。
(TOO CIRCLE RECORDS TCR-027) CD

VA/SPALTE BRNO NA PRACH



"BRNO CITY RAW HARDCORE/PUNK COMPILATION"という副題を持つ一枚。Filipが原稿でも触れているように、SYIH含めブルノの12バンドが集結。当然ハードコアがメインだが、これぞ東欧メロディック!なMAC GYVERや、Oi!の要素も感じさせるZEMEZLUCといったバンドも個性が光っていて面白い。A4サイズのヴォリューム満点のブックレット付きで、今のブルノの息吹に噎せ返ること必至。
(INSANE SOCIETY RECORDS/HARDCORE ATTACK RECORDS/etc)LP

BLOOD AND SWEAT.
THE EVIL SIDE OF MY SOUL.

POGO WOLVES ARE BACK!!2007年の夏、日本を急襲したドイツのバーニング・ハードコア・バンド、BURIALがニューLP『Speed At Night』をカナダのDeranged Recordsよりリリースした。メンバー・チェンジを経て、従来のサウンドにスラッシュ・メタルの要素も加味したその仕上がりは、未だかつてないほどの切迫感と激情に満ち溢れている。不動のヴォーカリストWihoとドラマーのFabianが答えてくれた。

■2007年に敢行した日本ツアーの後は、どんな活動をしていたの？

Fabian「やあ！日本から戻ってきた後は、まだメンバーだったギターのやつと一緒にショウをやっていたんだけど、その後、彼はバンドを抜けちまったんだ。それでラインナップが少し変わったよ。ベースのやつがギターを担当し、新しくベーシストが加わることになった。新しいベースはTHE NOW-DENIALでギターを弾いていたやつなんだ。やつとはもう何回か一緒にショウをやったし、今年の頭には12"をレコーディングしたよ。デンマークのLOVE POTIONとツアーも廻った。でも、その新しいベーシストもバンドをやめちまったんだ。今、新しいベーシストを見つけたところだよ。彼はTHE NOW-DENIALのメンバーでもあるんだぜ」

■カナダのDeranged Recordsから新しいLPをリリースしたのはどうして？

Fabian「Deranged RecordsはBURIALの作品を出すことにいつも強い興味を持ってくれてる。それでDerangedから新作の12"を出すことに同意したんだよ」

Wiho「他のレーベルを見つけるには、俺たちあまりにも怠け者だよ。オファーを受けたら俺たちはOKって言うだけさ!」

■NormanはBURIALを抜けたの？新作のインナーにあるメンバー・クレジット、"W"＝Wiho、"A"＝Andre、"F"＝Fabianのことだと思うんだけど、"J"と紹介されている人は誰なんだい？

Fabian「そうなんだ、ギターのNormanはバンドを抜けちまったんだよ。"J"はJensの略になるね。既に脱退しちまったベーシストのことさ」

Wiho「今は"P"＝Philippがいるよ!」

■以前よりもギターの音にスラッシュ・メタルの影響を強く感じるんだけど。Andreはスラッシュ・メタルが好きなの？

Fabian「Andreはスラッシュ・メタルがとにかく好きだね。まさに君の言う通りだよ。新曲にもそれを聴き取れるはずさ。おまけにAndreは日本のスラッシュ・メタル・バンドも好きなんだよね」

Wiho「ABIGAIL、BARBATOS、それにSABBATがやつのスタイルだね」

■最新LPのクオリティの高さにはとても感動したよ。この作品の曲を作り始めた時、頭の中にはどんなアイデアがあったの？どんなサウンドにしたいと考えてた？

Fabian「そうだな、頭ん中にはいくつかアイデアがあったよ。新しい作品は、これまでのとは同じサウンドにはしたくなかった。ちょっと新しいことに挑戦してみたかったんだ。もっとロウでブルータルで攻撃的なやつをね。曲も短くして、ぶちかますようなすげえやつにしたくて。理想に近いもんが出来上



がったんじゃないかな」

Wiho「沈滞したくはなかったんだよね!ある意味じゃ、限界ある俺たちのサウンドを完璧にしたかった。いつだってハードコア・パンクであるけど、もっと進化したかったよ!もっとパワーあるものにさ!」

■この『Speed At Night』のアートワークに込めた意味は?これは大量虐殺の写真?

Fabian「もともとは絵なんだよ!イタリアのVespignaniってアーティストの作だ。彼はそれを"集団精神錯乱"と名づけている。Vespignaniは第二次世界大戦やドイツとイタリアのファシズムに関する絵を数多く描いている。LPにこの絵を選んだのは、タイトルの『Speed At Night』をよく映し出していると思ったからなんだよね」

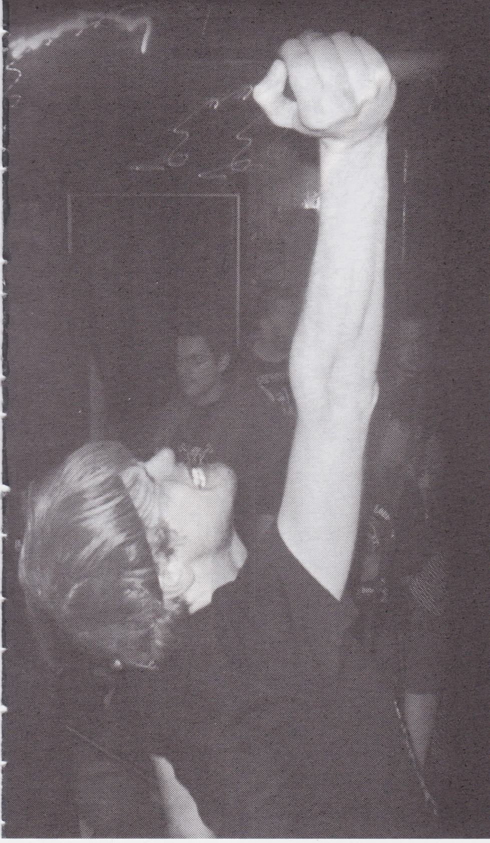
■では、LPのタイトルを『Speed At Night』としたのは?

Fabian「べろんべろんに酔っ払った時に、頭ん中にアイデアが浮かんだんだ。野蛮になって狂気じみていく様を合わせたような感じだろ」



■この作品で歌っている歌詞の内容についても教えてもらえる?

Wiho「ネガティヴな感情をテーマにした曲がいくつかあるよ。憎しみと消滅の二重性に焦点を当てているんだ。でもクレイジーになることや自分の心を解き放つこと、やりたいことをやっていく、そういうことなんかも歌っているよ!みんなに歌詞のメッセージを理解してもらいたくて、簡単な言葉を使うようにもしているんだ。だけど歌詞の内容は個人的なものだから、俺が望んでいるように理解してくれる人は1人もいないかもしれないね(笑)」



■現在のドイツのハードコア・パンク・シーンにおける良い面・悪い面について聞かせて。新しく良いバンドは登場しているの?

Fabian「金を払わないでいい会場がたくさんあるのが良い面じゃないかな。あと、ドイツはヨーロッパの国々をツアーして廻りやすいね。悪い面はインターネット上で本当にバカでくだらない会話がやりとりされていることさ。特にハードコア・パンク・シーンじゃひど過ぎる。差別語禁止もいき過ぎてるし。うーん、ドイツの新しいハードコア・バンドの大部分は退屈だな。メンバー全員が大好きなのはLOVE POTIONだね。でもやつらはデンマークのバンドか」

Wiho「LOVE POTIONは破壊力あるライヴをやってくれるぜ!Fabianが言ったように、片面じゃドイツのシーンには強力で素晴らしいネットワークが築かれてるよ。逆におとなし過ぎる面もあるんじゃないかと思うんだ!」

■ここ最近、君らが良いなと思うバンドをあげてみてもらえる?

Fabian「近頃、好きなバンドのほとんどはハードコアのカテゴリーに分類されるもんじゃないんだよね。今のヨーロッパには新しいサイケデリックの良いバンドが多いよ。ARON、THE VILLAGE IDIOT…でもAPHRODITE'S CHILDやCURRENT 93、それにBACKWORLDなんて昔からやってるバンドも好きだな。もちろん日本のハードコア・パンクは大好きだよ!!!」

Wiho「俺は今、奇形児に初期あぶらだこ、それからBONE AWLやKATHARSISのようなブラック・メタルも好きなんだよね。最近の新しい日本のバンドも大好きで、KRIEG SHOGとD-CLONEもいいね」

■君たちにとってBURIALとは?

Fabian「血と汗」

Wiho「心の中の悪魔の部分」

■じゅあ、今後の予定はどうなってるの?

Fabian「今のところの予定は新ベーシストと練習を重ね、新曲を作ることだね。また日本に行けたら嬉しいね!」

Wiho「そうだな、そうできたら最高だね。もう一度、日本の友だちに会わないと!」

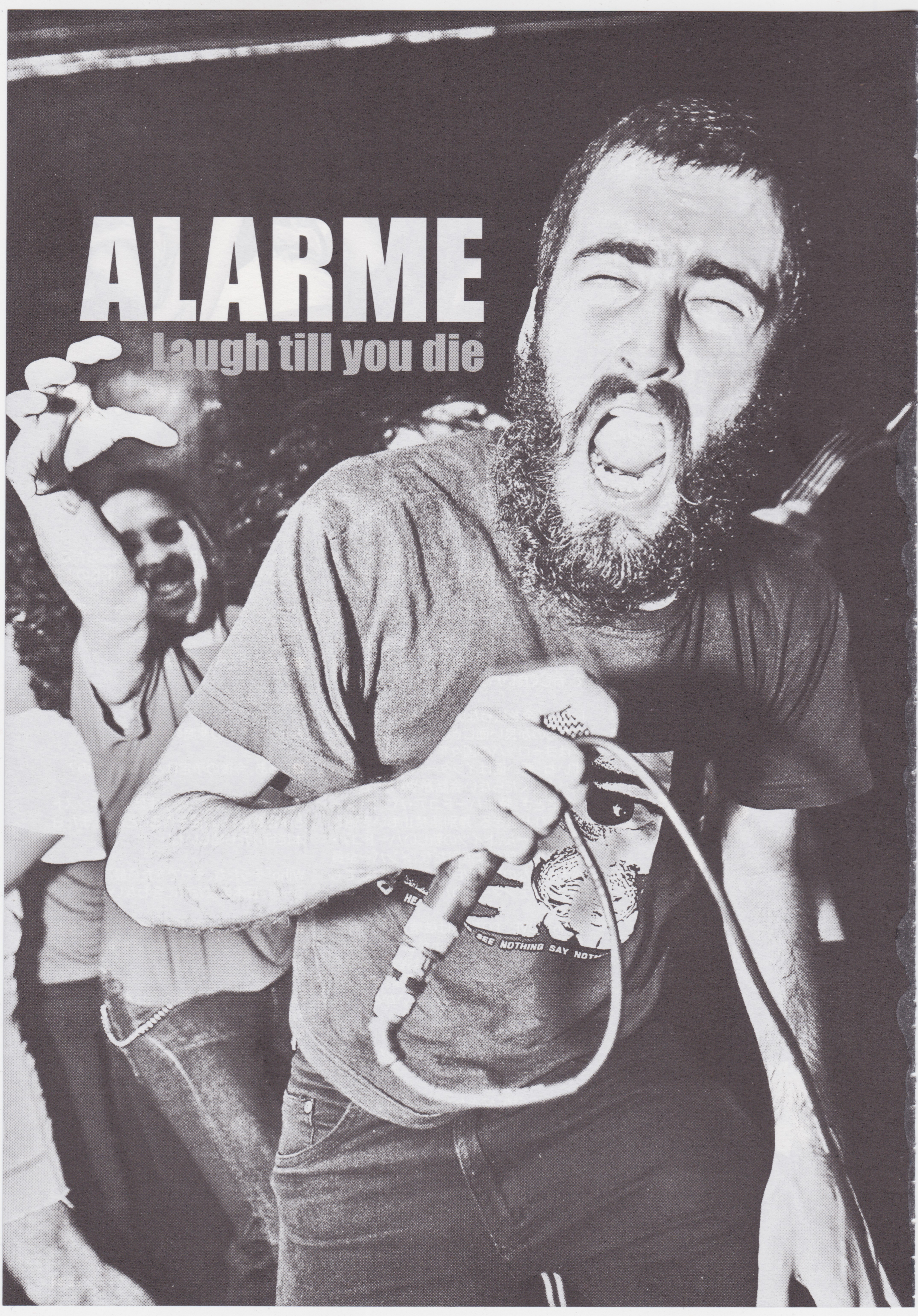
■インタヴューに答えてくれてどうもありがとう。最後に何かメッセージをもらえるかい?

Fabian「ありがとう、Kenji!!!日本に住む友だちみんなに感謝するよ。NIGHTMARE、FRAMTID、CRUDE、それから2007年の日本ツアーで出会った素晴らしい仲間たち。Seiichi(BLOWBACK)、元気になれよ!!!!マタネ!!!!!!!!!」

Wiho「炎を燃やし続けてくれ!日本に戻りたいぜ!カンパイ!」

ALARME

Laugh till you die



ブラジル/リオ・デ・ジャネイロの次世代スラッシュ・ハードコア・バンド、ALARME。ショート・ファスト・ラウドにカッ飛ばす、爆発力みなぎるサウンドが持ち味だ。メンバーはAngu(ヴォーカル)、Pato(ギター)、Bruno(ベース)、Leo(ドラム)の4人。アメリカのGive Praise Recordsからシングルを一枚、そしてブラジル、ペルー、日本のレーベルから1stアルバムをリリースしたばかりの彼らに、バンドからブラジルの未来についてまで語ってもらった。尚、メンバー名の表記がないものはバンドとしての発言だ。

INTERVIEWED:Rafael Yaekashi　PHOTO:Mateus Mondini

■どうだい、調子は?

「うまいことといってるよ。バンド、仕事、勉強…やるべきことにトライしてるさ」

■日本のみんなにALARMEがどんなバンドなのかを知ってほしいから、バンドのサウンドについて、手短に話してもらえるかい。

「エクストリーム・ハードコア、だな…ファストでエネルギッシュで、怒りと情熱が爆発したハードコアをプレイしたいんだ」

■現在のメンバーは?いつ、どんなふうにバンドがスタートしたのか、ALARMEの歴史について教えて。何が君らをバンドに駆り立てた?

「メンバーはヴォーカルがAngu、ギターはPato、ベースがBrunoでドラムはLeoだ。みんな昔から友だちだし、BrunoとPatoは兄弟なんだよ。最初は自分たちの住む街のバンドのショウをブッキングしたり、サンパウロやリオ・デ・ジャネイロなんかの他の街のやつらとコンタクトをとることから始まった。…その後だね、バンドを組んだのは。これはALARMEじゃなかったけど。ALARMEを始めたのは2005年の始め頃だったな。それまで聴いてたバンドに触発されたのと、聴いてきたものに加えてオレたち自身を表現する必要があるとも考えて…あとは平凡な生活から逃げ出すためさ」

■主に影響を受けたバンドというと?

「始めた当初は、80'sのイギリスの古いハードコアをやりたかった。HERESY、RIPCORD…それに、アメリカのクロスオーヴァーにも影響を受けてたよ。D.R.IやACCUSEDなんかにね。WHN?やブラジルのI SHOT CYRUS、RATOS DE PORAOのような今のバンドも好きだな。時が経つにつれて、世界中のバンドのアイデアに影響を受けるようになっていったよ。日本のバンドにもだ。オレたちの新作のCDには日本のバンドの影響も色濃く出てると思うな」

■これまで出してきた作品は?

「USのGive Praise Recordsから7"「Walk Together, Thrash Together」が出ている。フル・レングスCD『Starving Wolves&Death Machine Inc.』は、去年、ブラジル、ペルーから出てて、日本ではKarasu Killerが出してくれたよ。もうすぐヨーロッパでもリリースされるはず。あと、『Planet Of Friends』ってコンピレーションにも参加した。これは手術をしないと命を落としてしまうある人へのベネフィット・レコードだったんだけど、クソ野郎のせいでトラブルが起きちまったんだ。事の顛末はMyspaceを見てくれ」

■君らの人生において、パンク/ハードコアの意義とは?音楽的な面と、君ら自身の姿勢の面からパンク/ハードコアをどう考えてる?

Pato「間違いなく、オレたちの人生を良いほうに変えてくれたものだよ。オレたちは田舎の工業都市の出身で、親や祖父母と同じ人生を送るしか選択肢がなかったんだ。でも他の街のことを知り、色々なやつらとコンタクトをとるようになって、人生っていうのは、生まれて、働いて、死んでいくだけじゃないことを知ったよ。それは誇りのようなものでもあるかな。今以上のことができるってことも知った。ハードコアっていうのは、限界や極限を打ち砕こうとするオレたちそのものの生活を映し出してるもんだと思うんだ。最高のエネルギーと感情で物事に直面すること。少なくともオレには…」

Angu「バンドとしての姿勢に関しては、オレにとってはDIYバンドであるってことで、オレたちのやってる全てはDIYをベースにしている。様々なやり方でオレたちに手を貸してくれる人たちがいることもわかってるよ。レコードをリリースしてくれたり、ツアーの手助けをしてくれたりって、あらゆることを可能にしてくれる人がいることも。これはオレたちにとって明白なことだけど、よくよく考えてみて、自分たちがDIYバンドの気持ちでい続けるのは可能だと気づいたんだ。仲間とのネットワークは自分たちで作り出したものだからね。オレたちにとって本当に重要なのは、どっちかが常に優位な側に立つような利害や社会のルールを反映したようなステータスなんて関係なく、お互いにサポートし合えるってこと、これなんだよ」

■みんな仕事はしてるの?仕事とバンドとの両立はどう?

Pato「全員働いてる。オレの兄弟のBrunoだけは大学で勉強中だ。オレも大学に通おうとして仕事をちょうどやめたんだけど…このインタヴューが読まれる頃には、たぶんまた働いているだろうな。Anguは美術の先生をしている。仕事とバンドの両立は簡単だよ。ほとんどのショウは週末に行われる。問題はツアーだね。でもショウもオレたちの仕事だから(笑)、ショウを諦めることはない。他の街で演奏する場合は、ショウが終わったら夜中のうちに移動し、早朝に家に戻り、そのまま仕事に行くよ」

■曲についても聞かせてほしいんだ。ポルトガル語で歌っているね。歌詞の内容を説明してくれない?

Angu「歌詞は前にも話したように、DIYの姿勢で物事に向かい、戦うことを書いてるよ。自分たちの生活が反映してる。行動することについても書いてて、あらゆる可能性は自分たちの手中にあるということを。一言で言うなら"精神一至、何事か成らざん"かな」

Pato「そうだな、曲を作る時は基本的にはみんなそれぞれ既にアイデアを抱えてて、大部分はリフを考える時間に費やすな。オレは家でアイデアを練るのが好きだよ。それから一緒に集まって演奏する…場合によ







っちゃ、数ヶ月も練習しないで過ごす時もあるけど、集まったら全部を猛スピードで進めようと頑張ってる。それが全てをスムーズにしているんだ」

■これまで一番重要なショウというと?

「答えるのは難しいな。Verduradaで催されたブラジルの巨大なDIYフェスティバルのショウの一つかな。1200人も集まったよ。VITAMIN X、MUKEKA DI RATOらと競演したんだ。最高だったよ。最高なのはショウだけじゃなく、国中からショウにやって来た、たくさんの仲間と会えたしさ。これはアングラ・ドス・レイス(サンパウロとリオ・デ・ジャネイロの間にある街)で行われ、たくさんのロック好きが集まり、なんでもかんでも破壊しちまった!他の離れた場所でもショウは開かれてね、それも素晴らしかったよ。多くのやつらと出会い、初めての場所で演奏できたのは猛烈に嬉しかったね」

■最近のブラジルのアンダーグラウンドについて質問したい。ポジティヴな面、ネガティヴな面をどう捉えてる?

Pato「最高の時代を迎えているんじゃないかな。音楽はインターネットのおかげで身近になってるし、いいバンドを始めるやつらも多く出てきてる。本当に良くなっていっているし、巨大にもなってきてるよ。90年代の後期には、NO VIOLENCE、DISCARGA、ISC、INFECTなんかのたくさんのバンドが活動していて、再びブラジル・シーンが注目されるようになった。パンクやハードコアの歴史は変わったよ。もちろん、バンドをやっていないやつらも多かったけど、それぞれのやり方でシーンに関わってた。LajaやPeculioのようなレーベルもそうだな。メッセージを広める手助けをしていたよね。シーンを盛り上げた功績はこういう人たちだけに当てはめるべきもんでもないけど、明らかに彼らはその中心にいる。それにブラジルには、仕事を成し遂げようとする素晴らしいバンドや人間が存在するシーンが常にあるっていう事実が、いい時代を作る助けになってるよ」

Angu「ネガティヴな面は何をやるにも難しいということかな。国が大きい分、距離が相当離れているからコストもかかる。ツアーをやるのも苦労が多いし、ヴィニール・レコードを出すのも簡単じゃない。金を回収するのが大変だ…USやヨーロッパのようなきちんと整った国なら、大きな犠牲なしでも簡単に事は進むのかもしれないけどね」

■2003年あたりから、ブラジルには新しいパンク/ハードコア・バンドが登場してきたね。君が思う突出したバンド/アーティストは?

Angu「新しい、いいバンドがたくさんいるよ。ほとんどはオレたちの友だちだね…オレがあげるなら、VELHO DE CANCER、RENEGADES OF PUNK、REGIME TENTACULO、CATARRO、POSSUIDO PELO CAO、LOW LIFE、NERDS ATTACK!、VIVENCIAR、SWEET SUBURBIA…今、思い出すのはこれだね」

Pato「オレたちもこの新しいジェネレーションから出てきた」

■リオ・デ・ジャネイロで生活するポジティヴ/ネガティヴな面も話して。

Angu「実際のところ、オレたちはリオ・デ・ジャネイロって言っても田舎の出身なんだよ。リオ・デ・ジャネイロ市から2時間行ったところだ。だから現実は全く違ってる。最近オレはリオ・デ・ジャネイロ市に引っ越して田舎との違いを強烈に感じてる。リオは様々な社会の違いを抱えた猛烈に混沌とした街だね。でも同時に美しい土地でもあるな。ビーチや森、それに住民はとても気さくだ。田舎にはカオスも悲惨さもなかったけど、文化的なものに触れる機会は少なかった。仕事を見つけるのは本当に難しくて、病院へ行くにも学校に通うのも簡単じゃない…。南部を除けばブラジルの他の土地にはそんなに違いはないけど、リオじゃ市内と田舎との違いははっきりしてるね」

■ブラジルは問題を抱えた国だと思う。腐敗や暴力、失業は深刻化している。この国の未来をどう見ている?

Pato「これはインタヴュー中で、一番重要な質問だと思う。一般的な人たちが抱いてる考えを話そう。人っていうのは時には全てを放り出して、今の生活から飛び出したいと思うだろうよ。どこか他の場所で今よりいい生活を得ようとして。人は重圧を与えられ、苦しめられているから。だけど、時に人ってものは家族を養うことに精一杯で、他のことを考えるエネルギーが湧いてこないもんだ。仕事ですっかり疲れ果て、夜の9時に電車に揺られ、通勤に2時間もかけて帰宅する。でも、もし"こんなの間違ってる"って口にできるんなら、もっとましな生活を送ることができるはずだ。疑問を感じたら口に出して闘うのが生活を向上させる良い方法だと思うんだ。だけど"あんたは学があって裕福だからそんなことが言えるんだ…。僕には家で口をあけて食べ物を待ってる家族がいるんだから"と反論する人もいると思う。オレたちの国の歴史には、批判的で革命的な精神を持った人物は存在しなかったよ。本物の左翼ムーヴメントもなかった。今のこの国のミドル・クラスは民主主義を主張してる。彼らは独裁政権と戦った、20年前のストリートにいた人たちなんだ。だけど、ふざけんじゃねーよ、ミドル/ハイ・クラスのやつらは保守的で、自分の子供に車を与え、キャリアを積み上げていく余裕だってある。ミドル/ハイ・クラス以外の人間と上手くやっていく気もないのさ。だから国は悪い方へ進み、汚職に対抗する人間も出てこない。裕福な家ならこの現実に異を唱える必要もないからね。自分の家族が満ち足りているかどうかさえを気にしてりゃいい。貧困も搾取も彼らにとったら問題じゃない。もちろん、世界中の歴史のあらゆる局面に汚職は存在する。でも大抵の場合、告発されているだろ。ペルーだったが、テレビのニュースで市長の汚職事件が放送され、その後、市長は殺された。汚職したやつらを殺す必要があるとは言わないが、責任はとるべきだとは言いたい…。ここ5年間、ブラジルでは政府全体を含む汚職事件は多発しているが、ここじゃ何も起きていないよ。…古代の社会や歴史に関する書物を読むと、よく理解できるんだ。ヨーロッパや世界の強力な国々は、計画的に国の基盤を作ってきたと思うよ。商業の中心地とな

るような計画を進め、"資本"の所有者となり、生活するには素晴らしい場所を作り上げた。古代ローマは現代にも通じるような整備された道路や行政システム、政府、それに流通がスムーズにいくような地理的システムも作り上げている。植民地化されたブラジルとは逆に、ヨーロッパは植民地を持って発展していった。だけど、オレたちの国の歴史を見ると、何の計画もされてこなかったんだ。国は独立したが、ここには首尾一貫した政治や土地の整備なんてなかったんだよ。たくさんの"スラム街"、これは混乱したストリートの典型さ。大部分の第３世界と同じだよ。それに、政治家や権威のある人間の貪欲さは、今のこの国をさらにひどい状況へと加速させてる。未来についてはオレは本当にわからない。独立したグループが数多く存在してて、他国の右翼的なムーヴメントを基にした考え方を持つ者も増えてるよ。しかし、新しい世代にさえも保守的な人間は多い。それにも関わらず、誰もが若いエリートがこの国を変えてくれると信じてるんだ」

■日本とブラジルは全く違う国だ。何か日本について知っていることはある?

Pato「ガキの頃から日本は好きだった。特撮ものを見て育ってきたし、ブラジルじゃテレビでよく放送されてるよ。それにヤクザやサムライの映画も。本を読み始めて、そういうのを学ぶようになったよ。でも過去についてがほとんどだね。昔の日本の物語に描かれた世界が好きだな。例えば、自分自身と戦うヒーロー。悪魔と別れることができないで苦しみ、正直になることだけが唯一生き残るための道、っていう。これは"いい奴"は"悪い奴"と同じとも言える、あらゆるアンダーグラウンドな部分と通じていると思うんだよね。それはオレが自分自身を発見するような感じなんだよ」

Angu「オレもそれほど日本のことを知らないんだけど、いくつか興味を持っていることがあるんだ。日本のアートについて少し知ってる。いかに"禅ー仏教"思想が西洋のアートや文化に影響を与えているかも。"禅ー仏教"思想はそのもの自体を表現するものであり、バンドや映画、アートにも反映している。ブラジルとは全く違っていると思うが、映画や音楽やタトゥーなどの日本の芸術に強く惹かれてるよ。日本の文化についてもっと知りたいと思わせてくれるんだ」

■日本のバンドについては?

Angu「日本のバンドのビッグ・ファンさ!DEATH SIDEにROSEROSE、GAUZE、LIP CREAM、PAINTBOX、LIE、JELLYROLL ROCKHEADS、FLASH GORDON、CRUCIAL SECTION、MIND OF ASIAN…日本のバンドは強烈にノイジーでアグレッシヴでパワフルで、オレはそういうところが好きなんだ。どうしたらあんなに素晴らしいことができるのか尊敬するよ。君らはこの部門のマスターだ!DEATH SIDEの『Wasted Dream』はオレにとって最高のレコードだよ」

Pato「イエイ、オレたち、日本のハードコア愛好者!オレたちの大きな影響になってるよ。確かに怒り、激情は最高だし、ハードコアにそれを持ち込んで曲にし、高いレベルにまで持っていっている。最初、オレはDEATH SIDEを聴いて、"スゲェ、これはBROKEN BONESが強烈になってる"って感動したよ。狂気のヴォーカルも凄かった」

■バンドのこれからの予定は?

「練習して、新曲を作り、レコードにしようと思ってる。たぶん、スプリット・レコードになるよ。ツアーに出る予定もあるんだ。たぶん外国へね。でもまだ決定じゃないんだけど…」

■日本の読者に、ALARMEからメッセージを。

「機会を与えてくれてありがとう。日本でもCDがリリースされてて幸せだよ。インタヴューもありがとう。オレたちの夢の一つはそっちでプレイすること。いつの日か叶うだろう…。それから、オレたちの作品を日本でリリースしてくれているKarasu Killer RecordsのRafaelに感謝。最後に言っておくよ。"死ぬ瞬間まで笑ってろ"!」

コンタクト:
angusxe@gmail.com
www.myspace.com/alarme

all possibilities we have in our hands



LASHING SPEED DEMONS VOL.2

TEXT:大越よしはる

はい、ヘンだった夏も過ぎ、秋も深まった今日この頃、全国300万人(推定)のEL ZINE読者様は元気にやってますでしょうか。前回の記事が好評だったのかどうなのか、何故か再度の登場となりました。今回も前回同様、ジャンル的にはハードコア・パンクじゃないんだけどハードコア・ピープルの皆様に是非ともお勧めしたいCDやらDVDやらを集めてみましたんで、是非お読みください&お試しあれ。そして何より、新たな出会いを求めてライヴ・ハウスに出かけよう(って、何と出会うんだ?)。

ANTiSEEN/THE GREAT POGO HITS



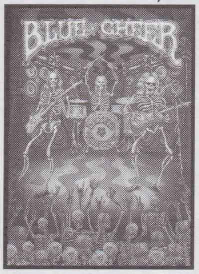
ある意味そんじょそこらのハードコア・バンドより凶悪にハードコアなバンド、その実態は究極のR&R。結成20年記念でリリースされた日本編集ベスト盤。MOTORHEADとAC/DCとRAMONESこそがR&R、とはディー・ディー・ラモーンの名言だが、その3バンドのエキスを凝縮して南部白人のトラッシュなセンスで金網電流爆破した流血と疾風怒濤の20年をたった49分で振り返る20曲。
(DIWPHALANX PX-107)CD 2003年(85〜03年録音)

ゲルチュチュ/瓦解前夜の絶縁帯



リリース前からDOLL誌上で大プッシュしてた音源だが、この8月31日に無事リリースされました。ダビーでファンキーでアヴァンギャルドなパンクはよくINUなんかと比較される訳だが、ヴォーカルのハッチという人はコレがLIP CREAMとかの80年代ジャパニーズ・ハードコア大好きで、ハードコア・ピープルにも確実にアピールするバンドだと思います。http://mitu2002.hp.infoseek.co.jp/gel_chuchu/
(蹂躙酒家 No #)CD-R 2009年

BLUE CHEER/ROCKS EUROPE



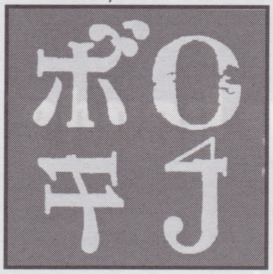
ラウド・ロックの祖と言われるBLUE CHEERだが、一方で堂々たる現役バンドでもある。よってここでは最新作・08年ライヴ映像を紹介。オリジナル・メンバーは既に60代、ドラムなんかはかなり危なっかしいところもあって、現時点でエクストリームな音楽ということはまったく言えないものの、60年代に既にラウド・ロックを演っていたオリジネイターのヤクザな佇まいにはやっぱりシビレます。
(RAINMAN RM09019)DVD 2009年

GREENMACHiNE/THE ARCHIVES OF ROTTEN BLUES



かつて金沢が世界に誇ったパワー・トリオ。前回紹介のCHURCH OF MISERY同様、ハードコアの流れを汲むドゥーム/ストーナー…というかいわゆるスラッジってやつだな。実際ハード・ロック化したハードコアって感じで、ストーナーとかドゥームとかいう言葉から受ける印象とは全く違う重剛音楽。ヴォーカルのブチ切れ具合、演奏の疾走感とも素晴らしく、解散したのが本当に惜しまれる。
(DIWPHALANX PX-116)CD 2004年

ボロキチ/ボロキチ



これまたナマで観てほしいバンド。DETROIT WHEELSとTHE STOOGESの間に橋を架けんとするモーターシティ・サウンドを倍速でプレイ(一人だけDr.FEELGOODが混じってる)。結果としてガレージ・パンクをハードコア化したかの破壊力を獲得。このときのメンバーは現在半分しか残ってないが、アホみたいにハイテンションのライヴは絶賛続行中。アホみたいじゃなくて本当にアホなのかも。
(SATIRE SATIRE-015)CD 2006年

ギャーテーズ/第一集



元グランギニョルの角田大龍(Key)率いる即興集団。知的障害者の僧侶(清僧)をフロントに立ててのインプロヴィゼイション…というアイディアだけでも、いろんな意味でハードコア。そのステージは掛け値なしの混沌と開放的なパワーに溢れていて、いつ観ても夢中にさせられた。諸事情により、ここ数年は清僧抜きで活動を続けていたが、最近清僧さんたちが復帰したそうで。またナマで観たい!
(CAPTAIN TRIP CTCD-063)CD 1997年

ETERNAL ELYSIUM/WITHIN THE TRIAD



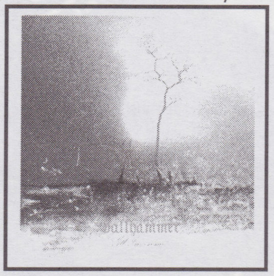
前号で前作を紹介したETERNAL ELYSIUMが8月に新作を出した。前作同様にアメリカと名古屋で録音されたサウンドはヘヴィでドゥーミー、一方でカラリとして抜けがイイ。IRON MAIDENのトリビュート・アルバムでこのバンドを知ったんだが、メタリックだった音楽性は作を重ねる毎にドープでスモーキーかつクリア、という奇跡のバランスを見せている。男女ツイン・ヴォーカルがまたイイ味。
(DIWPHALANX PX-196)CD 2009年

灰野敬二/BLACK BLUES



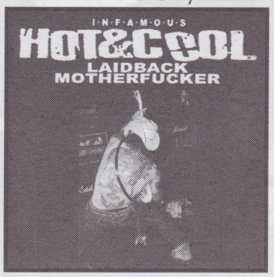
71年頃から活動、アルバムは100枚以上(!)出ていて、どれを選んでもよかったが。コレは灰野敬二が凶悪なギターと強烈なヴォーカルで歌謡曲をカヴァーするプロジェクト(?)"哀秘謡"の系列に連なる1枚。「黒い花びら」をはじめとする昭和歌謡の名曲たちがズタズタに解体され…ているんだが灰野本人にすればその歌が秘めた本来の姿を取り戻した、となるんだろう。ある種ロックの極北。
(LES DISQUES DU SOLEIL ET DE L'ACIER DSA54088)CD 2004年

GALLHAMMER/ILL INNOCENCE



HELLHAMMER〜CELTIC FROST大好き、という人は本誌読者様にも多いと思うが、そんな人はこの欝々メタルクラスト日本女子軍団も好きだろう。本家よりもパンク/ニューウェイヴ度は高いし、タイトルどおりの病んだ世界、むしろこっちの方が本誌向きという気も。この2ndアルバム以後、しばらく活動停止だったのが、最近はライヴを再開している模様。新しい音源にも期待したい。
(PEACEVILLE CDVILEF169)CD 2007年

HOT & COOL/LAIDBACK MOTHERFUCKER



前号で4thアルバムを紹介したが、コレはこの9月に出たばかりの6thアルバム。まあ全然変わってないですけどね(4thの収録曲の再録もアリ)。荒ぶる早口ヴォーカルはめまいがするくらいのポジティヴさ溢れる歌詞を叩きつけ、今回も11曲18分であっという間に駆け抜ける。2011年には結成20年となるはずだが、方向性や姿勢にまったくブレがない。今回はメタリックな感触がやや増したか。
(SUPERTRAPP 007)CD 2009年

犬彦/おばさんからもらったコートを捨てました



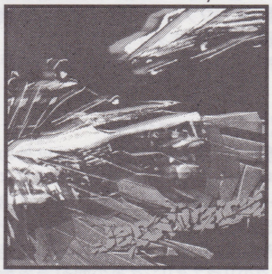
うわー。異種格闘技ここに極まれり。足踏みオルガン弾き語りでほにゃ～と展開するJON(犬)の世界に、何故かGAUZEのHIKO(Ds)が乱入！…JON(犬)の演ってること自体はいつもと全然変わりなくて、そこにHIKOが凄まじいドカドカドラミングで切り込んで、それで全然違和感なく合っているというとんでもないアルバム。裏ジャケの2ショット写真が怖いよー。いろんな意味で最強だ。
(円盤 EBD-115)CD 2009年

OLEDICKFOGGY/Rusticが止められない



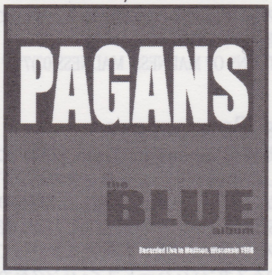
ハードコアに発してサイケやトランス方面に行ったり、メタルやR&R方面に行ったりと、ハードコアの根っこは人脈的にも音楽的にも広がっているワケだが、このバンドはラスティック！…歌心溢れるフォーキーな曲も多いし、ポリティカルで切迫感に満ちた歌詞も多い。ニューウェイヴィーな感触もあって、単にハードコア発のラスティック、ではくくれない深さを持つ。10月リリースの最新作。
(DIWPHALANX PX-200)CD 2009年

JAPONICA '04/そんなことないっていってくれよ



リリース当時、DOLLのレヴューで"MC5のメンバーが今20代だったらこんなバンドをやるのでは"みたいなことを書いた記憶がある。今聴いてもそう思う。ハードでラウドで速くて重い(このCDはライヴ観てその場で買った)。バンド名に付いてる数字は毎年変わり、すると今はJAPONICA '09…とか思ったら、いつの間にやら1000000$boyz(ミリオンダラーボーイズ)と改名していた…。
(弥勒 MRQ-004)CD 2004年

PAGANS/THE BLUE ALBUM



クリーヴランドのパンク…THE STOOGES直系のTHE DEAD BOYSもアヴァン・ガレージなPERE UBUも、そしてTHE ROLLING STONESやTHE WHOなんかに根差していながらハードコアなテイストを振りまくこのPAGANSも、人脈的には完全につながっているってのが興味深い。コレは88年ウィスコンシンでのライヴ。WHOやSTONESのカヴァーも交えて9曲18分でぶちかます。
(SMOG VEIL SV70)CD 2008年(88年録音)

兇悪のインテンション/幽体離脱



前回HIGH RISEを紹介したが、一時期のHIGH RISEからリーダーの南條麻人(B,Vo)を抜いたらこうなります。成田宗弘(G)と羽野昌二(Ds)のデュオによる2ndアルバム。フリー・ジャズとして聴くことも出来るだろうが、やはりコレはロックだ。HIGH RISEのサイケデリック・スピード・フリークぶりとはまた違ったベクトルの狂気とスピード感を放つフリー・フォームのアヴァンギャルド・ロック。
(PSF PSFD-150)CD 2003年

REGISTRATORS/TERMINAL BOREDOM



前号ではTEENGENERATEを紹介したが、同時期のこのバンドも忘れられない。70'sパンクを死ぬほど愛しながら90年代のスピード感で料理し、ひとつのムーヴメントを創り上げた(本人たちは懐疑的みたいだが)。その後、作を重ねながら音楽性を変化させていったところがまた、77～79年のパンク・バンドの音楽的変遷を見ているかのようだった。7inchもいちいち良作ばかり、いいバンドだったなあ。
(RIP OFF #019)CD 1996年

MOTOSIERRA/RULES!!!



末期DOLL～EL ZINEの特徴である辺境ハードコア(違う？)に対し、当然辺境R&Rもある訳で(？)、コレはウルグアイの4人組。AC/DCやらMOTORHEADやらROSE TATTOOやらのエッセンスをぶち込んで倍速でぶっ飛ばすハイスピードR&Rは実に痛快。この辺のリリースしてた京都のこのレーベルは、今どうなっちゃったんだろう。山路さんウルグアイにもハードコア・バンドいるんスか？
(MYRMECOLEO MLR-009)CD 2003年

SEX-virgin killer-/SEX or DIE



ハードコアからラスティックに行ったのがOLEDICKFOGGYなら、ハードコアからヴィジュアルショックな方向に逝ってしまったのがこの人たち。ルックスを見た時もびっくりしたが、音を聴いてもっとびっくりした。ヴォーカル・スタイルから何からもう完璧に"あの時代"の感じ。ライヴ観に行ったら火吹きで更にびっくりした(熱かった)。そんでもってバンド名はSCORPIONS経由だ！
(PLAY FAST! FAST-3)CD 2008年

NINE POUND HAMMER/MULEBITE DELUXE



現在はNASHVILLE PUSSYで活動するブレイン・カートライト(G)が在籍していたバンド(今でも時々活動)、初期の7inchやら何やらに(当時の)新録を加えた編集盤。スコット・ルーレンは時々ヴォーカルというよりスロートという感じでトバすが、ケンタッキー出身のせいか(？)カラッカラに乾いててかつナスティなR&R。ジョニー・キャッシュをパンクにカヴァーしたりするセンスも最高。
(ACETATE ATE-7018)CD 2005年(89～05年録音)

VOIDD/SATURDAY NIGHT DRUNK DRIVE



サイコビリーってのは実にキャパシティの広い音楽だが、デスメタルとサイコビリーとR&Rを融合しつつ突っ走り続けるこの人たちは何なんでしょう(ドクロックです)。既にデス風味は大幅に後退し、むしろジャパメタっぽくもあるが、それにしちゃ軽快にすっ飛ばすドラムとか(やくみつる似)。愛知方面じゃ重鎮っぽいが、ツアーも時々やってるんで観られる人は是非ナマで観てください。
(BUSDEATH BDR-V002)10" 2008年

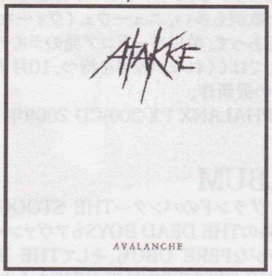
…今回はアメリカ～ンな感じの爆走R&Rを多めにしよう…とか思っていたはずなのに、気が付いてみるとまた大半が日本のバンドになっている！…それだけ我が日本のバンド群には興味深いものが多いということなんだろう。前回同様、なるべく最近のバンド、新しいアルバムを、そして昔のバンドでも最近のリリースを、と心がけてセレクトしてみた。ロックの歴史も半世紀余り、ハードコアの歴史も既に30年、ジャンル問わず過去素晴らしい作品たちが生まれてきたが、この先もまだまだ面白い出会いが待っている(はず)。

KISS THE DISC

TEXT:行川和彦

すべてインディ・レーベルからのリリースで、ほとんどがバー・コードも入ってないパンク/ハードコア系だ。むろんバー・コードが入っているレコードやCDを否定する気はまったくないが、本誌の性格に合わせてなるべく小さなレーベルのものをピックアップしたい。入手しにくい作品が含まれている可能性もあるが、楽して音楽がゲットできる状況が必ずしもプラスになってないことは明らかだし、苦労しないと身につかないことは多いだろう。けどすべてのディスクは東京のレコード店で買った。リリースされてから多少時間が経っているものもあるが、ほぼすべて1年以内に世に出た作品のはずだ。リイシューものではなく例によって新譜優先。あと外国のバンドをなるべくフォローしたい。以上、やっぱり最近の日本の"内向き風潮"に逆らいたいから。

ATAKKE/Avalanche



女性ヴォーカルを擁するニューヨークのハードコア・パンク・バンドのセカンドEP。メタリックだがクロスオーヴァーものとは一線を画し、英国的な湿り気を帯びてクラストの香りが立ち込め、AMEBIXやHELLBASTARDとライヴをやるのもうなずける。SACRILEGE meets SLAYERなA面も、MOTORHEADとBLACK SABBATHの血が流れるB面も痺れる。太い女声も痛々しくて強烈。
(MOUNTAINS OF MADNESS MADNESS 03)7"EP

DEMOKHRATIA/Bled El Petrole Takoul Lekhra



シーン的に辺境の国のバンドを世界に放つフランスの"天安門 89 唱片"レーベルが送り出す、アフリカ・アルジェリアのハードコア・パンク・バンドの13曲。MINOR THREAT〜SEEIN RED〜LOS CRUDOS〜INTENSITYの流れを感じつつユース・クルー系の曲作りも施し、ムチャなパワーが音に出ている。アラビア語の歌詞の響きもパワフルで不穏な雰囲気を醸し、音質良好聴き応え十分。
(TIAN AN MEN 89/DARBOUKA TAM 028/DAR 020)7"EP

OBLITERATION/This Is Tomorrow



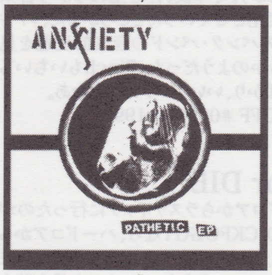
前号掲載の"Chaos in Tejas 2009"に参加した米国マサチューセッツのバンドのセカンドEP。一緒に出演したMIND ERASERのメンバーの演奏らしいが、普段パワー・ヴァイオレンス的なことやっていわゆるスカンジ・ハードコア・パンクをカマすとこうなるか！ってばかりの問答無用の畳みかけに身動きとれず。ヴォーカルの荒れ具合もたまりません。最近のDISFEAR的なロック感も良しなのだ。
(NITA 002 / DISPOSABLE 004)7"EP

CROSS STITCHED EYES/Coranach



活動停止時のAMEBIXのバロン以外の3人が在籍したZYGOTEのもう一人のメンバーのティムがギターを弾き、UK SUBSの来日時のドラムだったジェイソン(ENEMIES)がヴォーカルのバンド。既発表テイクのリマスタリング等の曲が過半数で残りは2008年の新録音だが、AMEBIXとUK DECAYが結託した如き"クラスト・デス・パンク・ロック"で熱く、強力だ。同内容のLPとCD封入。
(ALTERNATIVE TENTACLES VIRUS 397)LP+CD

ANXIETY/Pathetic EP



こちらもマサチューセッツ州のハードコア・パンク・バンドで9曲入り。HERESYやRIPCORDやELECTRO HIPPIESあたりを狙って華々しく失敗したみたいな素晴らしきダーティ・サウンドだ。初期DISORDERがCHAOTIC DISCHORDにファックされたみたいな胃にもたれるスラッシュ・パンクで、いちいち笑える"fuck offリスト"共々、原始的パンク・スピリットにリキュールで乾杯!である。
(SOCIAL NAPALM 0012)12"EP

MORNE/Untold Wait



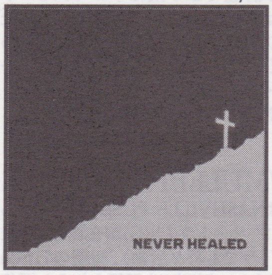
元FILTH OF MANKIND(ポーランド出身)のヴォーカルと元DISRUPT〜GRIEFのギタリスト(米国出身)を含む4人組が、ヤニック(TRAGEDY)のレーベルから出したファースト・フル。AMEBIXや後期を含むHELLBASTARDの流れと言えるが、適宜キーボードやゲストのヴァイオリンやチェロも挿入し、ヨーロッパの美学が光る完成度の高さだ。じっくり向き合いたい約50分7曲入りの力作。
(FERAL WARD YAN-063CD-2009)CD

DARK AGES/Vicious Lie E.P.



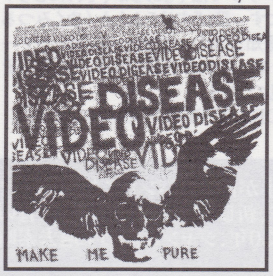
王道スタイルで痺れさせるのは熱情とセンスだと、米国カンザス産のこの2枚目のEPが再認識させてくれる。84年までのUSハードコアを凝縮した如き熱い熱い各パートの自己主張ぶりは体裁度外視。シンナーで溶かす余裕もない歯根がしっかりしたバリバリのサウンドで噛みつき、"右翼からも左からも逃げ道無し"といったストレートな歌詞もオシャレ二の次で現状に向き合うバンドならではだ。
(COWABUNGA CBR-22)7"EP

NEVER HEALED/Never Healed



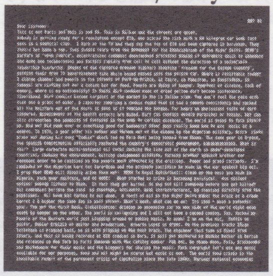
元YAPHET KOTTO〜LOOK BACK AND LAUGHのケーシーを含む北カリフォルニアのオークランド拠点のハードコア・パンク・バンド。LP/CDに続く音源は名無しの2曲に渾身のちからを込めた激情ハードコア・パンク・ロック(≠エモ)で、"癒されぬ"痛みで荒れ果てた喉も生々しい。アートワークもブラックで固めた黒色革命たるシングルだ。MP3がダウンロードできるクーポン・コード付。
(PAINKILLER PKR025)7"

VIDEO DISEASE/Make Me Pure



前号で紹介した盤に続くカリフォルニアのハードコア・パンク・バンドの2枚目のEP。筆書きみたいなジャケもそうだが、盤のラベルも何が書いてあるのか解読不能な錯乱ぶりを内に秘めたサウンドが軋み走る。先輩も舎弟も馴れ合う仲間も不在、客5人が相手みたいな空間で自己完結寸前の傍若無人の響き。"俺をピュアにしてくれや"ってな切羽詰ったタイトルもふさわしき、これぞハードコア。
(COWABUNGA CBR-28)7"EP

BILLY BAO/May 08



独立問題を抱えてテロ現場のカオスも想起させるスペイン・バスク拠点のバンドの2枚目のアルバム。中低音が沸騰したフリーキーな断末魔の濁流サウンドは、ジャケット表裏にビッシリのメッセージでも示した如く政治的な葛藤が渦巻いて窒息しそうなほど凄まじい。WHITEHOUSEだけでなく革命的な精神性も含めてフェラ・クティにも敬意を表す。イスラエルのPOOCHLATZ周辺好きにも推薦。
(PARTS UNKNOWN PUR 041)LP

PARLAMENTARISK SODOMI/Regnskog,Fred Og Vegetarmat



アルバム『De Anarkistiske An(n)aler』に続くノルウェーの"アナーコ"グラインド・コア・バンドの6曲入り。みぞおちに打ち込んでくるリアル・ブラスト・サウンドも非英語のプリミティヴなヴォーカルも、永遠の悲憤に突き動かされた如く一切の甘え無しの地獄絵図の響きである。英文で綴られたポリティカルな歌詞の解説でも音同様に壮絶な意識も読み取れる。これはハードコアだ。グレイト！

(625/CRUCIFICADOS 625#221/ CRUCIFICADOS031)7"EP

INSECT WARFARE/Evolved Into Obliteration Rescued From Life



早くも伝説になったテキサス・グラインダーの2007年録音のCD-RがLP化。全10曲のうちNAPALM DEATHのカヴァーの「Caught In A Dream」以外の曲の別テイクを収めた、2008年の名作『World Extermination』のためのデモと思われる。だがファンは早めにゲットすべし。インナーの言葉どおり"絶滅"の音。ただならぬ気配が漂いドゥームと言うべき重苦しさに戦慄が走る。破格だ。

(RESCUEDFROMLIFE RFL74)LP

SUFFERING MIND/Destroy Mankind



フランスのレーベルから出したポーランドのグラインド・コア・バンドの5曲入り。リハーサル音源らしいが、問題無し！どころか正直でよろしい。INSECT WARFAREのシャープな味とPHOBIAのクラスト・テイストをミックスしたような鋭くも濁ったサウンドだが、根がパンク魂の音だ。曲によって自国語（英訳あり）と英語を使い分けた歌詞は、権力のみならず人類への嫌悪も感じて興味深し。

(ADDICTION TO WAR WAR003)7"EP

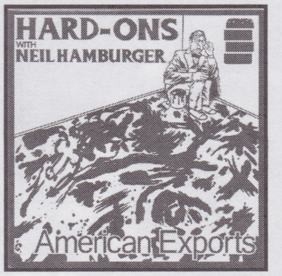
WADGE/Double-Take hawai'ian Style! Original Motion Picture Soundtrack



インターネットのMySpaceの"パプア・ニューギニアのトロピカル・グラインドコア・バンド"、という自己申告も妙に納得のカナダの奇天烈集団。米国の喜劇俳優ドン・ノッツがモチーフらしきハワイアン映画のサントラという怪しいアルバムだ。エレクトロニクスで"悪戯"しつつサーフ・ロックも絡めたファスト・チューンは、ACCUSEDや米国のS.O.D.の近代化以前みたいな音で愉快である。

(RSR 066)CD

HARD-ONS with Neil Hamburger/Ameican Exports



昔ヘンリー・ロリンズと組んで作品化もしたオーストラリアのベテラン・パンク/ロックンロール・バンドのHARD-ONSが演奏し、アメリカのコメディアンがとぼけたしゃべくりヴォーカルで絡んだ4曲入り。ジャケットもパクったBLACK FLAGの「Six Pack」のカヴァーも、こんにゃくみたいな歌いまわしでニールが芸人根性を見せつけた。単なるお遊びと断罪できない裏技駆使でイカされる。

(RED LOUNGE RLR 062)7"EP

HAM AND THE CHOKERS/Ham And The Chokers



サンフランシスコ近郊オークランドのパンク・バンドのファーストEP。覚めたヴォーカルも含めて70年代のSAINTSからポップさとホコリっぽさを削ぎ落としたかのような、音そのものが凶器のピュア・パンク・ロックで、スピーカーの間でテロが起こっている如き危険な香りに殺られる。音楽に注ぎ込んだ情熱にむせ返り、手触り良きジャケットも手書きの字体もすべてが息を呑むほどカッコいい。

(RICH BITCH 007)7"EP

DISCREET DOLL BAND/Talking In My Sleep



カリフォルニアのビバリーヒルズのパンク・ロック・バンドの2枚目。HEARTBREAKERSの初期やDEAD BOYSを思い出す素行不良の空気が立ち込めて、何しろ音そのものがチンピラ風情で与太っている。ギター2本の厚みのある音作りもクールにギラギラして息を呑む。なおかつパワー・ポップ風味もこぼれ落ちる。なのにVENOMのTシャツを着て収まった裏ジャケ…でポイント・アップだ。

(RICH BITCH 008)7"EP

BEATERS/Fishage



死相も漂うマイケル・ジャクソンのジャケットが似つかわしい米国サンディエゴ産。聴く前から結果がわかっているパンク・ロックとは対極の何が起こるかわからぬ危険な2曲入りだ。A面は初期DEVOをブラスト・ビート風リズムと神経病んだコーラスが侵食したみたいで恐ろしく、曲名も意味深なB面の「Obamanation」も酩酊の音でつんのめる。筋金入りの不健康な匂いがムンムンでたまりません。

(SINGLE SCREEN/VOLAR SSR10/VOLAR01)7"

HEX DISPENSERS/Winchester Mystery House



アメリカ産の底力を見せつけるテキサスのバンドのセカンド。さりげなく押しが強く嫌味にならぬ切ない旋律で全曲クオリティが高く、最後のDEVOのカヴァーまでノンストップのスピード感で圧倒する。ガレージ系と一味違う芯の太い音で深々とえぐる2本のギター、クールなヴォーカル、旨いベースとドラム。ミックスもマスタリングも理想的だ。これぞパーフェクトなパンク・ロック・アルバム！

(DOUCHEMASTER DMR032)CD

BROTTSVAG!/Saker Dom Gor



2007年頃から地元スウェーデンのウーメアを中心にライヴ活動をしている5人組の2008年録音の6曲入り。リード・ヴォーカルは男性で女性ベーシストがバッキング・ヴォーカルを挿入するが、同郷MASSHYSTERIと同じくヴィジュアルも含めて垢抜けぬイイ味が出ている。スウェーデン語の語感も瑞々しい響きのピュアなパンク・ロックと言い切りたい。盤面共々アートワークのセンスも最高だ。

(No Label, No Number)CDR

＜追伸＞ ■スウェーデン北部のウーメアのパンク・シーンを扱ったファンジンの『UMEA PUNK CITY』が面白い。AUKTION、BOMBETTES、BROTTSVAG!、EPIDEMICS、MASSHYSTERI、REGULATIONS、INVASIONEN(LOST PATROL BAND)などが、インタヴュー主体で載っている。記事自体も平易な英語でわかりやすくてグッドだが、見ているだけでもワクワクしてくる出来だ。新聞紙の4分の1弱のサイズという大きさ自体も存在感十分だが、ところどころ絵の具で塗ったみたいな渋い色で彩られて全体が手作りのアートとも言える仕上がりなのだ。紙は新聞と同じだと思うが、多少なりともエリート臭さも感じるMAXIMUMROCKNROLLなどと違う、素朴な味がある。

先日、CRUST WARからリリースされたSYSTEM FUCKERの1st 7"は衝撃だった。"愛知から凄いのが出てきた"という話しは以前から聞いていたし、彼らのライヴも一度だけ見たことはあるが、改めて音源として聴くと、アートワークや歌詞含めその破壊力は桁外れだった。個人的には、大阪のGLOOMを初めて聴いた時の印象が蘇ってきた程だ。
というわけで、早速ヴォーカルのYUTAさんに連絡をとって取材を申し込んでみた。"誰がインタヴューなんか受けるかボケッ!!"と言われたらどうしようかと内心ヒヤヒヤしていたが(笑)、丁寧に生の声を寄せてくれた。

■結成は去年のようですが、どんなバンドにしようと思って始めましたか?

「地元(愛知県三河)の若い元気な奴だけ集めて若いD-BEATバンドがしたくて。三河に絞ることによって、人間もいないしとりあえずで人集めれないから、気持ちがある奴が出てきたらそいつと共存したいなぁと。簡単に始めれるバンドにしたくないと思った」

■ちみなに皆さん年齢はおいくつですか?

「VO・YUTA 24、GT・ATSUMI 22、BA・YU-YA 20、DR・DIY 19」

■今、年齢のことを聞いたのは、SYSTEM FUCKERは何かと、「メンバーが若い」とか「若手」といった表現を見かけるのです。若いどうこう言われるのに対して「うざったいなー」とか、思うことはありますか?

「逆にいいと思う。若手があまりいないから"若い奴まだいるぞ!"っていうのを伝えれるし若い奴にも上の人にも刺激になるから」

■どういう経路でハードコアにのめり込んでいったかも教えて下さい。SHITLICKERSやクラスト、D-BEATの影響は感じますが、それ以前は何を聴いていたかなど。

「ブルーハーツ!!!今も誰にも負けんくらい大好き。ハードコアは数年前噂を聞いて炎天下GIGを豊田駅前に見に行って頭爆発しそうな衝撃が走って。それからいろんな人達と関わるようになって今でも一番仲いいD-CLONEのシンジくんに出会ってD-BEATにのめり込んだ感じですね」

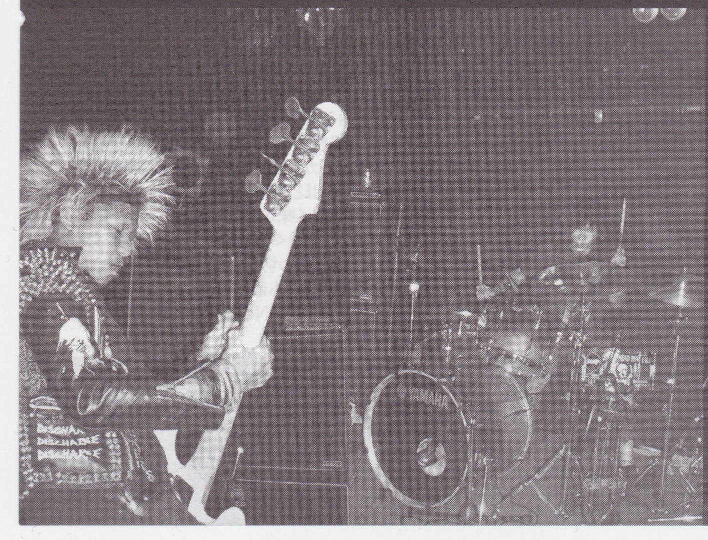
■日本語の歌詞に対するこだわりはありますか?言葉の使い方も、比喩表現一切なしに、ストレートな言い回しで最高です。

「最初はやっぱり英語かヨーロッパの言葉にしようと考えてたんだけど、単純に外国語分かる奴がいないし日本語の方が分かりやすいと思って。歌詞見ても読めないと分かんないし。比喩表現がないのはこれまた単純。難しい表現ができないだけ。それに伝わりやすいから。自分歌詞読んでも理解するのに難しくて。みんな頭よすぎ!」

■CRUST WARからリリースされた1stシングルですが、ここまでアナログ感全開のアートワークは久しぶりに見ました。インナーや盤面までも手描きですし。何か強いこだわりはあったのですか?手作り感というか、パソコンは使いたくないとか。

「パソコンの使い方が分かんないんですよ(笑)。思いつくままに作ったって感じですね。でも確かに手作り感は出したかった。もう、ジャケ見てハードコアって感じにしたくて。それに仲間がLIVEで写真撮ってくれてたんだから絶対使いたくて」

■インナーのイラストはベースのYU-YAさんが描いたようですが、細い線で描き込んでて、凄く凝っていますね。好きな漫画家なり画家がいましたら教えて下さい。







「漫画はジョジョとワンピース、芸術家はレベッカ・ホルンらしいです。誰!?歌手!?楽器!?」

■レコーディングでこだわったところは?破壊力や衝動といった部分でしょうか?作業はスムーズにいきましたか?

「そうですね。それと気持ちやLIVEそのまんまなとこ。作業は大変でした。なんせ全てがいつも何にも分からない状態だから、さすがにD-CLONEのヒロシくんについていてもらってなんとかって感じでした」

■SHITLICKERSの「WAR SYSTEM」のカヴァーは、「好き」というのもあるでしょうが、自分たちのルーツを示す意味合いでも収録したのかな、と思ったのですが、実際はどうでしょう?

「僕らは本当に1からのスタートでATSUMIはギター触る程度、YU-YA、DIY、僕にいたっては楽器も初めて、バンドも初めてだったので簡単なコピーから練習ということで初めて練習したのが"WAR SYSTEM"。これさえできるのにかなり時間がかかったけど、スタジオでは毎回やってたしこの曲から全てが始まったから思いが強くて収録することに」

■11月22日に自主企画、『UNDER 30 AGE GIG』も予定されていますが、これは出演バンドが全て30歳以下なんですか?どうして30歳以下にしようと?

「ほとんど20代!今回のテーマとして20代も気合い入ってる奴いるぞってとこを30代以上の人たちに感じてもらいたいし刺激になればと。それから20代どうしの集まりだから出演者同士も絶対に負けられんガチンコなLIVEになるなと」

■今の日本のハードコアは、20代の人ももちろんいますが、30代後半から40代の人たちがメインになって動いている印象もあります。1年間、SYSTEM FUCKERとして活動してみて、シーンに対する率直な感想を聞かせて下さい。

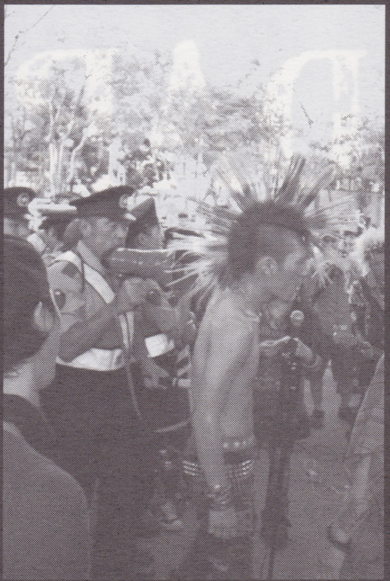
「確かに30代以上が引っ張っていってるし盛り上がってる。かっこいい人いっぱいいるし勉強になる。でも若いバンドでも気合い入って引っ張っていけるバンドがいっぱいいると感じた。いい刺激になるしスゲー勉強になる。修行修行!もっとぶつかりたいと思いました」

■今後の野望なり抱負を教えて下さい。こんな風になりたい、というのはありますか?

「人間として成長していきたい。僕らは若いしこれからまだいろんな人たちに出会っていく。LIVEで体で感じて打ち上げでいろんな人たちと話したい。自分たちの考えだけで歳とって自然に成長するだけじゃ何も変わらない。上の人たちやいろんな奴らと話すことでもっと若い頃からその考えが理解できたり行動できたりしたら、僕らや他の若い奴らが今後その先輩達の歳にはもっと上の考えや行動ができるだろうから楽しみ。みんなLIVEだけじゃないぞ。もっと打ち上げでろ!」

■最後に、SYSTEM FUCKERにとっての「SYSTEM」とは何か?「ハードコア」とは何か?を聞かせて下さい。

「自分たちが気に入らない、理解できないと感じたときのsystem。社会だけじゃない。PUNKの中でも。ハードコアとはすごい難しい。自分自身を持つことですかね」





DARGE

ハードコア・パンクは自分が生きて行く上での支えであり永遠の刺激かもしれない

ARIZEなどでプレーしていたOzeさんを中心に結成されたDARGEがこの度、初単独音源をリリースする。
メタル・クラストにD-Beatロックンロール、南米ハードコアなどの要素が入り交じった、強靭な意志も感じさせる全5曲を収録。ベース・ヴォーカルのRafa(N.E.K/KARASU KILLER)が母国語のポルトガル語で歌う曲も、良いアクセントになっている。
意外なバックボーンや、活動拠点である岐阜についてなども含め、ギター・ヴォーカルのOzeさんに語ってもらった。



■まずDARGEというバンド名ですが、これは?英語かと思っていたのですが、どうも該当する言葉がなくて。この名前に込めた想いがありましたら、併せて聞かせて下さい。

「DARGEというバンド名にしたのは、長いバンド名が好きではないので一言で言えるバンド名にしたかったからです。長いバンド名だと覚え難いし、略されて呼ばれたりするのが何か嫌な感じなので。DARGEというのは造語で、バンド名には全く意味はなくスペルの見た目と響きが何となくカッコよければ良いなってくらいな気持ちでバンド名を決めました。バンド名に意味やコンセプトを重視してしまうと、自分達に枠を作ってしまい自由な気持ちを持ってやれないし、意味をつけてバンド名を決めると他のバンドと被ることがあるので。なので、自分達の想いや気持ち等は各曲、歌詞に込めれば良いので、あまりバンド名に意味は重視したくなく。一言で簡単なのが良いなって気持ちですね」

■S.D.Sの影響が大きいようですが、初めて聴かれた時の印象や、どんなところに一番感銘を受けましたか?

「S.D.Sからは多大なきっかけや刺激、ハードコア・パンクの可能性を感じさせられました。中学の頃からギターをやり始めて高校でバンドをやり始めた頃位から、パンク、ハードコアとか聴き始めたのですが、なかなかシックリ来るのがなく、ピストルズやクラッシュとか聴いたんですがこの頃はイマイチで、アンダーグラウンドなシーンやバンドの存在を全然知らなくて、ある時高校の連れからS.D.Sってバンドがいるということ等を耳にしたりして。S.D.Sのオリジナル・ベーシストが地元で小さな工場をしてるんですが、高校辞めた連れがそこに入って、S.D.Sのビデオを借りて来たのを見たら、一発でガツンとやられました!!!自分が思うハードコア・パンクだ、と!!ガツガツとくる攻撃的な音と、ライヴ・ステージは圧巻でした!その時見たビデオは確かオキシモロンのJAPANツアー・イン・名古屋のだったと思います!メタリック・アプローチ有り、シンプルなハードコア有り、ロックンロールなミッド・テンポな曲有りと幅広く、自分のドツボでした!!!田んぼばかりの岐阜の田舎でこんな凄いバンドがいるんだ、と衝撃的だったのと、メジャーでもないのに海外ツアー行ったり、音源もリリースしてたりと自分自身に刺激と可能性を感じました。自分でも何かやれるんだと。強い気持ちと行動力があれば、なんでもやれるんだと!また、S.D.Sのサウンド・アプローチがリリース毎に進化していて面白かったし、ライヴも他ジャンルとやったりと自由にやっていたとこも魅力的でした」

■以前、OzeさんはARIZEで活動されていましたが、それ以前にバンドはされていましたか?これまでのバンド遍歴や、音楽的な嗜好遍歴を詳しく教えてもらえると嬉しいです。

「ARIZE以前は高校の頃にコピー・バンドで少しガレージ・パンクなオリジナル曲も含めやってました。初めてバンドを組み出した頃は自分よりギターが上手い幼なじみがいたので、自分はベースをやりました。次に高校卒業後は、バンドやりたいけどメンバーが居なく、とりあえず何でも良いからバンド組まないと始まらないと思い、DEVIL DOGSやTEENGENERATEとか好きな高校時代の同級生とロックンロール・パンクな感じを組みました。この時も自分はベースで、初めてDemoテープを作ったり、企画ギグなどし始めました。その次に岐阜にあったパンクなお店"HELLS DOOR"の人とバンドを組みました!!このバンドはトータル・パンクな感じでいろんな曲調をやってました。このバンドの頃もベースをやってました。そして、その後にARIZEを結成しハードコア・パンクをやり始めたのと、ギター・ヴォーカルもやり始めました。ARIZEはDemoテープ2本とV.A.CDを2枚リリースしました。自分で言うのもオカシイですがカッコ良いバンドでした。解散近くの頃の曲とかはホントに良かったので、何か形にしとけば良かったかも。あと、ギター・ヴォーカルというスタイルは単純にバンドを組む時にヴォーカルが居なかったので、自分でやれば良いじゃんというところから始まりです。DARGE初期にはピンでヴォーカルが居たのですが、すぐに抜けたので自分がまたギター・ヴォーカルの形でやるしかないなってところから今のスタイルですね。数合わせで適当な奴をメンバーに入れるくらいなら、自分でやれることなら自分でやった方がリアリティがあるんじゃないかと。例え演奏が雑になってもその方が良いなと思いましたね」

■現在、DARGEにはベース・ヴォーカルにラファ(N.E.K/KARASU KILLER)が加入していますが、これはどんな経緯で?

「ラファとの出会いは、たまたま名古屋のパンク・レコード屋"ANSWER"に行った時にラファが前にやっていたバンド、"NOMARES"のCDRが有って、コメント欄に岐阜在住ブラジル人パンク・バンドと書いてあり、気になり"ANSWER"の中村さんに話しを聞いてみるとライヴもちょこちょこやっていると聞き、しばらくした頃にMUKEKA DI RATO(ブラジル)JAPANツアーでの名古屋ハックフィンでNOMARESも一緒に出ていたのを見た時が、知り会うきっかけでした。その内によく話したり、ギグも一緒に行ったりするようになっていき、DARGEの音源を渡したら気にいってくれ、NOMARESが解散する前くらいに、ちょうどDARGEもベースとドラムが抜けることが決まっていたので、ラファに"良いメンバーいない?"と話しをしてたら、ラファからメールが来て"DARGEオレやりたい、頑張ります"と来たのが加入の経緯ですね。ただ、メールにOKの即答は出来ず戸惑いがありました。やはりブラジル人と日本人なのでコミュニケーションが上手く出来るかなど、多々不安要素が頭を過ぎりましたが、ラファの熱い思いに胸打たれたのと、ブラジル人とか関係なく同じ人間なんだし、分かり合う気持ちがあれば通じあえると思い加入をお願いしました。あと、自分のバンド人生の中でブラジル人とバンドを組むなんて思いもしなかったので面白いなと思ったのと、パンクを通して出会えたんだからやっぱりパンクって凄いなって痛感しましたね」

■またラファがポルトガル語で歌う曲もありますが、このアイデアはどこから?

「NOMARESでベース・ヴォーカルをやっていたこともあり、せっかくヴォーカルもやれるのでDARGEでもヴォーカルをやったら新制DARGEとしてオリジナリティが出ると思ったし。ラファもヴォーカルをやりたいと言ったので、ラファもヴォーカルをやるようになりました。また、ポルトガル語でラファが歌うことに関しては、もちろん母国語というところもありますが、東海地区ではブラジル人が多く、ラファの知人や友達も多く居るので、ポルトガル語で歌うことでリアルにブラジル人に伝わるし、良い刺激にもなるので良いなと思ってます。自分のヴォーカルとは全然雰囲気が違うので面白いですし」

■Ozeさんのヴォーカルでは、日本語と英語



の両方を使われていますね。この使い分けというのは、どういう感じで?

「あまり意識はしてませんが曲に歌詞が乗りやすい方で区別してます。自分で曲を作る場合は曲から作るので、後から歌詞を乗せて行くと日本語だと曲に乗りずらい時が多いと言うか、出来ず英語にしてるところがあります。やはり片言な、出来もしない英語でいつまでも歌うのは全然リアリティがないので、これからは日本語でやれるようにしていきたいのが課題ですね。不格好な言葉でもその方が気持ちも乗るので」

■メタル・クラスト的な硬質感に、南米ハードコアやD-Beatロックンロールの要素も混ざっている印象を受けました。曲作りにおいて意識しているポイントがありましたら、教えて下さい。

「曲作りで意識していること、言えることはセットリストを作る上での全体の曲調のバランスを見て、次はこんな感じの曲が欲しいなとか意識しているところがあります。例えば、曲展開が有り長めな曲を作ったら、次はシンプルな曲を作ったり、速さで押す曲を作ったら、ミッド・テンポを意識した曲を作ったりとか、たまに実験的な曲とかも挑戦したりとか。ラファを生かしたコテコテのブラジル・パンクな曲を作ったりとか考えてるところはあります。南米ハードコアな感じの曲があるのは、やはりラファの加入があったからですね。自分は南米ハードコアは有名所なバンドくらいしか通ってないのでラファのアイデアとか面白く新鮮です。ドラムのシンノスケも曲を持って来るので、今のDARGEは曲に統一感はないかもですが、メンバー同士刺激しあえてて、バンドらしくなってきてるので充実してます。メタル・アプローチやロックンロールな感じの曲などは自分の好みもありますが、単純にプレイしてて面白いし気持ちも乗るので。最初の質問のところで答えたように、ある程度軸はありますが枠を作らず自由にやりたいし、自分が客だったらという視点も考えて曲作りしているところがあります」

■5曲入りのアルバム『DESESPERO』が、MCR COMPANYからCDで、BLACK SEEDS RECORDSからアナログで出るようですね。この2レーベルからリリースすることになった経緯は?

「BLACK SEEDS RECORDSからのリリースに関しては、去年日本に来た"MEINHOF"がレーベルを紹介してくれたのがきっかけで、MCR COMPANYからは、BLACK SEEDSのリリースが遅いのと日本に流通する枚数が少なく、初単独音源なのでちゃんとリリースしたくてMCRにお願いしリリースすることになりました」

■またレーベル毎にジャケのアートワークも異なりますが、これは?それぞれのアートワークに込めたメッセージ等ありますか?

「まずBLACK SEEDSの方のジャケはラファが作り、MCRの方は"HELL SAKURA"(ブラジル)のベーシスト、NAPALMがやりたいということでNAPALMにお願いしました。ジャケを変えたのはフォーマットが違うし、変えた方が面白いかなという遊び心の単純な発想からです。ジャケに対しての想いやメッセージは、音源を聴きながらジャケを眺めて、各々思ったことを感じてくれれば良いと思います。個人的な想いは、この現実の中で何を感じ、何を思い、何が出来るのか。悲観的になってしまう時があっても生きて行くしかないんだから、強い気持ちとぶれない想いを持ち、この現実に振り回されるなって気持ちがあります。外に対しても自分自身にも」

■タイトルの"DESESPERO"はポルトガル語で"絶望"になると思いますが、Ozeさんは日々生きて行く中で"絶望"を感じることは何かありますか?

「例えば普段、新聞やニュースを見れば信じられないような事件が毎日のように報道され、戦争も常に何処かで起きていて、飢えで苦しむ格差問題、身近なとこで言えば不景気の煽りで仕事をなくし止むなく帰国したブラジル人の仲間や、仕事が出来てもブラジル人というだけでクビにされたりと、悲惨な現実まっしぐらでまさに絶望的だなと感じますが、悲観的に思ってばかりでは、何も変わらないし、寂しい気持ちになるだけだから、出来ることから何か自分の足で動いてアクションを起こして行くことが大切なんじゃないかと思いますね」

■"シーン"というより、Ozeさんの身近な部分で、岐阜のパンク/ハードコアの状況の変化は何か感じていますか?ライヴに来るお客さんの年齢層でも、バンドや企画の数とかにしても、何でもいいので教えて下さい。

「岐阜のパンク、ハードコアの状況で自分が感じる限りでは、ただでさえバンドが少ないのに、さらに少なくなった気がします。パンク・ギグ自体ほぼ皆無で、今あるといえば、定期的にパンクやその他いろいろやっている、アンダーグラウンド・バー"キングビスケット"やDARGEが企画で使わせて貰ってる、スクワットみたいなギグ・ハウス"51"でハードコア、パンク・ギグが月一有るかないかな状況が今の現状です。客層は年齢層が割と高い気がし、若い子は少ないと思います。ただ自分が知らないだけなところもあると思いますが。自分が企画ギグをする時の思いの一つとして、身近な所で自分達が楽しめるギグがあればうれしいのと、バンドも自分達のやりたい様に動いて活発になってツアー・バンドも来やすい状況になれたら良いなと思いますね。自分達が楽しめるギグや状況、環境を自分達で作り少しでも何か刺激やきっかけを発信出来たら理想的です」

■来年にはブラジルへのツアーも予定されているようですが、抱負などありましたら聞かせて下さい。

「ラファが近いうちに一回ブラジルに帰りたいというところから、この話しはできました。どうせならDARGEも一緒に行きたいと。楽しみとしてはラファの実家や不景気の煽りで帰国してしまった仲間や、HELL SAKURAに会えるのが1番の楽しみかも。自分は海外行くならバンドで行きたいという思いがあったので嬉しいですし、しかも初ツアーが海外で日本の真裏のブラジルとは楽しみです。日本でブラジル人が日本人とバンドを組んで、しかもブラジル・ツアーまでしてるんだという事実と、国境の隔たりを壊せたら良いなと思ってます。日本人もブラジル人も何人も関係ないだろと。同じ人間だろと。分かり合う気持ちが有れば言葉や文化、価値観が違えど、どうにかなるんだということを感じさせれたらなと思います」

■オリジナル・メンバーがOzeさんだけになっても、DARGEを続けて行った、その原動力は何でしょう?

「まず自分には本気で夢中になれるのがバンドしかないということ。周りの関わってくれた仲間や友人達の思いが自分の気持ちを後押ししてくれ、奮い立たせますし、まだまだ自分の想いが実現してないので終われない気持ちがあります。例えメンバー・チェンジがあっても、その時その時のDARGEであれば良いし、特に今のメンバーになってからは、メンバー・チェンジとか考えられないですが。特に地元や身近な視点で言えば、パンク、ハードコアを知るきっかけ、何でもありなパンクの可能性を発信していけたらと思います。自分がS.D.Sを始めパンク、ハードコアでいろんなことに気付かされた様に。押し付けではなく自然に。メンバーがいないとか、環境、状況が悪いからと、バンドをやりたいのに諦めるのは嫌なんで、自分の想いを信じて動いていれば必ずどうにかなると信じています」

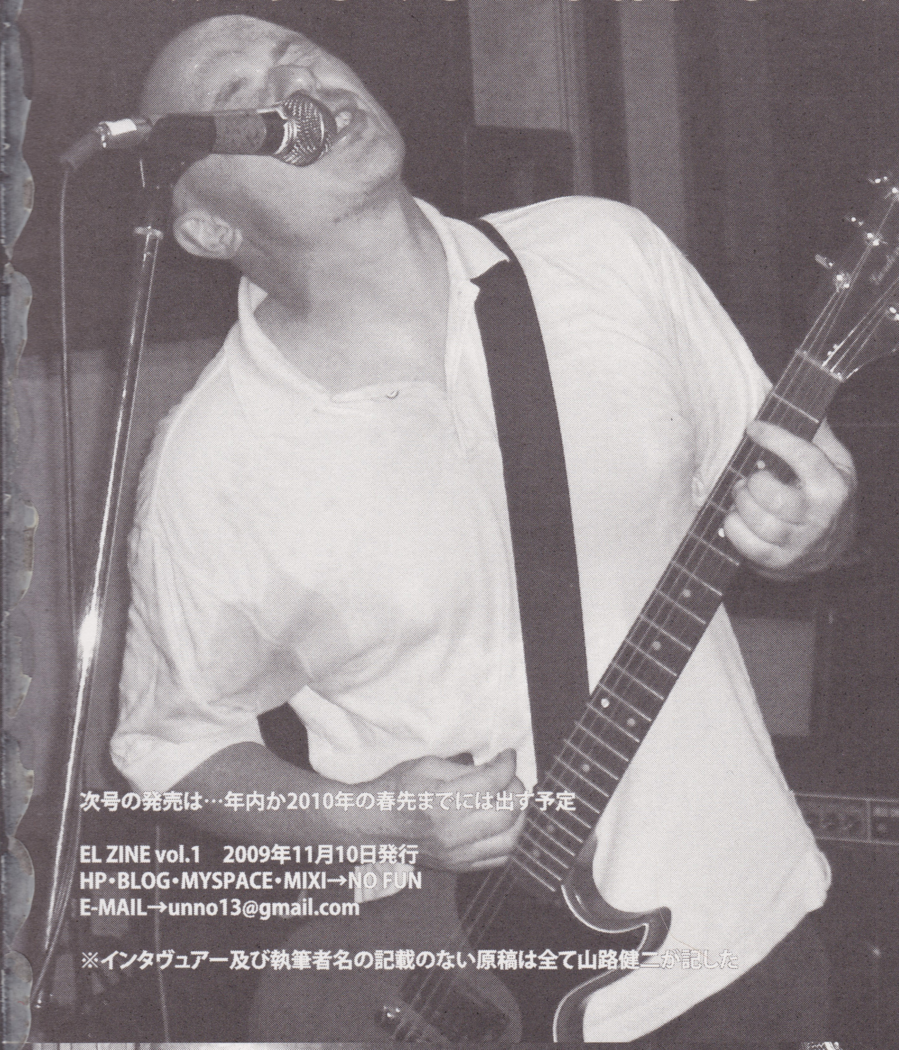
■最後に、Ozeさんにとってパンク/ハードコアはご自身の人生に何をもたらしましたか?

「パンク、ハードコアは自分自身と向き合うことから視野を広く見れる様になったきっかけを感じさせてくれました。自分の想いを自由に自分の足で動いて行けばと、単純なことにも気付かされ、自分自身に可能性が見出された気がします。強い気持ちでぶれない想いでいればなんとかなるんだと。人の揚げ足や愚痴を吐いてばかりのつまらない人間になるよりか、ああしたい、こうしたいと想いがあるなら少しでも自分の足で行動しアクションを起こして行くことの大切さに気付かされた気がします!ハードコア・パンクは自分が生きて行く上での支えであり、永遠の刺激かもしれないです」



SOUTHPORT in YOKOHAMA CLUB24 STUDIO 2009.9.2

always tedious editor's notes



この夏、海外のバンドではEXTREME NOISE TERRORとWORLD BURNS TO DEATH、UNIT 21、IMPERIAL LEATHER、SOUTHPORTなどを観戦した。最初の4バンドに関して説明はいらないと思うが、最後のSOUTHPORTについて、少し触れておきたい。

SOUTHPORTはSNUFFのギターだったSimonも在籍しているUKメロディック・ハードコア・バンド。彼らのステージは圧巻だった。ライヴが始まりギターがかき鳴らされた瞬間"初期SNUFFと同じギター・サウンドだ!"とビックリした。新宿のライヴ・ハウスNINE SPICESと横浜でのスタジオ・ライヴの計2回を見に行ったのだが、共演した日本勢も初めて見るバンドが多く、客層や雰囲気も、いつも自分が行くライヴとはまた違っていてとても刺激的だった。

そんなわけで、フォローする範囲が狭いんだか広いんだかよく分からない誌面展開。多くの思考、異なる嗜好が混在している状況を打ち出せたら良いなと、少しだけ意識しながら今号を進行させていった。

まぁ、2発目というわけで、真価が問われるのかもしれないが、結局はいつも通りやりたいようにやりたいことだけをやった次第です。

前号を購入して、つまらないと思った人もたくさんいるだろうから、来る者拒まず・去る者追わずのスタンスで、好き勝手に続けていこうと思う。そもそもこの本は、キャッチーでもないし間口も決して広くはないと認識している。それでも、"好きだ"と言ってくれる少数の人たちの期待だけは裏切らないよう頑張りたい。

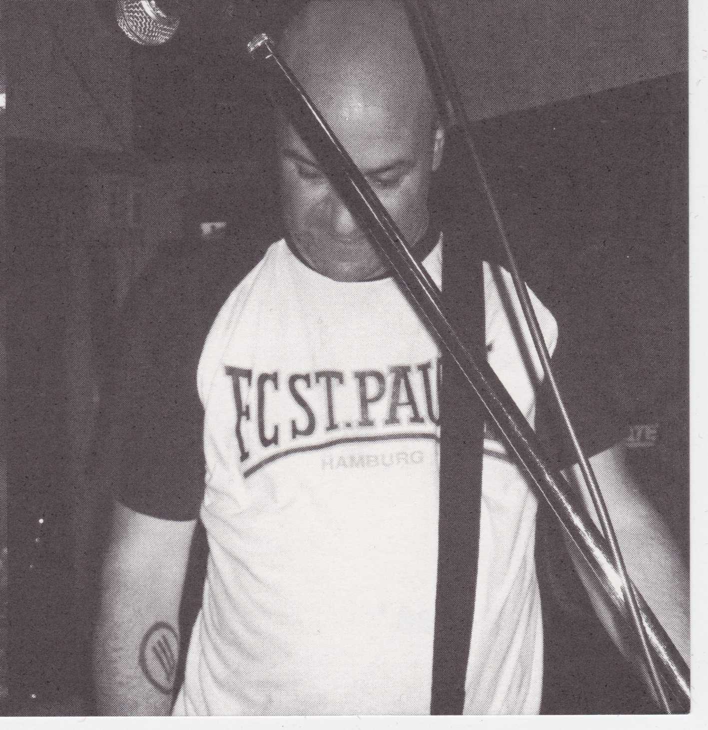
さて、今からPISSCHRISTのライヴに行ってこよう。　　　　発行者　山路健二

次号の発売は…年内か2010年の春先までには出す予定

EL ZINE vol.1　2009年11月10日発行
HP・BLOG・MYSPACE・MIXI→NO FUN
E-MAIL→unno13@gmail.com

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した





EL ZINE ¥500